



地域に発進!!  
**中高生世代**  
居場所からの  
**1・2・3**

児童館や地域における  
中高生世代の  
活動活性化マニュアル



# Contents

イラスト～中高生世代活動の考え方～	2
<b>発想の視点①</b>	
中高生世代活動の必要性と児童館の役割（久田邦明）	4
<b>発想の視点②</b>	
なぜ今、中高生世代の活動が必要か（原　京子）	5
平成19年度　中高生世代活動実態調査のまとめ	6
イラスト～中高生世代に必要な場の考え方～	10
<b>発想の視点③</b>	
中高生世代に必要な『拡がりある「場」』を考える（藤井　玄）	12
イラスト～中高生世代プログラムの考え方～	14
中高生世代を援助するプログラム　様々なステージ	16
<b>発想の視点④</b>	
中高生世代に必要なプログラムの考え方（勝部久美子）	18
イラスト～中高生世代を援助するスタッフの資質～	20
中高生世代を援助するスタッフのチカラ	22
<b>発想の視点⑤</b>	
中高生世代の活動を援助する	
スタッフに必要な資質と技術（水野篤夫）	24
中高生世代の活動「ここが困った！」一問三答	26
<b>発想の視点⑥</b>	
プロセスを見る目～記録の意義とその方法～（吉澤英子）	30
グループ活動記録の書き方と様式	32
叙述体活動記録の様式	39
<b>平成20年度事業の概要</b>	41
モデル事業報告（北海道札幌市）	42
モデル事業報告（東京都世田谷）	48
モデル事業報告（愛知県名古屋市）	54
モデル事業報告（愛媛県松山市）	60
モデル事業報告（佐賀県小城市）	66
ファシリテーター講習会報告（札幌）	72
ファシリテーター講習会報告（東京）	74
ファシリテーター講習会報告（京都）	76
事業のまとめ	78

地域の  
人達との出会い

様々な  
プログラム

専門スタッフの  
アプローチ

一緒に  
やろう!!

心も体も不安定な時期

社会に希望が持てない

# 地域と共に中高生世代の 育ちを支える

自立へ →

地域社会の再生

君が  
必要だよ

地域に  
居場所がない

少し  
話そう!

様々な  
居場所づくり

STAFF  
のんびり  
しようよ

援助のための社会資源が少ない

# 中高生世代活動の必要性と児童館の役割

● 神奈川大学講師 久田 邦明

## 児童館への期待は大きい

やんちゃな中学生を受け入れる住民施設を訪問して地元住民の女性館長に話を聞いた。「彼らが居るのが普通の地域社会の姿だと思います」と語る館長のことばに感心した。20年前のオープン以来、彼らの姿の途絶えることはないのだから、こう考えるしかないという。

話の合間に、正面入口の外に寄り集まる5、6人の男子中学生のところへ向った。「この施設の良いところと悪いところを教えて下さい」と、初対面の大人に挨拶する口調で尋ねると、ピアスを付けたお洒落な中学生が「悪いところはありません。良いところは、雨が降っても居られることです」と実に丁寧なことばづかいで答えてくれた。

十代はいろいろな経験して成長していく時期だから、大人が眉をひそめることをやるかもしれないが、彼ら自身の試行錯誤による成長を願うしかない。この施設を運営する住民たちは、そのことの意味を良く理解している。

児童館も、このような難しい世代への対応を求められている。その期待は大きい。これに応えるにはどうしたらよいのだろうか。

## 無理をしないで、できることから

まず第一に、無理をしないで、できることから始めることだ。これまで主に乳幼児や小学生を迎えてきた児童館に、中高生世代への対応が求められるようになったのは、彼らの面倒を見る学校・家庭・地域社会の力が衰弱したからだ。児童館の現状をみれば、施設の規

模、スタッフの体制、役所との連携など、中高生世代への対応をめぐる課題は山積みだ。周囲の期待に戸惑うこともあるだろう。しかし、この期待に意欲をもって応えようとする人が、ベテランのなかにも、若手のなかにもいる。そういう人が中心になって、無理をしないで、できることから始めるという道があると思う。第二に、中高生活動をすすめる場合の基本は、彼らの話を聞くということだ。

中高生世代には、親や学校教師以外の人と話をする機会が驚くほど少ない。そもそもこれが問題だ。また、わたしのささやかな経験からみても、若者は話を聞いてくれるところへは、やって来るものだ。話を聞くには多くのエネルギーと時間を必要とするし、すぐさま形の見える成果があがるわけでもないが、それでもやはり話を聞くことが基本だろう。

## 地域の担い手を育てる

第三に、これと平行して多彩な〈舞台〉を用意することだ。舞台とは、彼らが活動するための枠組み(条件)のことである。最初はスタッフの身の丈にあった、こじんまりとしたものがよい。彼らとのやり取りのなかでそれを徐々にひろげていけばよい。一から十まで世話を焼いたり、その反対に「自由にやって構わない」などと物分りの良いふりをしたりするのは避けたい。スタッフに求められるのは、自分の力量をわきまえた誠実な対応なのだ。

第四に、将来の進路を考えるための手助けをすることだ。中高生世代への対応では、乳幼児や小学生の場合とはちがって、将来の進路を視野に入れないわけにはいかない。児童館ではこれまで福祉・教育分野などの志望者の相談に乗ってきた。その経験を生かして幅広い分野にわたる支援をすすめるのだ。

そのなかには、地域社会の担い手を育てるという課題も含まれる。若者の地元志向がひろがるなかで、絶好のチャンスともいえる。これを通じて児童館の存在感を示すことができれば、地域の人たちもこれまで以上に児童館を理解し支持してくれるようになるだろう。



久田邦明（ひだくにあき）

大学の講義や市民のワークショップで「子どものころ世話になった大人」の思い出を聞いている。地域の教育力の喪失が言われるけれども、子どもの面倒を見る大人はたくさんいる。近所のおじさんおばさん、駄菓子屋のおばあさん、塾の先生、スポーツ少年団の監督など、子どもの相手をする大人の姿に希望をみる。東京都放課後子供教室推進委員会委員。川崎市青少年問題協議会委員。編著書に『子どもと若者の居場所』。ウェブマガジン連載エッセー「風の声」

[http://dricomeye.net/06\\_kaze/kaze.html](http://dricomeye.net/06_kaze/kaze.html)

# なぜ今、中高生世代の活動が必要か

●NPO法人こどもNPO事務局長 原 京子

今、「若者の自立の遅れ」が社会的問題となっています。これは、自立に向けての土台となる実体験や社会参加の機会が大変に乏しいことが原因の一つであると言えるのではないでしょうか。

中高生時代は、試行錯誤しながら自己を形成していく時期です。また、社会的自立への準備期間もあります。多様な人々と出会い、いろいろなことに挑戦することや、社会の様々な物事に関心を抱き、社会参加の経験をもつこと、そして、仲間やおとなに認められる機会があることなどが、自立への土台となっていきます。そのような観点から、中高生世代が地域社会の中で様々な人と交わり、活動することの意義は大きいと言えます。

しかし、中高生世代の姿が見えるのは、学校か塾か家庭がほとんどです。家庭では、自分の部屋で大半の時間を過ごしていることが多く、生活体験の一つである家の手伝いをしている中高生はほんの一握りです。一方、地域の中の中高生の姿と言えば、「コンビニ」とだれもが答えるほど。親世代では行事や青年団の活動などで、地域で活躍する中高生世代の姿が見られたのですが、コンビニ以外の場所での中高生世代の姿が想像できなくなっていることと「若者の自立の遅れ」を結びつけるのは短絡的すぎるでしょうか。

このような現状に、児童館はどのような役割を果たせるのか。児童福祉や青少年育成に関わるものとして何ができるのかが、今、問われているのだと思います。

児童館は子どもたちの居場所であり、また、自由に来館する子どもたちを待って、楽しいプログラムを提供することで子どもたちのニーズに応えてきました。しかし、青少年の育ちが揺らいでいる今、児童館には今までの役割に加えて、新しい役割が求められています。それは青少年の自立支援も視野にいれた子ども育成であり、その具体がまさにこの事業が取り組

む「中高生世代の活動の活性化」なのです。これは児童館ばかりでなく、公民館などの青少年が利用する施設や青少年育成に関わるすべての人が、意識して取り組まなければならない時期にあると感じています。

青少年の自立において、地域社会は重要な役割を果たす場です。地域活動への参加は中高生世代にとって自分が社会の一員であることを自覚できる良い機会となります。青少年にとっての地域活動の意義を認識し、地域に根ざす施設として地域と中高生世代をつなげていくこと。「子ども」という専門性をもった施設としての特性を活かし、中高生世代が地域に積極的に参加できる活動やプログラムを提供していくこと。そのような役割が児童館に求められています。

この実現のためには、職員が積極的に地域と関わることが必要となります。館の中で待っているだけでは、地域の現状を知ることもできないし、地域の情報も集まりません。また、待っているだけでは中高生世代はなかなかやってきません。学校と連携したり、すでに活動している中高生世代と繋がったり、「子ども」をテーマにしたコミュニティ・ワーカーとなり、児童館が地域における中高生世代の活動の推進役となることが期待されています。



原 京子(はらきょうこ)

「特定非営利活動法人こどもNPO」の事務局長および理事。1987年、児童館の運営と自然との接觸を促進する活動を開始。以来、児童館の運営と自然との接觸を促進する活動を継続。2001年「こどもNPO」を発足。いろいろな場面で児童館の運営と自然との接觸を促進する活動を継続。2003年、児童館の運営と自然との接觸を促進する活動を継続。2005年、「ピンポンハウス」を開設。他に日進市の10代の居場所づくり事業などあわせて4つの居場所づくりにかかわる。

# 昨年度の実態調査のまとめ

～地域で活動する中高生の実態の全国調査(平成19年度)～

本事業『児童館における中高生のボランティア活動活性化事業』は「児童館の中高生世代を対象にした活動が、居場所、生きがい機能として効果を發揮すると共に、メンバーの自律性を高め、より豊かな市民性と道徳性を養う機会となるための事業のあり方を模索し、今後の児童館活動の一つのあり方を提案すること」を目的にしている。この調査研究は平成19年度から2カ年計画で、1年目に中高生世代事業の行政や施設での取り組み状況と活動に参加している中高生の実態調査を実施した。調査結果から現状を把握し、居場所としての要素や活性化の要素の共通因子や傾向を見出した。調査前には仮説として「中高生自身に魅力ある居場所は、社会性のある活動（ボランティア活動）を支える基盤になりえる」、または「社会性豊かな中高生世代の活動（ボランティア活動）は、居場所になりえる」と考え、調査結果を参考にして中高生世代がいきいきと活動し、社会の中で活かされる事業のあり方を模索し活動の方向性をまとめることを計画した。第2年次はそのまとめに基づいてモデル事業等を全国で計画・展開し、全国の児童館に向けた提言をまとめ、今後の児童館活動の一つのあり方を提案する計画である。

## 児童館・行政アンケート結果と考察

地域における中高生世代の活動の今後の展望

### ■アンケート調査の実施について

全国の実態を把握するために行政と児童館・子ども会等の青少年団体を対象にして、中高生世代の活動に関するアンケート調査を実施。郵送により全国の児童館（4937か所）、都道府県・区市町村自治体の教育委員会青少年教育主管課及び児童福祉主管課（計3903か所）へ行うアンケートと先駆的事例を持つ諸機関への聞き取り（全国9か所）を実施した。

### ■児童館の中高生世代事業～居場所からボランティアへ～（事業のねらいの現状）

#### ◇子どもとしての中高生世代・居場所としての児童館

児童館のねらいとして多い回答は「居場所」「異年齢交流」などのキーワード、地域に密着した存在として特性を表している。身近な自由来館施設であり、中高生世代が「ふらり」と訪れるからこそ、地域におけ

る児童館の担う役割は大きい。そしてまずは居場所となることを目的にしている傾向がある。そして、次に続くのが「小学生のモデル」「活躍の場」「ボランティア」という他との関わりを示す内容を含むキーワードである。児童館の役割として、自身の興味・関心の要求を満たすことがねらいとして大切にされ、その上でより高次な「ボランティア」などの利用を考えている姿を感じる。

表1. 中高生事業を実施する意義[児童館調査](件)

1	中高生の居場所づくり	54
2	異年齢交流	49
3	小学生の目標・モデル像	25
4	地域交流・活性化	20
5	ボランティア	18

#### ◇児童館の活動の広がり

回答は少数だが児童館には「悩み相談」「要保護児童対策」「心の成長」など思春期を支える日常的な地域の力となることをねらいとして活動を実施している実態があり、大切な観点である。地域の日常生活に密着し把握できる施設として児童館の役割は大きく、その特性を活かし、個々に寄り添う視点が、特に思春期を迎える子たちにとって重要である。

#### ◇地域の担い手として

行動が多様化し範囲が広がる中高生世代を地域のさまざまな目で見守ることは、とても有効であり有意義である。しかし一方で、一般的な児童館の実態は館の中で完結する活動が多い。地域の子たちが来館しているが、地域との連携が不十分で、社会資源である自治会やNPOなど「地域の大人」の協力や活用が十分でないことが多い。今後の課題として児童館では、身近で自治的な活動・市民的な活動について考える機会を中高生世代と共にしていく必要を感じる。

### ■行政の中高生世代事業

～街の中でいきる中高生世代～

#### ◇人とつながり、地域へつながるシステム

行政のねらいについて、その活動の「目的」「意義」を尋ねる設問に対する多い答えから考えると、キーワードとしては「リーダー育成」「ボランティア」「子ども会活性化」「社会参加」「親の意識の醸成」「人材育成」などが続く。行政の観点として、地域に対して関わりを期待するとともに、次の世代を支える若い人たちを地

本事業では児童館の中高生世代の活動を活性化するための第1歩として、全国の行政（福祉・教育）、児童館への事業調査、中高生世代への意識調査のアンケートを行い、中高生世代に対し学校外・地域で行われている居場所活動・社会参加活動などの実態の把握に努めた。

域へ取り込み、自治的に支える仕組みを育てていくシステムを構築しようとしている姿を感じることができる。また、地域との関係が最も関係が薄くなる中高生世代に対して、積極的にアプローチをし、役割をつくりだそうとしている様子がうかがわれる。

表2. 中高生事業を実施する意義[自治体調査](件)

1	地域交流・活性化	54
2	中高生の成長の場	49
3	ボランティア	25
4	異年齢交流	20
5	自己理解・他者理解	18

#### ◇地域での活動支援

アンケートで述べられている「リーダー育成」については、地域での活動を支援する者、自治的な活動を支える者として、または指導者の候補として長く育てていくことを表していると考える。同じく「子ども会の活性化」についても、中高生世代が関わることで、地域活動の基盤となる子ども会活動の活性化をねらうのと同時に、次の世代に続く子たちのモデルになることも期待するものと考えられる。

#### ■アンケートからの考察

##### ◇地域の中高生世代を見守るミクロとマクロの目

###### (中高生世代事業の実施状況)

今回の中高生世代事業の実施状況調査では児童館の約8割が実施、行政では約2割の結果となった。行政機関のアプローチが非常に少ないので明確になつたが、中高生世代の豊かな育ちを保証するためには、地域社会という共同体をミクロとマクロの目で見ることが必要になってくるだろう。この数値の差は、児童館と行政機関の連携が弱いことを示しているかもしれない。児童館という現場と行政機関の連携を今後一層密にすることが課題として考えられる。

##### ◇地域全体の力を活用した中高生世代プログラム

###### (中高生世代事業の課題の現状)

児童館、行政共に、半数近い職員が中高生事業に関してなんらかの不満や悩みを持っていることがわかつた。その理由として、児童館は「内容」「メンバーの質」、行政は「学校との連携」「指導者不足」がキーワードとなり、「参加人数の減少」は共通の悩みである。し

かし、理由には違いがあり、児童館は来館する中高生世代との直接対応から生まれてくる課題、行政は地域社会全体をとらえた課題とその傾向を色分けができる。それぞれの課題を共通のものとして受け止め、中高生世代にとって魅力的なプログラムや対応が、地域全体の力で実施されるよう考えていく必要を感じた。

表3. 中高生事業をする上の悩み[児童館調査](件)

1	参加人数が少ない	139
2	事業内容について	49
3	中高生の関わり方・問題行動	42
4	時間の調整が困難	35
5	施設の環境	34

表4. 中高生事業の課題[自治体調査](件)

1	参加人数の確保	179
2	学校との連携	67
3	指導者の質の確保	37
4	内容（マンネリ化）	31
5	メンバーの質	21

#### ◇「児童館」と「行政」の活動の現状

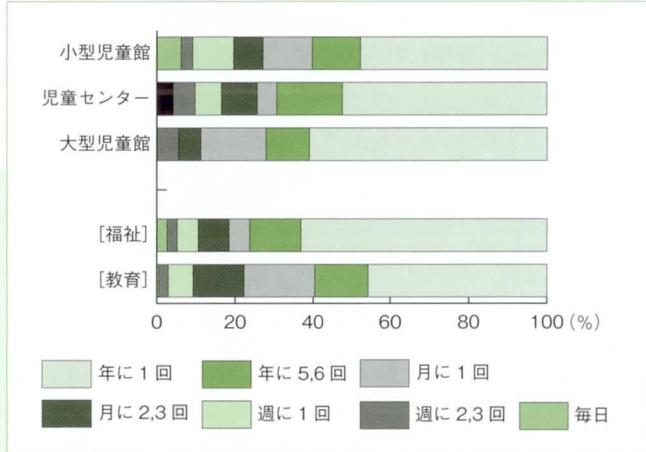
「児童館」、「行政」ともに、「今後の事業に対する期待と方針」を自由筆記で調査した。回答をカテゴリー分けしキーワードを抽出すると、児童館、行政共に、「自主活動」「人数増」「事業内容の充実」が多くみられた。この3つのキーワードは、それぞれのスタッフが日頃に事業展開から感じる課題であり、同時にそれは、現代の中高生世代に向ける事業として重要な展望を示すキーワードであると考えられる。

#### ◇自主的な活動を推進するために

アンケートの自由記述欄には、「自ら創り出す活動」「自主性を大切に充実感や達成感を感じる支援」「自ら企画する自主的な関わり」（以上、児童館）、「毎年同じ内容ではなく高校生自身で新しい企画を期待」「指導を極力少なくし、学びたい事を」「参加者と共に企画し、地域との関わりを多くもつ」（以上、行政）等、中高生世代の自主的、主体的な活動に期待が多い。

しかし、大人の関わり方の調査では「指導者」としての関わり方が多い。もちろん、「助言者」「サポート」という意味も含んでいると考えられるが、指導的側面が

図1. 中高生対象の事業の頻度



強いためとも考えられる。中高生の自主的な活動の確保については、スタッフとの関係づくりが大きな課題となってくるだろう。

#### ◇参加者を増やすために

悩みや課題の一番に挙げられるのが「参加者の減少」であり、児童館、行政両者の今後の期待としてその確保が挙げられる。事業の客観的な評価の一つの視点として、「参加者数」は有効な視点だが、事業の評価として結びつける前に、現代の中高生世代の生活実態に合わせた事業の在り方を考える必要がある。児童館のサイドから考えると、夜間開館も一つの方法だがそれは、容易ではない課題であり、その前に考えなければいけないのは事業の実施頻度かもしれない。アンケート調査で事業の実施頻度を聞いたところ、児童館、行政共に一番多かったのが、「年1~2回」だった。この結果では、忙しい中高生世代がその活動に参加する機会を得るのは難しい。中高生世代の継続的な活動を行うための、事業頻度をもう一度見直す必要を感じる。

#### ◇事業内容の充実を図るために

中高生世代のメンバーからのアンケート調査の結果からメンバー自身が活動に充実感を感じるのは「目標を達成したとき」という結果がでた。彼らを引き付けるのは、プログラム内容が一番重要ではなく、自分がどれだけ全力を出し切って、目標を達成したかということが重要なと理解できる。彼らが求めているのは、表面的な面白さよりも、もっと深い部分で心を揺り動かす体験なのだろう。プログラムの在り方をもう一度考える必要がある。

また、児童館、行政共にキーワードとなっている「行事の企画運営」「ジュニアリーダー」「ボランティア活動」のとらえ方も考察してみる。「自分の欲求を我慢して、人のために行う活動」というよりも、「地域を自分たちで支える自治的・市民的な活動」ということで理解し、

自分の好きなこと、やりたいことが、気軽にできるところから始まり、その喜びを地域や児童館でもっと多くの人の喜びにつなげていけるような活動展開が必要だと考えている。

### 中高生世代のメンバーへの アンケートの結果と考察 ～中高生世代の今を考える～

#### ■アンケート調査の実施について

活動の実態を把握するために、全国で活動を実施している児童館や団体・施設へ依頼し、地域・施設等で団体活動に参加している中高生世代を対象に（全部で53施設・団体、合計384名）意識調査を実施した。今回の調査の目的は児童館における中高生世代のボランティア活動の活性化である。そこで重要なことは、自身がより主体的に参画してくる姿勢であると考える。中高生世代の主体性を高めるために、私たち現場のスタッフは様々なアプローチを行う。しかし、思春期後期の多感なメンバーの気持ちが読み取りにくいというのが、正直な感想だろう。このアンケートでは、できるだけ素直な中高生世代の声を聞くことによって、彼らが主体的に活動に取り組めるための要素を探ることを考える。

#### ■中高生世代にとって、活動と自身をつなぐ大きな要素は「人間関係」

#### ◇活動のきっかけづくり

活動のきっかけで一番の回答は「友達の紹介」。活動開始時から人間関係がキーになっている。児童館と行政のアンケートの結果での募集方法の上位は、ポスターや学校での呼びかけになっており、口コミは下位に属しているというギャップがある。中高生世代が主体的に活動するためには、彼ら自身も責任を持つことが大切ではないかと考える。「この活動へみんなも友達を誘って」と呼びかけることは、彼らの主体性を喚起し、同時に彼らのネットワークを活用した効果的な募集方法となるはずである。

#### ◇やっぱりグループワークの活用が大切

「活動を通して何を得るか」への設問の回答は「友情」や「人間関係」が非常に多い。中高生世代は人とのつながりによって成り立つといつても過言ではない

図2. 募集方法(複数回答)

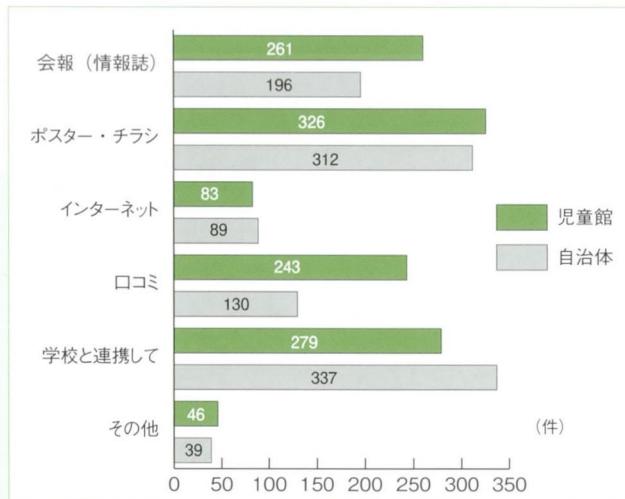


表5. 活動をどのように知ったか[中高生調査]

1	誰かの紹介	288
2	ポスター	55
3	会報誌	37
4	インターネット	4
5	無回答	21

い。「友情」という同世代の関係、「人間関係」という子どもや地域の大人たちとの関係、この2つの要素がある。

まず中高生世代の事業を立案のポイントとして「人の交流」をその要素に加えることが重要。子ども(赤ちゃん、小学生)～大人、地域の様々な世代の交流から生まれる暖かい関係が、中高生世代の活力ある活動を生み出す。同時にそれは、自己肯定感を醸成し、人生を豊かに生きる力ともなっていくことにつながる。「友情」というキーワードについては、中高生世代が同世代の様々な人間関係の中で成長することであり、これらのプロセスに意図的に関わり、メンバーの相互作用を活用しながら、より豊かな関係に昇華させていくことが、スタッフのグループワーカーとしての役割であり、中高生世代への関わりではとても重要になってくる。

### ■魅力的な活動のキーワードは「達成感」

アンケートで活動に充実感を持つ時はどんな時かという問い合わせに対して、「目標を達成したとき」という回答が1番多かった。また、活動内容は誰が決めているかとい

表6. 活動で得たもの[中高生調査]

活動で得たもの	
友情	66
人間関係	37
技術	28
子どもとの交流	21
心の成長	18

## 昨年度の実態調査のまとめ

う問い合わせに対して、1番多かったのが「大人(スタッフ)」という回答だった。この結果から彼らがより達成感のある活動を展開するためには、スタッフがメンバーと共に活動内容を決定するプロセスを設け、その中で彼らの意見とスタッフの活動目標を上手にリンクさせることが必要だと考えられる。

### ■スタッフはいざという時の助け舟、でも…

「スタッフにどんな関わり方をしてほしいか」の設問では1番多かった回答が「困った時に助けてほしい」だった。中高生世代のメンバーはやはり自分達の力で出来るだけ活動したいと考えていることがわかる。しかし、他の上位の回答は「親しみやすく接してほしい」、「いけないことは、いけないと言ってほしい」だった。メンバーはスタッフに、何も言わずに見ていてほしい訳ではないことがうかがえる。活動を共にする者として、共に悩み、意見を戦わし、喜びを共有したいという表現なのだと考えられる。そして、時には年長者としてアドバイスもほしいし、安心してのびのびと活動するための精神的な支えになってほしいのだろう。中高生世代に関わるスタッフには、彼らにとって本当に必要な援助を感じ取る豊かな感性と鋭い観察力が必要である。中高生世代と付き合うことは、私たち専門スタッフが持つ対人援助技術の質を直接問われていると考えなければいけない。

表7. 中高生が希望する大人の関わり[中高生調査]  
(選択肢より複数回答:上位3項目と下位3項目/単位は人)

1	困ったときに助けて欲しい	177
2	親しみやすく接して欲しい	125
3	いけないことはいけないと言って欲しい	112
	(途中省略)	
18	怒って欲しい	13
19	いつも一緒にいて欲しい	11
20	甘えさせて欲しい	7



# 中高生世代に必要な 広がる 自己表現の場





# 中高生世代に必要な『拡がりある「場」』を考える

独立行政法人 国立青少年教育振興機構  
国立オリンピック記念青少年総合センター企画指導専門職

藤井 玄

## 「場」とは

私の家の横には小さな公園がある。平日の夕方は、いつもそこから子どもの声が聞こえてくる。この2年間、その公園を気にしながら生活しているが、1つ不思議に思っていることがある。それは、公園で遊ぶ子どもは皆で遊んでいないことである。小さな子どもと親が遊んでいたり、2~4人の小さなグループがそれぞれ分かれて別々に遊んでいる。こんな光景が毎日見られる。

ここは公園であるが、子どもにとっての遊び「場」なのであろうか。そんな疑問を日々持っている。そもそも、遊び「場」の「場」とは何であろうか。

手元にある「『新明解国語辞典』第4版」で「場」を調べてみると、①物事が行われている環境としての所（時）。〔物理学では、力が及ぶ空間を指す。・・・〕②〔劇で〕ある場面を中心とした1区切り。③取引所への立合い（場）、と記載されている。物理学では、ある存在が、別の場所にある別の存在に影響を与えること、あるいはその影響を受けている状態にある空間を指すらしい。

広「場」、盛り「場」、修羅「場」・・・様々な○○「場」。そう思うと、ある空間の中で人と人が影響を受けあっているイメージをその言葉から連想する。

## 中高生世代にとっての「場」を考える

次に中高生世代とはどんな世代だろうか。中高生世代とは、大人になる1歩手前の段階で現実と理想にまだギャップを多く抱える世代である。友人、異性、自分の将来など悩みを抱えやすい世代であると考えることもできる。

文部科学省による「平成19年度学校基本調査速報」を見ると、中学校全生徒に占める不登校の割合は、2.86%である。実際に35名に1名は不登校中であるという。さらに、平成15年3月に厚生労働省が行った調査では、ひきこもっている人の60%以上の人気が過去に不登校の経験があることがわかった。様々な要因で不登校になったりするが、不登校になると、学校でお互いが影響し合える「場」はできなくなる。また、学校でいじめを受けた中高生の場合、仲間がだんだん減っていき、孤立化していく傾向がある。コミュニケーションができない空間（しないのではない）ほど、怖いものはない。

まず一度孤立した中高生世代の場合を考えると、彼らが一人でも気軽に来てくつろげる空間をつくる必要がある。孤立した中高生は、次への意欲を失いがちである。私の知っている青少年施設では、エントランス付近を自由な空間にし、楽器を弾いたり、しゃべったり、食事をしたり、漫画を読んだり、何でもできる空間をつくり、中高生世代が入って来やすい雰囲気づくりをしている。

では、中高生世代にとって、お互いが影響し合える「場」とは、どんな「場」が考えられるだろうか？

それは、ありのままの自分が出せる空間があり、プラス面もマイナス面も含めた自己表現が出来る空間であると考えられる。それと同時に、自分を受け止めてもらえる人がいる空間であると考えられる。人は信用しないと、本音や悩みを打ち明けようとしない。自分を受け入れてくれる空間には、もう一回会いたくなるような、



藤井 玄（ふじいげん）

独立行政法人国立青少年教育振興機構国立オリンピック記念青少年総合センター企画指導専門職。千葉県松戸市出身。大正大学在学中、カバディに出会い全日本大会で優勝する。卒業後、カバディ普及活動に携わり「これがカバディだ!」(大村書店)を出版する。その後、教員を目指すスクールインターとして渡米するが、米国で社会教育の大切さを学び、帰国後、社団法人青少年交友協会に勤務する。平成13年に独立行政法人国立青年の家に採用され、国立岩手山青年の家・国立大洲青少年交流の家を経て、平成19度から現職。

気になる人が必要である。

出会いは、今生きている実感を生む。そして、他者との関わり合いは様々な事象を誘発し、行動する力を生み出す。他者に必要とされ、認められれば、さらなる行動力を生み、自分を高めることも可能である。そんな「場」が、中高生世代には求められる気がしている。

### ● ドイツの体験とまちづくり事業

昨年、「日独学生青年リーダー交流」事業の副団長になり、ドイツに2週間滞在した。今年、社会教育に携わり12年経つが、ドイツで見てきた活動には、目からウロコが落ちる思いであった。3つの青少年施設・4つのボランティア団体関係者と意見交換をしたが、そこに共通していたことは、子どもの興味・関心を第一に考えていることである。ドイツの滞在プログラムを企画した女性の社会教育者は、こんなことを言っていた。

「社会教育において、『1人の人間として認知すること』、これはとても大事なことである。どんな子どもにも、1つは得意なものがある。それを見つけることは学校外が多い。それを見つけ、認めてあげることは社会教育者の役割である。個人主義が発達した社会では、他者を認めていくことはまだまだ足りない」

そして、社会教育者が子どもの興味・関心を伸ばし、社会との接点をつくり出し、その成果を地域に発信する。それを地域にいる大人が認めることで、子どもは大きく成長すると話していた。

実体験を思い起こすと、当センターでは過去5年間、夏休みに約1週間かけて、中高生のためのまちづくり事業を実施している（今年度は中学生のみ）。そこでは、中高生の主体性を育むために、自分たちでまちの情報を聞き取り調査した後に、まちに役立つ企画を自分達で考え実行する企画を行っている。我々職

員やスタッフは、企画の目的だけは安易に変更させないように決め、中高生が悩んでいることに対しての課題整理や助言は与えるが、一切の決定権は彼らに委ねて実施している。

私が担当した年の最後に、中高生は「縁日」を行った。予想に反して、地域の子どもや大人が約150名も来て成功裏に終えることができた。縁日統括者（高校1年女子）は、来訪したたくさん方々から「楽しかった」、「おもしろかった」と声をかけられ、とても満足した様子で我々に語った。「1週間でこれだけのことができたのだから、苦手なこともこわくない!」。

また、参加した中高生とうまく関係がつくれない高校2年の女子がいた。初めは、大人と話せずに口ごもっていたが、自分の依頼事を敬老館の職員が快く対応してくれたお陰で、自信を持ち、その後面識のないまちの人でも気軽に話すことができるようになっていった。最終日には、「縁日」の広報を務め、大きな声でビラ配りを一生懸命していた。

このまちづくり事業は、日常の「場」の活動ではないが、中高生世代にとって、このように身近な社会と接点を与える活動は、福祉・教育関係の「場」を捉える上で必要になっていくと思われる。

### ● 拡がりある「場」へ

最後に、中高生世代に必要な「場」をまとめると、中高生世代同士、あるいは大人と中高生世代がお互いに影響し合う空間であること、自分の存在が認められる空間であることが第一に求められる。その上で、地域の児童館職員並びに社会教育関係職員が心がける「場」としては、中高生世代の興味・関心を伸ばすように図り、社会との接点を導き出せるような『拡がりある「場」』をつくっていけたら、中高生も我々もまちももっと元気になっていく気がする。



居場所

自己肯定感

自立

一緒に  
やろうぜ

みんなで  
やれば、もっと  
すごいぞ

もっと  
おもしろく  
しようぜ

参加から  
参画へ

組織化

目標の拡大

## ステージ 4

豊かな地域づくり・施設の成長

エレベーター



# 中高生世代を援助する プログラム 様々なステージ



# 中高生世代を援助するプログラム 様々なステージ

施設や地域で中高生世代の豊かな成長を保障するためには、専門スタッフの意図的な働きかけが必要です。このページでは、働きかけの一つの手段として、「プログラム」に焦点をあててみたいと思います。施設や地域で、中高生活動のプログラムを立案・計画するときにヒントとなる考え方とその事例を提案いたします。ここに書かれた内容は、札幌・東京・京都で行われた専門職を対象にした「地域における中高生活動 ファシリテーター講習会」で実施したワークショップの成果を、運営委員会で整理し、検討を加えたものです。

## ●プログラム発展の要素

様々なプログラムを実施するときに、ひとつひとつのプログラムを並列に捉えるのではなく、メンバー(グループ)のニーズ、準備性、発達の段階に合わせて捉えていくことは大切な視点です。ここでは、中高生世代のメンバー(グループ)が、より社会に向けて開いていくための、段階を追ったプログラムの捉え方を提案します。

この段階的なプログラムの捉え方は、あくまでも一つの目安として受け止めてください。実際には必ず「第1から第2、

第3へ」と順を追って進んでいかないケースも多いと考えます。いきなり『第3ステージ』から始まることや、「第3から第2ステージへ戻る」こともあるでしょう。ここで大切なのは、中高生世代にアプローチする専門職として、今まで実施されているプログラムを客観視し、次の目標を視野に入れておくことと、彼らとの信頼関係を基盤にして、共に考え、共に悩みながら、よりよいプログラムづくりに取り組んでいくことだと考えます。

### 第1ステージ～居場所から始めよう～

#### ●居場所づくりのプログラム

中高生世代が、施設に対して愛着や居心地のよさを感じるよう働きかける

#### ●生活力(自立)へ広がるプログラム

自分自身が生きていくために必要な技術や知識を身につける。また自分の意思で自分のしたいことを実行する

#### ●心の育ちを育むプログラム

自分が大切に思われていることを感じられたり、違う世代の人と触れ合う機会

#### ●自己肯定感を醸成するプログラム

自分自身を受け止めてくれる、また信頼できる人とじっくり付き合えるまた、様々な活動を通して、自分の事を認めてもらえる機会

### 第2ステージ～より大きな目標へ～

#### ●目標が拡大していくプログラム

たとえば音楽を楽しむ所から、チャリティイベント実施へ目標が拡がる

#### ●参加から参画へステップするプログラム

よりメンバーのアイデアや自発性を生かしたプログラムへ

#### ●メンバーやグループの組織化を促進する プログラム

個人からグループへ、グループとグループの連携へ

### 第3ステージ～より広がりのある交流へ～

#### ●他者へ発信していくプログラム

自分達の活動を、他の人達や地域社会へ伝えていく

#### ●より広がりのある交流プログラム

仲間同士の交流から、地域が違う、世代が違う人たちとの交流へ

#### ●地域社会へ広がっていくプログラム

施設を越えて、学校を越えて、地域にひろがっていく

#### ●社会全体へ広がっていくプログラム

社会と触れ合う機会の創出を通して、社会的自立へ

### 第4ステージ～共に地域社会の再生へ～

#### ●施設や地域の成長

中高生世代が施設や地域で自発的に活動することによって、新しい課題、ニーズを発掘し、それに対応する様々なアクションを起こしていく。それは結果的に施設や地域の成長、再生につながっていく

## ●プログラム企画のヒント

各講習会で展開したワークショップで提案されたプログラムアイディアから抜粋して報告いたします。各施設、団体で中高生世代へのプログラムを企画するときのヒントとしてご活用ください。

### ■食べる

#### 『HOT! EAT! HEART!』

みんなで軽食を作って食べる。食べていると自然と会話が弾み、心も身体も暖かくなる。  
また調理の仕方、片付けの仕方を身につけ、自炊の気持ちを実感し、自立への一歩とする。

### ■出会い

#### 『街の“素敵な人”発見塾』

どんなことでも、自分で責任をもってやりきって、面白がっている人と出会わせる。木工とか、音楽とか、植物育てとか、手作り楽器とは、お菓子作り、パン作りの職人さんなど。

### ■話す

#### 『よろず医院待合い室 お茶・お菓子付き』

学校でも家でもなく、ほっこり和んで、気の合う友達と話したりぐちったり、時に信頼できる人に相談なんかもできて、今日の自分をスイッチオフにして、明日のオンにつなげられる場所

#### 『大人のちょっとここがおかしい』

月1回、テーマを持って、地域の大人を交えて、社会、家、友人関係、学校、大人のちょっとおかしいということを話す。

### ■気づく

#### 『心のアルバムづくり』

生まれる時や、赤ちゃんの時の写真、または気に入った写真、手紙など何でも良いので持ってくる。  
そのときの思いをたどり、集まった中高生たち、または職員に話しをする。確かに、楽しかった瞬間や大切にされていたと感じられた時が、あったことを思い出すきっかけづくり。

### ■活かす

#### 『特技を皆に広めようツアー in ○○』

自分の好きなことを幼稚園、小学校、施設等を回り、楽しさを広める。また知ってもらいたい、共に楽しむ、教える。  
(個人、グループでも可)

### ■活かす

#### 『じどうかんレッドカーペット』

(ちょっとボランティア・ショータイム)

自分のできる技(絵本を読んだり、皿回しをしたり、歌をうたったり、絵を描いたり、壁面装飾を作ったり、小さいこと遊んだり)遊びに来ている人に見せる。

### ■地域へ

#### 『わがまちフェスティバル』

中高生世代・子育て世代から年配……いろいろな世代が場所と時間を共有しながら、いろいろな(サークル)活動をする場の提供・運営。その活動の中で、接点を見つけてイベントをしかける。

### ■大人体験

#### 『体験してみよう!いろいろな人の気持ち』

各立場の擬似体験ができる。当事者に来てもらい、困っていることや、知ってほしいことをなどを話してもらう  
例)もし外国人だったら、もし障がいのある人だったら、もし高齢者だったら…

#### 『身近な匠を探そう!!』

職人・職員・商店街の方・漁師・寿司職人、長生きの達人・掃除の達人等を地域から探し出して、インタビュー等を行う。

### ■掲示板

#### 『掲示板等のスペースに「お悩み解決コーナー」を設ける』

小学生からお年寄りまで、日常で少し困っている事等を貼っていく。若さと体力で解決できそうなもの(怪我をして雪はねができない。野球ごっこピッチャーがない)等をピックアップし解決していく。

### ■スポーツ

#### 『チャレンジドッジボール』

小学生ドッジボール大会のスタッフをし、優勝チームは中高生スタッフオールスターズにチャレンジ!

# 中高生世代に必要なプログラムの考え方 ～自己肯定感から社会参加へ～

● NPO法人市川子ども文化ステーション事務局長 勝部久美子

## 自己肯定感の持てる プログラムづくりが基本

中高生世代が、児童館や地域にある施設等に最初に足を運ぶ理由はそれぞれだと思うが、学校とは違う場に自分の意思で来るということはけっこうエネルギーが要ることだと思うし、言葉にはしなくとも、「何かをしたい」という想いはおそらくどの子も持っている。それは私が関わっている子どもたちを見ていて思うことだが、彼らが小学校を卒業し中学生として会ったとき、同様に高校生になったばかりの彼らに会ったとき、「新しい自分をみつけたい」「成長したい」という自分自身に対する期待感を胸に秘めていることを感じとれるからだ。

成長していくことは他者との関わりの中ですか成し得ないことで、中高生世代に限らず、多くの子どもたちが人との関わりが希薄な生活を送っている現状において、地域の中に児童館等の中高生世代のための居場所は重要で、また、活動をサポートする大人の存在は不可欠だ。その居場所において、彼らはどんな場を必要としているだろうと考えたとき、大人は様々な場を想定できる。くつろげる自由な場、身体を動かしたり、楽器を演奏できる場、交流する場、人のためになる活動ができる場等々。中高生世代の彼らもまた、求めているのはひとつの場ではないだろう。大事なのは、すべてにおいて「場所」ではなく「居場所」だということだ。また、彼らが、「何かをしたい、

成長していきたい」という実現に向けて1歩踏み出していくには、自己肯定感が育っているかということが要になる。人に認められた経験の積み重ねが、自己肯定感を育んでいく。自分を好きになることができて、他の価値観を認める力がつき、人を好きになることができるのだと思う。中高生世代のための活動プログラムを考え実施していくとき、この視点をしっかりと持ていなくてはならない。

## きっかけは大人がつくってOK でも話し合いと信頼を忘れずに

居場所として集ってきた中高生世代の彼らをスタッフは丸ごと受け入れ、ひとりひとりを大切な存在として、彼らの気持ちや考えに添うという気持ちを持つことでその間に信頼関係ができる。彼らがそこを居場所だと感じられたら、やってみたいこと、興味のあることが会話の中に出てくると思う。彼らがちょっとでも、おもしろい、やってみたいと乗ってきたら、スタートしてみることだ。前述したようにスタッフが共有しておくことは、プログラムの達成だけが目的ではなく、話し合いや準備の過程の中で彼らがどう人と関わって創っていくかということだ。

スタッフが主導することのないように気をつけなければならないが、きっかけ作りとしてプログラムを仕掛けしていくことがあってもいいと思う。（乗ってくるかどうかはわからないが）私の所属団体が主催する「子どもがつくるまち ミニいちかわ」は、やりたいと最初に思ったのは私自身だった。しかし、これをやるには中高生のアイディアや力が絶対に必要であり、スタートから一緒に考えていきたいと思い、彼らに会う度に内容を伝え、参加を呼びかけていき、取り組んできたものである。今では彼らの年間スケジュールにしっかり定着されている。また、昨年の3月、「100人キャンプ」という事業を行った。青年たちが、普段の接点が少ない幼児から大人まで100人での1泊の交流会をやりたい

勝部久美子（かつべ くみこ）  
特定非営利活動法人市川子ども文化ステーション  
事務局長。岩手県岩手郡岩手町出身。小学生ま  
では野山を遊び場にし、中学ではバレー、高校では  
速記に取り組む。1975年4月太陽神戸銀行に入社  
(現在の三井住友銀行) 8年半勤務。1996年3月  
から、市川子ども文化ステーション事務局長就任。  
趣味は山登り、バレーボール（ママさんバレー歴20  
年）、読書。好きな事は、子どもとあそぶ事、スパー  
ツ番組鑑賞、舞台鑑賞、映画鑑賞。

という企画を出してきた。中高生世代のメンバーは3月下旬に行う中高青交流会（2泊3日）に気持ちが向いている時期だったが、青年たちの呼びかけで11人が参加し、青年と共に幼児や小学生と遊び、交流を盛り上げた。年下の子から慕われる体験や同年代から認められる体験、年齢が近い青年（憧れの対象）やおもしろい大人と関わる経験は中高生世代の人格形成の上で重要であり、いろんな価値観と出会うことにより自分を知る機会になり、感性の土壌が豊かに耕されることで変化や壁にも対応していくけるしなやかさが育っていく。地域に根ざした居場所でこそ、この様なプログラムが可能になると思う。

中高生世代の彼らの発信で実施するもの、大人がしかけたもの、どちらにしても取り組む上で大切なのは、彼らと共に話し合って創っていくことだ。また、大きな行事を行うとき、どこまで任せるかを決めたら、とことん信頼し任せられる覚悟を持つことも大事だ。中には積極的な子もいれば大人を頼りにする子もいる。責任感が強い子は一人でいろんなことを抱え過ぎて、疲れ切ってしまうこともある。スタッフは個人個人の性格をみながら気持ちを緩める場を作ることも忘れてはならない。

実施後のまとめ（振り返り）の中で、良かったことを最大限評価しあい、その後で課題をみつけ、どうすれば解決できるかを話してみる。それが次のプログラムにつながっていくと思う。

## 中高生世代の力で 魅力的な地域づくりを

彼らは、自分たちが楽しみたいという気持ちと同時に、人に喜んで貰えることをしたいという気持ちを少なからず持っているし、自分の世界を広げたいという意欲もある。やりたいと思ったことには驚くほどのエネルギーを出す力がある。ただ経験が少ないために苦手意識を持ち、先に進めないでいるのだと思う。目的に向かって

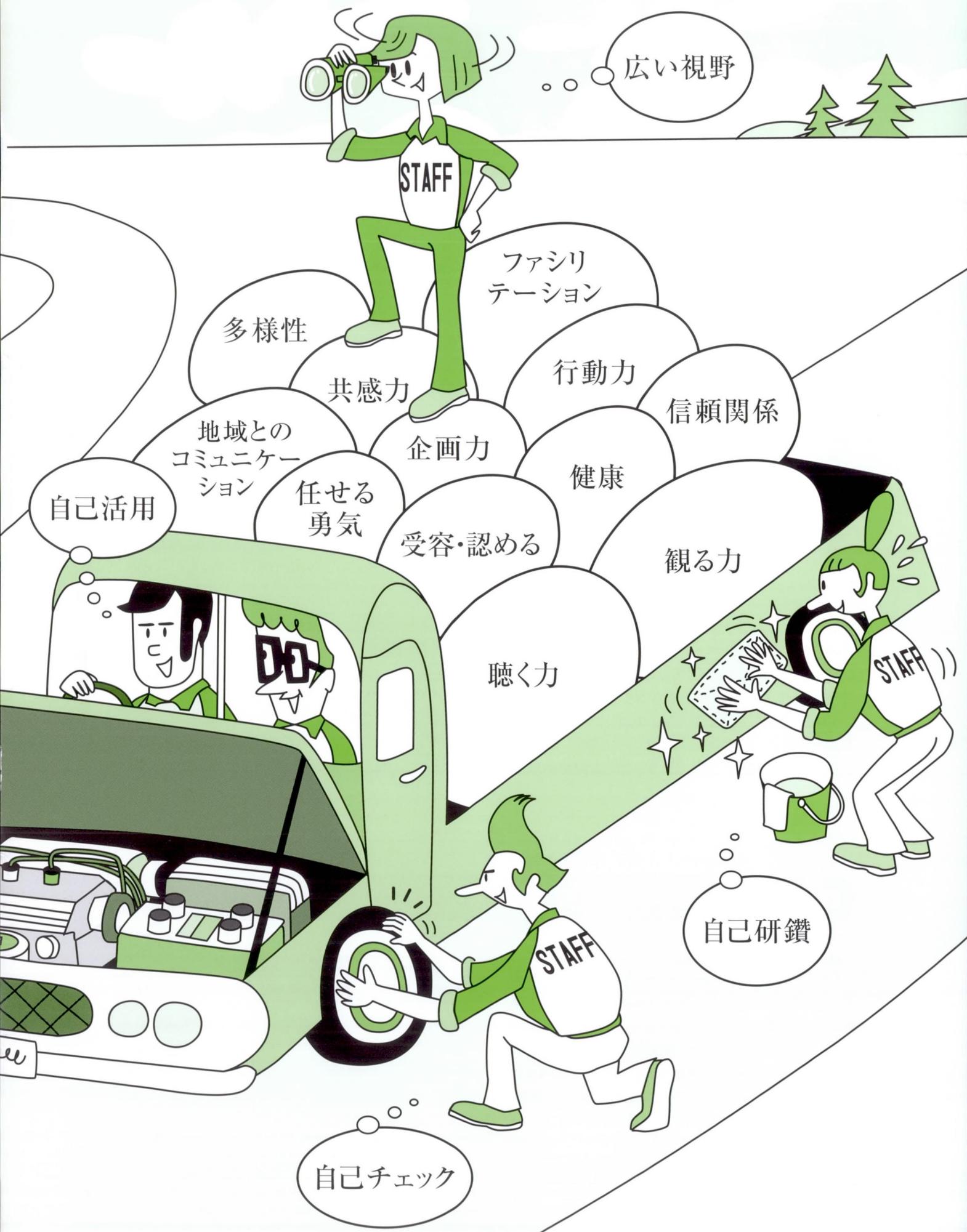
人と関わり一緒に創り上げていく面白さを積み重ねていくことで自信が生まれ、やりたいことが出てくるだろう。

中高生世代が地域の行事に参加しないということをよく耳にする。それは地域が自分の居場所と思えないからであり、必要とされていないと感じているからではないだろうか。中高生世代は、そこにいるだけで、「場」に不思議な活力がみなぎる。彼らが自分たちの視点で地域に関わりその魅力を発揮することができたら、大きな社会力につけていく機会になる。また、小学生の憧れの対象である彼らに惹きつけられて子どもたちが集まることにより、子ども同士が育ち合える地域になっていくことも考えられる。その実現のためには施設のスタッフが地域活動の情報を収集し、地域住民と意識してつながりを持ち、互いの協力関係を継続していくことが必要である。中高生世代にとってどんな地域になっていってほしいか、自分ができるかことは何だろう等話し合い、考えてみる場を持つことから1歩が始まると思う。

## 児童館に期待すること

中高生は自己を見つめ、悩みながら成長していく世代である。彼らにとって学校と家庭以外の場として児童館等のある意味は大きい。公設民営の児童館が増えていると聞く。多感な中高生世代としっかりと向き合い関わっていくには、スタッフ個々人が多様なスキルアップを図っていくことと共にスタッフ同士の連携と、長期の雇用の保障が必須である。また、彼らのニーズにタイムリーに対応していくためには、施設運営におけるスタッフの裁量に幅を持たせるしくみ作りが求められる。これらの課題を解決していくことが、さらに地域に根差した子どもたちに必要とされる場となり、施設として成長していくことになるのではないかと思う。





# 中高生世代を援助する スタッフのチカラ

このページでは、中高生世代を援助するために必要な、専門職の資質と技術に焦点を当ててみたいと思います。ここに書かれた内容は、札幌・東京・京都で行われた「地域における中高生活動 ファシリテーター講習会」で実施したワークショップで出されたキーワードを、本事業の運営委員会で整理し、検討を加えたものです。中高生世代の活動を援助することは、大変な努力と苦労が伴うものです。ここで提案した内容が、日頃の皆様の様々なアプローチを振返り、整理するヒントになればと考えています。

## ●相手を受け入れる受容的態度

中高生世代にとって、児童館のような施設は来ても来なくてもよい施設です。学校のような強制力は一切もっていないと言ってよいでしょう。だからこそ、彼らが施設に足を向ける「何か」が必要になってきます。もちろん、スポーツができる、音楽ができる等の施設設備も要素として考えられます。

しかし一番重要なのは、何よりもスタッフの受容的態度ではないでしょうか。フラッとした軽い話しかけられる雰囲気、自分を1人の人間として尊重してくれる誠実な対応、そして共に時間を共有し喜びや悲しみを分かち合える関係、そんなスタッフの姿勢が中高生

世代との信頼関係を醸成するのだと考えます。

### キーワード

笑顔・気さくさ・気軽さ・普段着・柔軟性・来てもらいやすい  
雰囲気・良い雰囲気づくり・愛・人間性・人柄・人間力・誠実  
な対応・先生でも親でもない身近な存在・一緒に楽しむ・  
時間の共有・任せる勇気・忍耐力・ヒントしか言わない・失  
敗を認める

## ●中高生世代をしっかり『観る』、『聴く』

身体も心も不安定な時期になる中高生世代に対応する時、『観る』ことと『聴く』ことは非常に重要な要素だと言えます。しかし、この世代は大人との関係や距離感に非常に敏感になっていますから、いきなり彼らの内側に踏み込んでいくことはできるだけ避けたほうがよいでしょう。また、私達スタッフが眉をひそめるような荒々しい態度を示す場合もあるでしょう。だから、彼らがどんな態度をとったとしても、距離感を大事にしながら、目をそむけずに見つめることが大切になります。しっかり見て、聴いて、彼らのサインを見逃さないようにしましょう。

### キーワード

- カウンセリング技術
- しっかり見る・目をそむけない・目線が大切・やさしく見つめる目
- 距離感を大切に・適度な距離・共感者になる
- 現状認識・状況を見極める力
- 人間観察・同じ目線(大人としてゆずれないものをしっかり持ちながら)
- 見守り(好きにやらせる押し付けにならない)・やさしく見つめる目

## ●地域社会へのアンテナを磨く

1人1人の自我が大きく育ち始めている中高生世代は、彼ら自身が自分で気づかないほど、様々な不満、悩み、欲求を抱えています。それだからこそ、施設のスタッフだけで対応しようとすると様々な場面で無理が生じてくるのは当たり前のことです。また彼らが地域社会でいきいきと活動し、彼らと地域住民の力で、地域社会の再生を目指すのが、彼らの健やかな育ちを援助する一番大切なポイントです。だから、スタッフは常に地域で何が起こっているか、どこでどんな情報を得るか、どんな

働きかけが必要かに敏感になることが重要といえるでしょう。

### キーワード

- 地域とのコミュニケーション・地域とのネットワーク・人的資源の活用のつながり
- 地域との連携・スタッフが地域を知る、出向く
- 人脉づくり・地域へアンテナをはる・学校との連携・専門機関への橋渡し

## ●自己理解・自己活用・自己研鑽に努める

中高生世代に関わるスタッフが、可能な限りありのままの自分として接することができれば、彼らはそこにスタッフの真実の姿を見ることができ、その時初めて、スタッフと彼らの見せ掛けでない信頼関係を築くことができると言えます。

しかし「対等」「真実の姿」といっても、それは専門職として、暖かく人間的であり、しかも訓練された方法で自己活用するという事だといえます。

自分を適切な方法で活用するためには、まずは自分がどんな価値観を持っているのか、何ができる何ができないのかを知ることが大切になってくるでしょう。

### 自己チェックのキーワード (自分はどんな力を持っているかチェックする)

- 自分の心身の健康さ(自分の中の不健康な部分を知る)・心のゆとり・価値観
- 行動力・すぐ実践・俊敏なフットワーク・軽いフットワーク
- 企画力・引き出しがたくさんあること、アイディアをたくさん持っている
- ファシリテート能力・ファシリテーション的な考え方・引き出す力
- 専門的能力(カウンセリング能力・コーディネートの能力等)
- 奉引力・リーダーシップ・意欲・情熱

## ●スタッフ間のチームワークを築く

前述した自己理解のキーワードに挙げられた能力を、1人のスタッフがすべて身につけることは当然無理だといえるでしょう。自己理解することははある意味、自分の限界を知るということでもあります。

だから施設のスタッフ同士がお互いを補完しあい、中高生世代へ対応していくことが重要になってきます。そしてもう一つ重要なことは、「情熱は決して共有できない」ということを忘れてはいけません。

「私がこんなに一生懸命なのに、あの人は冷たい」という不満からチームワークがギクシャクしてしまうケースがよくありますが、人間の心、情動は共有できなくて当

たり前だと考えたほうがよいでしょう。

「チームワーク」とは「異質の統合」であり、それだからこそ個人では決して生み出すことのできない、力が生まれてくるのだと思います。

### キーワード

- スタッフ間の共有・意識を共有できるチーム・思いの共有・コミュニケーション
- スタッフの橋掛かりとなる行動

# 中高生世代の活動を援助するスタッフに必要な資質と技術

● 財団法人 京都市ユースサービス協会 水野 篤夫

## 望まれる「資質」を羅列すればきりがない

「資質」という話をするとき、こんな話を思い出します。例えば、福祉に関わる職員には、恵まれない環境の中で育ってきた体験を持つ人と、幸せな環境で恵まれて育ってきた人のどちらが適しているのかという議論です。福祉現場で、ケアの対象となる人の痛みが分かるには自分も体験していることが強みだというならば、前者のような体験を持つ人が適しているということになりますし、自ら幸福感を味わった人でないと、それを他者に伝えることが難しいのだから、後者のような体験がないとやりにくいという反論もある訳です。しかし現実を見れば分かるように、どんな体験をしているからどんな役割を果たせるかというのは、一概に分からぬのです。元々、持って生まれた条件を元にしながらも、その上にどのような自己を育ててきたのかが人間にとって大きな部分を占めるのですから、大事なことは自らの体験をふり返り相対化してとらえ直すことと、その繰り返しを経て得られる自己理解（の力）なのではないかと思うのです。つまり、何か特別な財産や持ち物としての「資質」が中高生年代（以下単に中高生とします）との関わりにおいて重要なものとは思わないということです。確かに関わりにおいて役に立つ援助者の質的な力というのはいろいろ挙げられるのですが、そのことより、長所や弱点があったとしても（当たり前!）そうした

自分というものを認めて、それを乗り越えようと格闘すること自体に意味があり、中高生と関わる場面でそうした姿を「正直に」見せていくことに、援助者としての力が現れていくのだと思います。

## あつたらいい技術と基盤的な技能

同様に、あつたらいいとされる技術（や技能）を取り上げても際限がないものです。目的がありそれを実現する手立てが技術なのだから、中高生と関わる際に目的とすることが何なのか明確化することが先で、それに応じて必要な技術が浮かび上がるということだと思います。公共交通機関が不便な地域の青少年施設に居るスタッフにとったら、「車を運転できる」という技能はかなり優先度が高いことになるのです。しかし、それがどんなスタッフにも重要かというとそんな訳はないので、必要な技術というのは状況によって変わるものだとしか言いようがないと思います。

しかし、中高生と関わるスタッフにとって、中高生（や周囲の大人も含む人たち）の表現するものを聞き取り、観取る能力は、共通する基盤的な技術・技能といえるでしょう。そして、それと対になって必要なのは、“自分を使う”能力。これは、上に述べたように自己理解という基盤的な力に基づいたもので、その上でそれを中高生との関わりの場面で用いることができるかが問われるのです。例えば、ある中学生があなたに向かって、攻撃的な言葉を掛けってきたとします。その時に単に怒ったり、「そんな言葉は良くない」と説教したりしても、あまり効果がないことが多いでしょう。そんな場面では「腹が立つなあ」とか「嫌だなあ」といっ

水野篤夫（みずのあつお）

1955年、名古屋に生まれる。高校卒業後、京都にやってきてそのまま居着く。学生時代は専攻である歴史の勉強の傍ら、子どもをキャンプに連れて行く活動（キャンプカウンセラー）にのめり込む。大学を出るときにどちらの道に行くべきか考えるが、「学校の外で教育に関わる仕事をしたい」と考え社会教育を仕事とすることに決めた。京都ユースホステル協会の仕事を経て、若者の大人への成長を支えるユースワークを行う現在の職場で、主に事業全体のコーディネートを担当している。



た思いを隠して対応しようとするより、そうした自分の思いや感情を正直に表現する方が相手に伝わるし影響を与える力を持ちます。「こんな風に攻撃されるのは“私は”嫌だ」「そんな言葉は“私は”腹が立つ」等と。

### 中高生をどうとらえるのか？

また、中高生との関わりにおいて、資質や技術ということとは別に、彼／彼女らをどう捉えるのかということが大事になります。中高生は子どもと大人の狭間にあると考えられるのですが、それを言い換えると、身体的にも心理的にも社会的にも移行期という不安定な時期にすることで、“ある時は大人、ある時は子ども”として振る舞ったり、扱ってもらいたがるのです。とても実行力があるかと思えば、幼い行動を取りたりする。素直だったり人を試そうとしたりする。それゆえ中高生は、ある意味でとても“手の掛かる”存在だといえます。そこで、上のようなよくありがちなやりとりにおいても、一見攻撃的な言葉や態度の裏にあるものを受けとめて返す力量が求められるのです。

### 中高生と関わる専門スタッフとしての考え方

私は、中高生に関わる上で資質や技術よりもどのような考え方や価値観で彼／彼女らと関わるのがいかがいるかということが重要だと考えています。そこで、若者への支援の営みであるユースワークの中で、若者と関わる専門的スタッフに求められると考えている点を紹介しておきます。

- ①まず、若者の立場に立って考えることができること。それは社会的な文脈の中で若者をとらえることも併せてです。
- ②さまざまな自分の中の偏見を見据えること。
- ③社会システムと若者との間の矛盾や葛藤の中で働くのだと意識すること。
- ④実践の中で自らの実践そのものと価値観をふり返ること。
- ⑤自分を公共的な役割のために生きようすること。

詳しく述べる余裕はありませんが、この考え方を中高生との関わりにずらして捉えてみてもらえればと思います。中高生と付き合っていると、さまざまな“困ったこと”をしてくれることがあります。施設にやってきてタバコを吸ってみたり、物を壊してみたり。そんな時には葛藤を感じないスタッフはないと思いますが、そんな若者をそのまま「困った奴」ととらえるのではなく、「困っている若者」として見る視点が求められるでしょう。困った若者を“困っている”ととらえるには、一旦若者の側に立って考えることや彼／彼女のおかれている状況を知ることも重要になります。また、自らの偏見を知り、自分をワークの中で使っていくことが有効だと思うのですが、そのためには、実践のふり返りを通して自らの感覚や自分自身を見る目を研いでいくことが必要です。その上で、大人の側として困る状況と、若者の困っている状況との間に立って働くという、ある意味困難な役割を担うことが中高生と関わるスタッフに期待されることなのだと思います。中高生と関わることを仕事とするというのは、固定した資質があって一定の技術を身につければどこでも務まるといったことではなく、絶えず自分自身を問い直すふり返りを行いつつ行動する実践者となることです。

# 中高生世代の活動 ここが困った! 一問三答

昨年度（平成19年度）実施しました「地域や児童館における中高生活動」の実態調査において、専門スタッフの中高生活動に対する課題や問題点には、「参加人数が少ない」が最大の悩みであり、その他には「事業内容について」「中高生の関わり方・問題行動」「時間の調整が困難（遅くまで開館できない）」「施設の環境」などがありました。その中からいくつかを取り上げて、アンケートの自由筆記や、今年度の運営委員会で話し合われた意見をもとに、問題の解決方法を見いだす要素を考察しました。このような課題に対して「これがベスト!」の答えを導き出すことは難しいですが、これから活動を始める施設にとって、ヒントになるキーワードを、一問三答形式で回答しました。

## Q1 どうしたら、中高生世代が、児童館に興味を持ってくれるのでしょうか？

従来、児童館は幼・小学生を対象としている施設が多く、中高生世代を受け入れの対象として考えていない施設が、昨年の調査でも約4～5割でした。

しかし、地域において中高生世代を受け入れる施設は決して多くなく、子どもの育ちを連続的な視野で捉えていくためには、児童館も中高生世代を受けとめていく必要があります。そして、少しずつではありますが、児童館も含め地域全体で、中高生世代の受け入れを考えている自治体も増えています。

利用する子どもにとっても、児童館は「小学生の遊び場」の意識がある中で、中高生世代を受け入れる新しい取り組みをしていくとき、どのような方法が求められるでしょうか。

### A1 小学生時代（学童期）からの関わりが大切！

施設に通ってくる中高生世代は、小学生位の頃からの利用者の場合が多くあります。特に児童館では、高校生の年代になって初めて利用する子（中高生世代の児童館デビュー）は少ないと思われます。そういう意味では、児童館利用者の多くである小学生との密な関わりが、その後の中高生世代と児童館職員との関係作りにつながっていくといつても過言ではありません。小学生の居場所として、児童館が単に「遊びの提供」に留まらず、小学生の頃から職員とともにプログラム運営に関わるよ

うな、小学生時代からの積極的なプログラム参加ができると、地域の中で「自分たちの施設」という意識が芽生えることもあるようです。また、子どもたちの関係性を重視したグループ活動なども、施設への帰属意識、仲間意識を育てるきっかけになります。そしてそれは職員との良好な関係づくりへつながり、親や学校の先生以外の、身近な存在として位置づけられ、成長した子どもたちが節目に施設を訪れるきっかけにもなるようです。

このように、日々の子どもたちとの丁寧な人間関係づくりが、中高生世代の居場所作りの一端となっているともいえるのではないでしょうか。

### A2 施設側からの具体的な発信を！

施設の中で待っていても、中高生世代がやってくるのはむずかしいでしょう。どんなことができる場所か、また、施設としてどんなふうに利用してほしいか、活動内容などを明確なものを提示したPR活動が必要です。インターネットなどを利用した広報活動は、現代の若者に有効です。また利用している中高生世代からの口コミもいい場合も

あります。逆に「学校のメンバーには、自分が学校以外でこういう活動をしていることを知られたくない」という気持ちを持つ中高生もいるようです。幅広く地域の人とのふれあいの場になるような演出ができると、楽しさが広がるでしょう。そして、中高生世代に「どんなことをしたいか」のニーズ調査をかねて、意見を聞いてみる場や機会をつくるのも方法です。こちらからのアプローチを待っているメンバーもいるかもしれませんから。

### A3 はじまりは、「あいさつ」などの言葉かけから…

ちょっと視点が違いますが、施設において、専門職として初めて中高生世代に対応する、つまり「職員の中高生デビュー」の方が多いのではと感じています。「幼児や

小学生は対応したことがあるが、中高生世代とはどうしていいか…」と戸惑う気持ちが不安材料となります。まずはスタッフの方から、中高生世代へ声をかけていく姿勢が必要でしょう。来館してきたり挨拶をするなど、言葉をかわしていきましょう。

## Q2

### 中高生世代専用の場所を確保することが、ちょっとむずかしいのですが…

中高生世代を受け入れていない理由の約2割弱では、施設の設備上の理由がありました。小型児童館はもとより、児童センターなどの中・大規模児童館でも、「防音施設のある部屋」や「自由に使用できるパソコンなどの機材・環境」「スポーツ施設」など、中高生世代が好んで利用しやすい環境設定が、準備できないことが理由として挙げられています。

確かにそういったハード面があることで、中高生世代が利用しやすい環境になることが事実です。一方で、小さな施設に足を運ぶ中高生世代には、それ以外の目的やニーズも考えられます。まず、身近なことから取り組んで、環境設定する方法や、「居場所」という言葉の意味を、今一度確認してみてはどうでしょうか？

### A1

#### ちょっとした工夫で

部屋数が少ない、敷地面積が狭いなど、小さな施設では、特別な部屋を作ることがむずかしいです。それでは、できる範囲で工夫することを考えてみましょう。例えば、ソファー1つを準備して、リラックスして語れる場を作る、地域でいらなくなつたバスケットゴールをもらってきた、などという報告もあります。

時間を決めて、「○時以降は中高生専用ルーム」とすることは、中高生世代をうけとめているよ、大事にしてもらっていると感じる機会になるでしょう。

中高生世代が、「ここにいていいんだ!」という安心できる場は、広さだけではないかもしれません。どんなことをしていても「いいんだよ」という施設サイドの受けとめる幅・許容範囲といった、精神的な場づくりでもいいと思います。

### A2

#### 人の関わりが大前提

「居場所」といっても、場所そのものを意味するだけでなく、「人との関わり」「スタッフとの関わり」を求めているかも知れません。なにげない会話をするだけでもよし、ちょっと立ち入った話の時には、ゆっくり話ができる場所

を決めておくといいでしょう。

職員ルームは、普段子どもたちが入れない場所になっていることがあります、そんな時には、特別に話をする場にするなど、職員間で話しあって決めておくこともいいです。

### A3

#### 「場」にとらわれず、最初の出会いを丁寧に

受付などで「名前を聞く」といったことから関係が始まることもあります。このような関わりから生まれる関係づくりも有効です。こうしたことは通常、毎日行っている、当たり前の事かもしれません、

なかなか正面切って話をしにくいと感じる中高生世代には、「最初の出会い」を大切に、職員が丁寧に声をかけていくには、一番取り組みやすい方法とも言えます。声をかけられて「うざったい」「うとうしいな…」という表情や態度をとられても、職員はめげないで「声をかける」ことが大事です。



### Q3

### 夜間開館していないと、中高生世代は参加しにくい?

学校生活や部活など、また塾やアルバイトなど、忙しい生活を過ごしている中高生世代。夕方5時～6時の閉館では利用しにくいという声もあります。しかし、施設の状況によっては、夜間まで開館できないことも事実です。夜間開館ができないから、中高生世代は受け入れられないと考えるのも、残念なことです。また、「夜間とは、いつまでなのか?」という素朴な疑問もあります。

そこで、「なぜ、夜間施設をあけるのか?」「利用する中高生世代のニーズは何か?」「夜間開館して、どのような取り組みをねらうのか?」に着目して、考えてみました。

#### A1

#### 「時間」ではなく、 「コミュニケーション」

「施設として夜間まで開けられない」→「だから中高生は来ない」とは限らないと思います。「時間」ではなく、コミュニケーションの取り方ではないでしょうか。忙しい中高生世代ばかりでなく、逆に、部活に入っていない、家に

も帰りたくないなど、午後の時間の過ごし方、居場所がない子も見受けられます。限られた時間の中で、どのように中高生世代の取り組みを行っていこうとするか、プログラム展開の方法(行事やイベントではなく、通常の関わり方など)を考えてみましょう。

#### A2

#### 頻度は多くなくても、 できる範囲で始めてみる

常に、夜間開館の必要はないと思います。週1回、月1回で実施できそうな体制があれば、検討をしてみてはどうでしょうか?平日は中高生も部活・塾などで忙しいため、土日曜日などの週末を、そのような時間にあてるところもあるようです。

また、時々、中高生世代が、もうちょっといたそうな時、何か話したそうにしている時など、緊急を要するような場合、その中高生世代の気持ちをどう受けとめて、どのように対応するかが、大事かも知れません。このような状況の時、施設として、または職員間でどのように対応するか、ルール決めができるとよいかもしれません。

#### A3

#### 夕食は家で 食べられる環境を用意する

夕食くらいは、家で食べてほしいなと考えると、あまり遅いのも気になります。そう考えた場合、午後7時が限度かと感じています。

また中学生と高校生では、生活時間に違いがあるので、利用時間をかえることも考えられます。高校生世代では、午後7時以降も利用が可能なことで、部活帰り、仕

事帰りなどに立ち寄ることが可能かもしれません。どちらにしても遅くまで開館して何を目的にするかを施設として考えることが前提です。昨年度の調査では中高生世代の受け入れ方法は「自由利用」が中心でした。反面、「利用者が少ない」ことも課題となると、遅くまで開いていることが利用者増となるかは、中高生世代のニーズ調査と施設の開館時間の意義を再度確認する必要があると感じます。

**Q4****何がしたいのか、わからない中高生世代が集まっています…。**

昨年の調査でも、施設主催のプログラムや、居場所への自由利用など、中高生世代の利用の男女比を見ると、圧倒的に男子がしめる割合が多いのが特徴です。その中には、毎日毎日、何をするでもなく、施設へやつてきて、ぼーっとして帰って行く中高生世代の姿も見受けられます。何を話すのでもなく、何かをするのでもなく、でも、気がつくとよく来ている。

何が楽しくて施設に来ているのだろう?と思う中高生世代の姿に出会ったことはありませんか?調査の中で、「スタッフの関わり方」の設問では、大人の関わりの要素として「指導的な関わり方」「活動への助言」が上位に挙げられていました。そのような立場にあるスタッフにとっても、「何もしない」「しようがない」ように思える中高生世代の関わり方には、悩みが多いようです。

**A1****「何もしなくてもいい」と受けとめる**

目的がなく、児童館にやってきててもいいのではないかでしょうか?「何もしたくない」なら「それでいい」と受けとめるスタッフ側の心の持ちようも必要です。逆に「何もしたくない」ことが目的かも知れません。しばらく様子を見守る

ことも関わり方のひとつです。

但しだまって見守るのでなく、来た時、姿を見た時に必ずあいさつをするなど、一言声をかけましょう。「あなたをみていますよ」「あなたに関心をもっていますよ」というサインにもなります。

**A2****職員サイドの目的的な  
思い込みはいけない**

何かに参加すること、何かすることなど積極的な行動のみを中高生世代に期待していませんか?もしかしたら、

「中高生=ボランティア」「中高生=小学生のお手本」というとらえ方だけをしていませんか?精神的にゆっくりできる場も、今はなかなかないものです。「よくきたね」「来てくれて、ありがとう!」精神でもいいのではないでしょうか?

**A3****中高生世代に、  
関わりを求めているかも**

何がしたのか、わからなければ、その個人によっては、こちらから言葉を投げかけてみることも必要かもしれません。施設に「来る」ための、「中高生世代のニーズ」があるはず…。中高生世代とスタッフとの関係ができたら、

「こんなことやってみない?」や「これ、手伝ってもらえる?」など、こちらから声をかけることに反応する場合もあります。でも「えーっ…」と言われても、スタッフはイヤな顔をせず、あきらめないで関わっていくことが大事かもしれません。

# プロセスを見る目～記録の意義とその方法～

●大正大学名誉教授 吉澤 英子

## はじめに

### ～日常的アプローチの重要性～

対人関係上に惹起する問題や課題に対応する場合、あるいは対人関係を円滑に推めていく場合に、そのアプローチの仕方如何が問われる。特に中高生世代には、同世代、異世代（大人を含めて）からの影響を受けやすく、感化されやすいことによって、成長発達に変化をもたらす比率が高い。したがって対人関係、そのかかわり方如何によって社会的にプラス、マイナスの行動があらわれ、社会問題化する傾向がみられる。問題が社会的に「あらわ」になってからでは、その対応が遅い、したがって日常活動の状況下にその影響の兆しのある時点から、見守り、活動を通じて何らかのアプローチを考慮することが、専門スタッフに求められている。

人と人が、ある条件下におかれることによって、人的関係及び物的関係条件等、すなわち、雰囲気（個々人ばかりでなく、集団全体においても）微妙な動き、反応が見えてくる。この動き（事実）を見極め、感知して、憶測でなく、その具体的行為の事実を、その場面状況とともに記述しておくことが必要である。中高生世代の成長にとって重要な意味を持っていると思われる事実を選択（洞察）して、理由を付した記録をしておくことである。それは専門スタッフの専門性に支えられた洞察力の如何が問われることであろう。

### 1 記録することの意義の確認

#### ～メンバーへの支援・スタッフの学習・施設機能の明確化～

吉澤英子（よしざわえいこ）

1952年日本女子大学卒業。同大助教授、関東学院大学、東洋大学教授を経て、大正大学教授として勤務、2004年3月退職。学生時代から60年余ボランティア活動の実践および推進に努め、初代東京ボランティア・市民活動センター所長、国及び都、地方自治体の社会福祉・児童福祉・生涯教育（学習）審議会などの委員を歴任。現在は、渋谷社会福祉事業団理事及び社会福祉協議会社会福祉活動助成審査委員。浅草寺福祉会館スーパーバイザー他

プロセスを見る目を培うことは、言語化のテクニックではなく、中高生世代の成長に役立つ事実・内容を選択する能力が求められる。その能力を身につけるためには経験と、専門スタッフ間での事実のとらえ方をめぐる話し合いの機会を多く持つことである。自分（専門スタッフ）だけがわかるものではなく、第3者にもその事実がわかる状況を、要領よく、要点をおさえての記述内容でなければならない。施設における一定の記録要領にそったものは、その施設にとっては公的なものであることを心しておかなければならない。自分のメモのようにあつかってはならない。

記録の第1の意義は、中高生世代の成長発達に資するもの、第2は専門スタッフの学習、すなわち実践から理論化への糸口を引き出す資料となるもの、第3に、施設の機能を代表するもので、社会のニーズに即した機能、あり方を導き出すものであることが求められる。その際、機能として本来の施設の理念、ニーズの変化に対応していくべき機能とが、明確になされていることが前提となる。その前提となる事項を裏づけする証拠となるのが記録である。

## 2 記録の種類

### ～施設毎に目的に応じた工夫を～

記録には、いくつかの種類、様式がある。定まったもので、これでなければいけないという規定はない。記録の意義を全うできるものであれば、施設によって異なってもかまわない。したがって、「業務日誌（主として事務的意味合いを持ち、統計的に処理可能な内容）」にはじまり、中高生世代の活動（グループ）で、グループ化する動きを中心とする「グループ記録」、そのグループ相互のかかわりのなかでの、個人の動きを中心とする「個人記録（家庭との関係、親の関わり“親子関係”に関する内容を含む。その中には、学校、その他の地域組織や施設とのかかわりも必要とあれば、加える）」。「プログラム記録」として、行事を含め、

年間計画による催し物、行事を中心とした記録があげられる。あまり種類をわけても、日常的に記述できない状態では意味がない。例えばグループ記録を中心にして、時には、その過程で登場する個々人を拾いあげて、一定の期間にまとめを（個人記録）して、個人の流れをみることもできよう。

### ③ 記録の様式

#### ～事実の客観的整理が重要～

種類毎に記述内容は異なるが、項目を設定して、その項目毎に記述することが望ましい。ただ、思いつくままに羅列することは可能な限り避けたいものである。時間を追って記述する様式を「叙述タイプ」といって、必要項目、事実を詳細に（形容詞を除き）記述し、専門スタッフのアプローチの具体例を加え、その反応を記録することで、項目毎の重要なポイントの記録より長文になることが多い。その良し悪しは、施設内で了解のもとに、記述ポイントを承認しあっておくことが望まれる。「行事記録」、あるいは「プログラム記録」には、プログラム素材の活用意味と、実際に素材を用いた場合のメンバー（中高生世代）の動きをよくおさえた記録が、次のプログラム素材を組むときの参考になるよう考慮することが重要である。つまり評価ポイントを設定し、可能な限り客観的な整理のできるよう、工夫した記録が必要となる。その他に、地域との関わり機能を重視する場合は、ボランティア活動、住民の参加活動に関する記録を別に設け、ボランティア自身での記録を要請してもよいのではないかと思われる。これらは施設毎のユニークさを發揮した記述をしておくこともよいのではないか。

### ④ 記録の使い方

#### ～記録を活用してスーパービジョンの創出を～

記録は書きっ放しでは意味がないので、前

述したように専門スタッフの質の向上に用いることが重要である。記録すること自体も学習の意味、即ち問題や課題の客観的分析視点を明確化する力を培う結果につながるといえる。そのために努力することも重要である。したがって、専門スタッフをはじめ多くの、児童関係者間での協働活動展開の課題提起の基本資料ともなりうるよう活用できればその意味は大きい。つまりグループスーパービジョンの機会を創出し、そのシステム化が望まれる。

但し、専門スタッフ及び関係者の学習素材としての有効な活用とともに、心しなければならないことは、周知の通り、内容によっては秘密保持の十分な注意、配慮が求められる。

### ⑤ スタッフに求められる 専門職としてのskill

#### ～スタッフのskillとして記録の意味を 支える～

記録のポイントをはじめその内容が、役立つものでなければ、施設の機能を代表する記録とはいえない。したがって専門職のskillとして次の5点を挙げておきたい。

――参考までに――

- ①施設利用者である中高生世代の相互関係の促進に対する専門技術、グループワーカーとしての資質の向上、及び専門スタッフの養成の内容検討への新たな挑戦
- ②状況判断能力（感情、情緒の動き、成長変化のために必要な項目の把握）
- ③プログラム素材の適正化をはかる
- ④活動の評価、分析能力
- ⑤活動にかかわる人的、物的管理能力

以上の機能を専門スタッフが、こなししていく過程に対して、常に焦点化した活動展開が求められるのである。より充実をはかる方向性のもとで、記録の意味をきびしく問うていく必要が求められる今日といえよう。そのことが中高生世代の子どもたちにとっての、施設の存在（あり方）を明確化する動きに連動するものと言えよう。

# グループ活動記録の様式 ～その書き方～

このページでは、中高生世代に関わる専門スタッフが、活動のプロセスを客観的な事実として捉えるための記録様式の提案をいたします。この様式は、本事業で運営するモデル事業と子どもの城で実施された中高生活動担当のスタッフに、実際に記録してもらいながら、運営委員会で検討を重ね、製作したものです。しかし、まだまだ改善の余地が多く残されている記録様式であることも確かです。この様式を参考にしながら、各施設や団体にあった記録様式を考案して頂ければと考えています。36、37ページに記録様式を添付いたしました。コピーしてご活用ください。また39ページには『叙述体記録の様式』を添付いたしました。この記録方法は口述筆記によるもので、正確で客観的ではありますが、スタッフの負担は大きいと思います。しかし記録の価値を知る意味でとても重要な記録方法ですので、機会があったらぜひ取り組んでみてください。

\*参考資料 『グループワーク～理論とその導き方～』 勉草書房 大利一雄著

## ①グループ活動の記録

◇活動の度に記録します。

この記録様式は会議形式の活動には向いていますが、作業やスポーツ等の活動の場合には向いていません。その場合は、記録できるところだけ結構です。

4つの項目に分かれた観察シートです

「グループの相互作用」

3種類の矢印で相互作用を観察します。

## 「グループメンバーの役割」

メンバーの機能に着目してチェックする表です。

## 「グループのムード」

時系列に従って、グループのムード(沈滞→活性化)を曲線で表していきます。変化が見られたポイントでの活動内容やスタッフの関わりも記録していきます。

「次回への指針」

今回の課題を明確にし、次回の目的を記入します。

◆記録をするタイミングは、基本的に活動終了後に行います。

慣れてくれれば30分程度で記入できます。活動中はメモを取る程度にとどめます。

## ②記録のつけ方

\*今回例にあげた記録はモデル事業に協力いただいた、団体のスタッフが実際につけた記録です。個人名はアルファベットに置き換えて表記しています。

### ①基礎データ

活動の日時、内容、参加者等記録の基礎データを記入します。誰が記録したかも忘れずに記入します。

目的や内容を簡潔に。

グループ活動の記録					
記録日	平成20年(2月)13日(土)	時間	15:15~19:00	記録者	S
活動内容	Teen's フェスティバルの現状確認と、当日の流れの確認、および各担当での作業 赤ちゃんふれあい交流のプレゼン作り				
参加者(メンバー・スタッフ)	メンバー：A子(司会)、B子(記録)、C子、D子、E男。 スタッフ：S、保育士				
	計7名				

メンバーの名前(学年)、スタッフの名前を書く  
ボランティアなどが関わった場合も書く。  
メンバーの役割が決まっていた場合は明記する。

メンバーが活動した時間を書く。活動時間が長時間にわたり、すべて記録することが、難しい場合は、ポイントになる時間を切り取って、記録する。

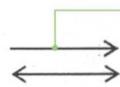
### ②グループの相互作用

3種類の矢印でグループの相互作用を表します。ここでは丸くなかった座り方で表現していますが、四角で座る場合などもあると思います。その場合は、並び順に着目しながら記録

してください。この記録は活動後に思い出すのは難しいと思いますので、活動中に簡単にメモをとるよう心がけましょう。

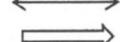
#### ◇グループの相互作用

方向



矢印の向きで誰が誰に向かって話していたかを表現。  
片方向の矢印は、会話が一方通行の場合、双方向の矢印は、やりとりがある場合、太い矢印は、特定のメンバーではなく、グループ全体に向けて、話かけている場合。

全体



マイナス



この矢印は、敵対、反目の関係を表現。  
言葉でのやりとりの場合もあるが、目線や態度で(目や体をそらす、表情が硬くなる等)関係が示される場合もある。

特にやりとりが活発な場合は矢印を何本も書く等、工夫して表現する

並び順に着目

左の表だけで表現できない内容や特に明記しておきたい事を、簡潔にまとめる。スタッフの関わりの意図などを明記するのもよい。

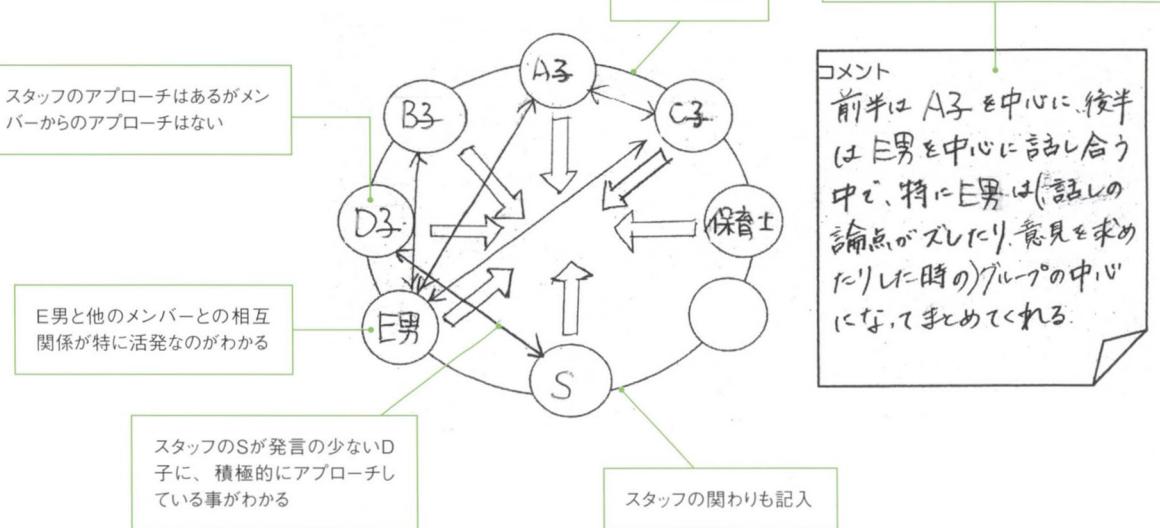
スタッフのアプローチはあるがメンバーからのアプローチはない

E男と他のメンバーとの相互関係が特に活発なのがわかる

スタッフのSが発言の少ないD子に、積極的にアプローチしている事がわかる

コメント  
前半はA子を中心に、後半はE男を中心に話し合う中で、特にE男は(話しの論点がズレたり、意見を求めたりした時の)グループの中でも、注目されてきた。

スタッフの関わりも記入



### ③グループメンバーの役割

この表はグループのメンバーが、活動のなかでどのような機能(役割)を果たしたかに着目して、カテゴリー別に分類していく記録方法です。この記録は、**メンバーが適切なリーダーシップをとっているかどうかのチェック表ではありません。**

グループ内でメンバーが果たす役割の変化を捉えることで、**メンバーの内的な変化を理解する手掛かりにするものです。**また、グループの活性化を目指すうえで、グループ全体でどの機能が欠落しているかを、メンバー全体によって果たされた機能の総数で、客観的に判断することができます。

発言が多いか少ないかにかかわらず、グループへその個人がどのくらい影響を与えたかを記入する。

グループ全体で相対的な会話の頻度を表記する。

メンバーの名前を記入。罫線はわざと薄くしてあるので、メンバーが多い場合は罫線を書き足す。

◇グループメンバーの役割（それぞれのメンバーが、グループ活動の中で果たした機能に○をつける）

名前	A子	B子	C子	D子	E男	F女	保管士
会話の頻度（極少・少・中・多）	中	少	多	極少	多	多	極少
グループに影響を与えたメンバー	○	○	○	○	○	○	○
課題の達成機能	問題を明確にする	○			○		
	情報を求める	○		○	○		
	情報を与える					○	○
	意見を求める	○			○		
	意見を述べる	○	○	○	○		
	可能性を検討する	○			○		○
グループ維持の機能	調整する			△	○	○	
	調和をはかる						
	方向づける、促進する					○	
	支持する、激励する			○			
	同調する（うなずく等）			○	○		
	記録をとる	○					
個人中心の機能	邪魔する			○			
	話し合いから引っ込む				○		
	話をそらす						
	人の注意を引く						
	ケチをつける						
	非協力的			○			

\*グループへのプラスの影響は、○印で表示(特に強い影響の場合は○、マイナスの影響は△で表示)

\*特にグループの維持機能では、ノンバーバルコミュニケーション(非言語)の場合もある

マイナスの影響は、ノンバーバルコミュニケーションの場合が多い。  
具体的な例をコメント欄に記入する。

ノンバーバルコミュニケーション(非言語)を忘れずに。特に「グループ維持機能」では、発言はないけれど、役割をはたしているケースが多い。

コメント  
グループ活動の経験者がいるとき話し合いがスムーズに進ぶ。

コメント  
D子は話し合いの時に机上作業をしつがんで、話し合いに参加していない。

コメント  
A子には見えなかった。(発言少ない)

コメント  
C子の発言がメールを盛り下げる場面が時々ある。

コメント

特に気になった事柄やメンバーの様子を具体的に書く

各機能の説明、グループのモードの基準は、38ページを参照

#### ④グループのムード

この表は、時系列にしたがって、グループのムードを捉え、その時グループの中で何が起きたか、スタッフがどう関わったかを記入していきます。この記録は、グループ活動をメンバーの情動の変化(ムード)で捉え、その変化が生み出され

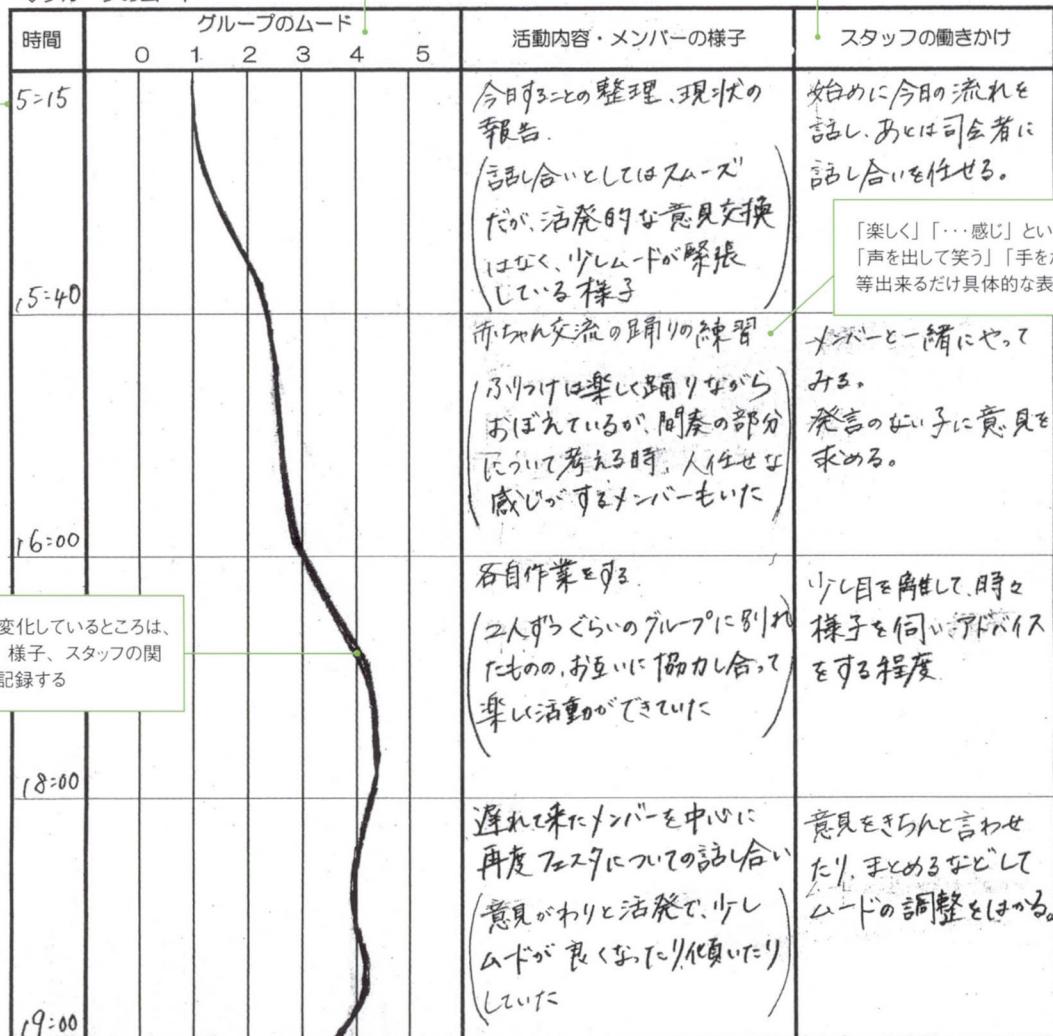
た要因(活動内容、メンバーの様子、スタッフの関わり等)を具体的に示すことで、その日のグループ活動の様子をマクロの視点で振返ることを目的としています。この表は、会議形式の活動だけでなく、作業やスポーツ等のレクリエーション活動の場合でも活用できます。

活動時間全体の節目、節目の時間を記録する

グループのムードを曲線で表す。  
ムードの基準は38ページを参照

具体的なアプローチも記入また、そのアプローチをした理由も記入するとなおよ。

##### ◇グループのムード



大きく変化しているところは、内容、様子、スタッフの関わりを記録する

コメント  
今日は作業中心で、ムードはだんだん良くなっていた。メンバー同士もよりよくお互いを分かり合ってきて、それぞれの個性もみえてきた。

##### ◇今日の課題・次回への指針

話し合いの時に論点がズレたり、口を狭めとするメンバーに、それを修正する必要がある。作業に関しては、慣れている子と、そうでない子がいるが、お互い協力する工夫をした。来週の本番に向けて、もう少し意識を高めさせたい。

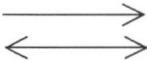
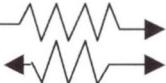
次回への引継ぎ事項や目標、グループ活動全体に関する評価や課題、また、スタッフの関わりで課題と思われることを記入。

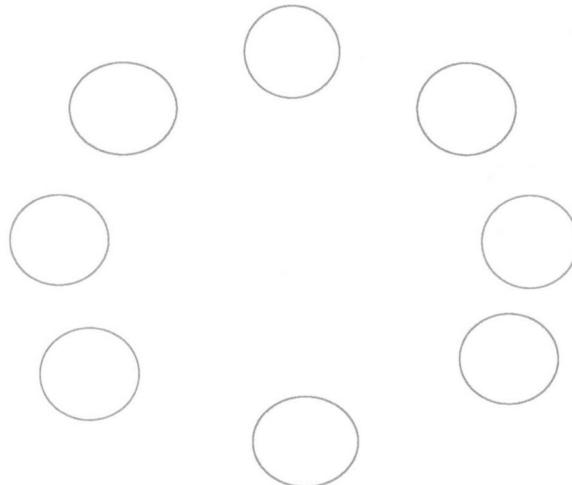
特にポイントとなる事柄に関して、記入する。また、時間を通して感じたグループ全体のムードも記入する

## グループ活動の記録

記録日	平成 年 月 日 ( )	時間	~	記録者	
活動 内容 目的					
参加者 (メンバー・スタッフ)					
	計 名				

### ◇グループの相互作用

方向  
  
 全体  
  
 マイナス  




コメント

### ◇グループメンバーの役割 (それぞれのメンバーが、グループ活動の中で果たした機能に○をつける)

名前							コメント
会話の頻度 (極少・少・中・多)							
グループに影響を与えたメンバー							
課題の達成機能	問題を明確にする						コメント
	情報を求める						コメント
	情報を与える						コメント
	意見を求める						コメント
	意見を述べる						コメント
	可能性を検討する						コメント
グループの機能	調整する						コメント
	調和をはかる						コメント
	方向づける、促進する						コメント
	支持する、激励する						コメント
	同調する (うなずく等)						コメント
	記録をとる						コメント
個人を中心の機能	邪魔する						コメント
	話し合いから引っ込む						コメント
	話をそらす						コメント
	人の注意を引く						コメント
	ケチをつける						コメント
	非協力的						コメント

\* グループへのプラスの影響は、○印で表示(特に強い影響の場合は◎)、マイナスの影響は△で表示)

\* 特にグループの維持機能では、ノンバーバルコミュニケーション(非言語)の場合もある

◇グループのムード

時間	グループのムード						活動内容・メンバーの様子	スタッフの働きかけ
	0	1	2	3	4	5		

コメント

◇今日の課題・次回への指針

## グループメンバーの役割定義

### (課題の機能)

#### ①問題を明確にする

→グループの問題を明確にする。グループの全般的な目的を述べる。

#### ②情報を求める

→グループで討議されている内容や課題、また提案されたものを明確にするために情報を求める。

#### ③情報を与える

→グループで討議されている内容や課題、事実について一般的な情報を提供する。

#### ④意見を求める

→話し合いに関係のある事柄について、他者の意見を求める。

#### ⑤意見を述べる

→話し合いに関係のある事柄について、自分の信念や意見を述べる。

#### ⑥可能性を検討する

→提案された解決策の現実性を問い合わせ、実用性を検討する

### (グループ形成と維持の機能)

#### ①調整する

→新しい意見がだされた場合、それまでの意見と結びつけたり、2つの意見をより役立つものにする。

#### ②調和をはかる

→言い争いや意見の不一致のある場合、これを仲裁したり、調和させようとする。

#### ③方向付ける、促進する

→グループが脇道にそれないようにする。グループがより効果的に機能するよう働きかける。

#### ④支持する、激励する

→他者の意見に対して承認を表し、他者の意見を賞賛し、他者の意見に暖かく受け应えする

#### ⑤同調する

→グループの動きに歩調を合わせる。他者のアイディアに理解を示したり、同意を表す

#### ⑥記録をとる

→グループ活動の内容が明確になるよう、また記録に残すために、記録をとる。

### (個人中心の機能)

#### ①邪魔をする

→特に理由もないのに、討議をしたり、抵抗をしたり、反対したりして、グループの進展を邪魔する。

#### ②話し合いから引っ込む

→空想にふけったり、関係のないことをしたり、他人に向かってひそひそ話をする。

#### ③話をそらす

→話題からはなれる、話し合いを自分の好みの方向へ引っ張っていく。

#### ④人の注意をひく

→自慢したり、大声でしゃべったり、突飛な行動をしたりして、自分の方へ注意を引こうとする。

#### ⑤非協力的

→グループ全体の進行に対して、何もしない。意欲的に関わらない。

参考文献 『グループワーク～理論とその導き方～』  
勁草書房 大利一雄著

### ● グループのムードの基準

0以下	なんらかの原因でムードが沈滞した状態。お互いに牽制や反目の状態があり、怒ったような顔つき、困った顔つき、目線をまったく合わせない等の状態にある
0	メンバーには、グループ感情がなく、緊張した状態。個人の寄せ集め的段階。
1	発言や意欲的に活動する者はほとんどない、メンバーの相互関係がなく、シーンとすることが多い。スタッフが働きかけてもあまり反応が見られない。メンバー相互の探し合いの段階。
2	スタッフの働きかけに何人かのメンバーが反応して、笑顔、会話、動きから明るい雰囲気が感じられる。メンバー同士の相互関係はあまり見られない。
3	グループの目標を何人かのメンバーが理解していて、グループを引っ張り、メンバーへの働きかけがある。メンバー同士の会話の中で明るい雰囲気が作られている。メンバーがムードづくりをしている
4	ほぼ全員がグループの目標に対して意欲的に取り組もうとしている、活気ある状態。しかし数名は、その雰囲気になじめないでいる。
4以上	グループの全員が目標を理解し活動に意欲的で活気のある状態。常に明るく和やかなムードである。

叙述体によるグループ活動の記録

記録日	平成 年 月 日 ( )	時間		記録者
活動 内 容 的 目 的				
参加者(メンバー・スタッフ)				
	計名			

様子の内容には話し言葉、聞き書きや読み書きした文で記入。話し合いで得た情報も論議に蓄積する。また図表、メニューなどスタッフの間で図わりやすく、特徴的なもの、ボイントとともに下線を引いておき、会議後にその考察をメモする。

参加者(メソ) (二・メソ)

発言・行動・様子

職員の関わりと分析

(拡大して使ってください)



# 児童館における 中高生のボランティア 活動活性化事業

## 事業の概要

### 事業の目的

『児童館における中高生のボランティア活動活性化事業』は「児童館の中高生を対象にした活動が、中高生の居場所、生きがい機能として効果を発揮すると共に、メンバーの自律性を高め、より豊かな市民性と道徳性を養う機会となるための事業のあり方を模索し、今後の児童館活動の一つのあり方を提案すること」を目的にしている。この調査研究は2ヶ年計画とし、第1年次（19年度）は中高生事業の行政・施設での取り組み状況と活動に参加している中高生の実態調査を実施した。調査の結果から現状を把握し、居場

所としての要素や活性化の要素の抽出をし、そこから中高生がいきいきと活動し、社会の中で活かされる事業のあり方を模索し活動の方向性をまとめる目的とした。第2年次（20年度）はその成果に基づいてモデル事業を全国5ヶ所で計画・展開し、また同時に中高生世代を対象とする指導者に向けて活動を活性化するためにファシリテーター講習会を全国3ヶ所で実施する。これらの活動を統括し、運営方法に対しての指導助言を目的に、専門家や実践者で構成する「運営委員会」を組織し、検討を重ねた。

### モデル事業の実施

中高生世代に対する事業展開の可能性を考え、地域やそれぞれの児童館の条件の違う環境の中で、中高生世代への新しい事業展開の提案を目的にモデル事業を実施する。事業は全国を網羅するように5か所を選択して実施。モデル事業で実施した内容は報告書にまとめ、これから中高生世代の事業を展開しようとする児童館等の事例として提案する。

- ①北海道・札幌市 苗穂はるにれ児童会館  
(指定管理者：(財)札幌市青少年女性活動協会)
- ②東京都・世田谷区 野沢児童館
- ③愛知県・名古屋市緑区 緑児童館  
(指定管理者：NPO法人こどもNPO)
- ④愛媛県・松山市 松山市中央児童センター  
(指定管理者：(社福)松山市社会福祉事業団)
- ⑤佐賀県・小城市 小城市児童センター

### 地域における中高生活動 ファシリテーター講習会事業の実施

中高生世代の事業展開を活性化するため、指導者講習会を全国3か所で実施。各地で行った講習会では、中高生世代への活動の理解を深めるとともに、先駆的取り組みの事例紹介や中高生世代へのファシリテーションの考え方、意見交換などの講義・演習をとおして、指導者の資質を高める講習を行った。

- ①北海道・札幌市 平成20年11月16日・17日  
会場：札幌エルプラザ 研修室  
協力：財団法人 札幌市青少年女性活動協会
- ②東京都・渋谷区 平成20年12月17日・18日  
会場：こどもの城 研修室
- ③京都府・京都市 平成21年1月15日・16日  
会場：京都府立総合社会福祉会館ハートピア京都 会議室  
協力：(社)京都市児童館学童連盟、  
(財)京都市ユースサービス協会

### 運営委員会の実施

本事業の実施内容である基本的な考え方や具体的な事業（モデル事業・講習会など）に対して、事業内容を吟味し、示唆・助言を受けるために、専門家・実践者とモデル事業の代表者で構成さ

れる運営委員会を組織した。委員会については年間4回実施。運営委員の構成、各回の内容については巻末を参照。

# 札幌市苗穂はるにれ児童会館

～「食べる」楽しさから「ふれあう」喜びへ～

## 「ふれあい」⇒「ありがとう」⇒「自信!」

児童会館には様々なタイプの中高生世代のメンバーが集います。中にはシャイで人と関わることが不得手、将来の夢がまだ描けていないといった中高生もおられます。そんな彼らに「人とのかかわりの楽しさや素晴らしさ、仲間の大切さを児童会館での活動を通じて体いっぱいに感じてほしい!」との願いが我々児童会館スタッフにあります。

「育ち盛りの中高生世代の関心事と好きなことは『食べること!』」このテーマを一からプログラム化し、グループワークの手法を取り入れ、様々な年代が集う児童会館ならではの「ふれあい」から「ありがとう」と伝え合える人間関係を構築し、さらには中高生世代の体験として自信や自己肯定感を感じてもらいたいと考え、取り組みをスタートしました。

### 事業名

### ありがとうプロジェクト!

### 事業のねらい

当館では平成19年度9月より毎週水・木曜日に中高生夜間開放「ふりたいむ」事業（中学生は19時まで、高校生は21時まで）を開始しました。

「ふりたいむ」は中高生世代の希望する活動を自由に展開することができます。毎週水曜日はブレイクダンスの練習を目的とした高校生の来館が多く（他区からの来館も含む）、毎週木曜日は地元の高校生を中心に調理活動やスポーツなどの活動を行っており、曜日によって活動内容に特徴が現れるようになってきました。

今回、中高生ボランティア活動モデル事業を展開するにあたり、主な対象者として考えたのは毎週木曜日に来館する地元の中高生です。彼らの特徴として以下の点があげられます。

- ①小学生の頃来館していた
- ②現在、部活動等に所属していない者がほとんど。  
また、遊び仲間も限定的
- ③人とのかかわりが不得手。ただし、小学生に対するかかわりは少しずつできつつある
- ④自己実現の場を持つ経験に乏しい
- ⑤将来の夢や目標を描けていない

彼らにとって「人と関わること」そして「自信をもつこと」、その中で「自己肯定感を育むこと」が必要ではないかと職員間で感じています。「ボランティア活動」の定義は様々ですが、社会に羽ばたく前に、小学生や乳幼児といった自分たちより年少の世代や地域の大人の方々とのふれあい、すなわち、『幅広い世代が集う児童会館ならではの体験』を通じて仲間作りや、社会の中の一員としての認識を育むことを目標に、上記のとおりテーマを設定しました。



## 実施概要

札幌市苗穂はるにれ児童会館では、中高生ボランティア活動モデル事業に取り組むにあたり、日常取り組んでいた「パンメシ作り」をベースとし、小学生対象の泊まり会での調理指導を目指した次のステップで活動を展開しました。

**1st  
step**

「プロに学ぼう!  
中高生料理講座」 → 仲間づくり

**2nd  
step**

「みんなでつくろう!  
パンメシ」 → 絆の強化

**3rd  
step**

「幼児及び小学生  
のサポーター活動」 → ふれあいの  
楽しさを体感

**4th  
step**

「開館20周年記念  
『ありがとうまつり』」 → 地域の  
サポーター活動」 → 幅広い世代と  
の交流

**5th  
step**

「お泊り会での  
調理指導  
ボランティア体験」 → 充足感、  
将来の  
自分への描き



「ありがとう」の言葉と思いが行き交う体験や  
感動を通じた「自己肯定感」の育成

## 年間の流れ

毎週木曜日「ふりーたいむ」(夜間開放)にて行っている「パンメシ作り」をベースとし、既存の会館行事や地域との共催事業と連動させて展開を図りました。

通年	「パンメシづくり」(毎週木曜日)
夏休み 期間中	「プロに学ぼう 中高生料理教室」「子育てボランティア体験」「サマーフェスティバル・イン・なえぼ(地域夏祭り)」スタッフ活動 小学生の児童会館運営委員会企画による遠足のサポーター体験
9月	中央区児童会館合同行事 スタッフ活動(於:札幌市大通公園) 当別町での農業体験のサポーター体験
11月	開館20周年記念 「ありがとうまつり」スタッフ活動
1月	小学生対象「お泊り会」での 調理指導ボランティア体験

## 活動の記録

### 1st step 「プロに学ぼう! 中高生料理講座」 (夏休期間中・全3回)

「ボランティア活動」といっても多種多様です。当館に集う中高生は、まず「集う」ことに楽しさを感じており、そこから「誰かのために・・・」といった目標の設定は時期尚早と感じました。では、どのような活動であれば充実したものとなるのか? と考えた時、毎週木曜日に取り組んでいる「パンメシ作り」が思い浮かびました。「作って、食べる!」、そして「お腹いっぱい、満足!」といった現状を基に、「小学生に調理活動を教えられるようになれるかな?」といった問い合わせからこのモデル事業はスタートしました。

講師の選定も中高生と共に進め、数々の情報の中から「この先生、いいカンジだよね!」との彼らの一言により、札幌で活躍中のフードコーディネーター・中本ルリ子先生に依頼、中高生にとって時間にゆとりのある夏休み期間中の夜間に全3回に渡って料理



教室を開催しました。講師と相談の上「ドライカレー」や「ハンバーグ」など中高生が好むメニューを設定し、包丁さばきの基礎から教えていただきました。シャイな中高生メンバーたちは初回には大変緊張気味で、投げかけに対しても反応が乏しかったものの、中本先生の明るいキャラクターに引っ張られる形で次第に会話が弾み、表情に笑顔も出るようになってきました。料理の基本を学びつつ、楽しい会話を通じて日頃では接点が希薄だった参加者同士の関係も深まっていきました。

## 2nd step 「みんなでつくろう！ パンメシ」 (毎週木曜日)

「中高生料理講座」終了後も、毎週木曜日の夜間開放「ふりーたいむ」に集い「パンメシ作り」に取り組みました。活動の主体である高校2年生が、学校の定期試験や修学旅行などの関係で全員が揃わないこともありましたが、講座で教わった点を活かして、メンバーや職員と「こうだっけ?」「いや、こうじゃない?」と教え合いながら活動が展開されました。夏休み終了後は復習を兼ねて料理講座で学んだレシピに取り組み、一通り復習が終わると料理本やインターネットで自らメニューを検索するなど料理に対する関心を高めていました。

9月中旬からは活動のうわさを耳にし、ふらりと児童会館に足を運ぶ中高生も現れるようになり、同じ釜の飯を食しながら学校の様子などを語り合い、回を重ねるにつれて仲間の絆が深くなっていく様子が見受けられました。



## 3rd step 「幼児及び小学生のサポーター活動」 (7、8、9月)

「パンメシ作り」は同世代の仲間との絆の強化を目指した事業であるのに対し、幅広い世代とのふれあいを体験してほしいと考え、夏休み期間中から9月にかけて、様々な活動の場を用意しました。

当初は「話したことのない人は苦手…」と、活動に参加することに対して消極的な中高生もいましたが、「子育てボランティア体験」や「地域夏祭り」、「当別町での農業体験」等の活動に参加し、人の触れ合いの機会を増すごとに、テレビゲームなどでは感じられないコミュニケーションの楽しさを体感した様子でした。また、回を重ねるごとに小学生との関係も深まり頼りにされるようになり、9月中旬からは中高生の口から小学生の様子が語られるようになりました。さらに、今まで受身であった彼らから「何か手伝おうか?」との言葉も聞かれるようになりました。



## 4th step 「開館20周年記念『ありがとうまつり』 サポーター活動」 (11月)

夏休みから実施したさまざまな体験を通じての成長を強く感じたのが「開館20周年記念『ありがとうまつり』」に向けた活動です。この頃から「『はるにれ』やみんなのために頑張るよ!」との声が中高生の口から発せられるようになりました。

朝早くから夜遅くまで自主的に集合し、献身的に準備にあたる姿に小学生スタッフも触発され相乗効果となりました。第一部の式典では、記録ビデオの撮影の他、ステージ発表者の誘導など裏方として円滑な進行を支えてくれました。また、午後からの第二部では縁日コーナーで小学生スタッフをリードしな



がら、終始笑顔であそびのコーナーの活動を行いました。メンバーの努力の結果、会館始まって以来の大勢の方々にご参加いただき、幅広い世代の方々からの「楽しかったよ!」「頑張ったね!」との言葉がけによりさらに充実感を得たようでした。

#### 5th step 「お泊り会での調理指導 ボランティア体験」（1月）

これまでの活動の集大成として、冬休みの終わりに会館内で小学生対象の1泊2日の「お泊り会」を実施し、カレー作りを指導するボランティア活動を行いました。毎年小学生が大変楽しみにしているだけに、メンバー一同成功させたいとの思いを胸に張り切って臨みました。

改めて講師の先生からご指導を受け、包丁さばきや調理方法を確認すると共に、食材の買出しや会場設営等、中高生が主体となり準備にあたりました。

モデル事業開始前に私が抱いていた「単に調理を教えるだけの活動になら…」との心配は杞憂に終わりました。お手伝いに見えた大勢の保護者の前で緊張しながらも、丁寧に野菜の切り方や火加減などを小学生に教えました。またレクタイムでは、自分たちでプログラムをアレンジし、小学生とコミュニケーションを深めながら楽しい一夜を過ごすことができました。

2日目、小学生からお礼の手作りデザートやメダル、合唱、そして「ありがとう」との感謝の言葉を一人ひとりに贈られ、充実感を得て大成功の中事業を終えることができました。

終わりの会で小学生に対して中高生から贈られたメッセージの一部を紹介します。

「涙が出そうなくらい感動しています。頑張って良かった!」

「そろそろ進路のことを考える時期だけど、これからもみんな（小学生）のことを手伝っていきたい。」

「泊まり会は小学生の時にも参加したことがなかったけど、みんなで過ごすのは楽しいってわかりました！」

#### プログラムの成長・子どもの成長

活動を振り返りますと、中高生の成長を強く実感します。人と接することが不得手で、以前は調理活動中に携帯電話を操作するなど、友人が傍にいても自分の殻に閉じこもる姿が見受けられましたが、今では「会話」の楽しさや喜びを感じ、イキイキとした表情が数多く見受けられるようになりました。また、泊まり会の前日には、「よろしく頼む!」との私のメールに、「絶対成功させる!」との強い思いが寄せられました。さらに、小学生へ心のこもったメッセージを発表する彼らの姿を目にし、人とのふれあいを通じて自信とやりがいを感じ、意欲や思いを恥ずかしがることなく堂々と表現するようになった彼らの成長した姿が大変まぶしく、喜ばしく思いました。

このような彼らの成長は、「食べる楽しさ」から「ふれあう喜び」といった形でプログラム自体が深化したことがその一助となったと言えるかと思いますが、それ以上に小学生やその保護者、地域の方々、当別町の農家の方々など多くの方が中高生を受け入れ、ふれあっていただいたことが大きな要因といえます。このような出会い、ふれあいの場こそ児童会館の大きな財産だと考えます。

## 今後の見通し

### <評価・課題>

活動を終えて中高生からは「参加して良かった」、「また何かしたいな」との声が寄せられています。また、高2男子からは「今まであまり進路について考えていなかったけれども、もうちょっと真剣に考えようかな…」との思いも寄せられ、活動を通じて得たさまざまな方とのふれあいが刺激となって、彼らに自信や将来への展望をもたらしたと考えます。

課題としては、より参加（来館）する中高生を増加させることが挙げられます。今回のモデル事業では高2男子と中1女子、そして大学生ボランティア（女性）が中心となり活動を展開しました。近隣中学校にビラの配布を依頼し、また、子どもたち同士のクチコミを利用ましたが、なかなか参加者数は伸びませんでした。顔ぶれに変動のない少人数の活動にはメリットもありますが、活動が閉鎖的になりがちで刺激が乏しくなるなどのデメリットも否めません。

今後の活動を維持するためにも様々な活動プログラムを用意し、新たに参加する中高生の仲間を増やしながら活動を活性化させていきたいと考えます。

### <実施しての悩み>

実施して感じた難しさは、その日の気分や構成メンバーによってやる気が変化する中高生との向き合い方でした。人と関わることを大切にしたプログラムを開催しているだけに、「テンションが低い」との安い言葉で一番大切な身近な仲間との関りを粗末にしている姿をどこまで受容するか？ 皆で気持ちよく活動する雰囲気作りをいかにサポートできるか？をいつも念頭に置きながらの活動でした。

距離を保ち、見守る所はじっと我慢して見守り、彼らにとって必要な時には届く言葉で伝えたり、時には先頭に立ってリードする—、このような点を彼らとの活動から改めて学ばせていただきました。

### <今後の展開>

当初、モデル事業のお話をいただいた際、中高生の来館が少ないだけに、ボランティア活動が果たして展開できるか？ そもそも「児童館におけるボランティア活動」とは何だろうか？ と大きな不安がありました。しかし、背伸びをせず、中高生が興味や関心をいだいている事柄をプログラム化し、中高生と共に考え、共に活動することでその不安は払拭さ



れました。

乳幼児から大人まで、地域に生きる幅広い世代の方々が集う「児童会館」の特性を活かすことで、子どもも大人も共に育ち合うことができるのではないかでしょうか？ この「育ち合い」に関する様々な活動やサポート体験こそ「児童会館におけるボランティア活動」なのではないかと思います。今後も中高生の興味関心に応える活動を開催することで、彼らと共に成長していきたいと思います。

彼ら中高生は、私たち職員にとって欠かせない存在であり、地域の子どもたちの大切な仲間です。彼らとの活動が、やがて「ありがとう！」という言葉がより交わされる社会作りに、少しでも寄与できたらと切に願っております。



## 札幌市 苗穂はるにれ児童会館 の紹介

### 地域のプロフィール

札幌市の中心部、時計台や大通公園から車で約5分に位置し、古くから鉄道貨物等で栄えた「都会の中の下町」といえる地域にあります。「苗穂」とはアイヌ語の「ナエ・ポニ小さな川」が語源といわれ、近くには豊平川が流れ、札幌の中心部にありながらも自然豊かな環境です。近年はマンションの建設が進んでいますが、エリア内の子ども人口は札幌市内では少ないといえます。

札幌市の児童会館は、すべて指定管理者である（財）札幌市青少年女性活動協会が運営。平成18年度より中高生居場所対策事業「ふりーたいむ」を実施しています。（18年度20館でスタート。21年度までに全104館で実施予定。）



### ◇北海道札幌市

人口 約190万人

面積 1,121平方キロメートル

市内公立児童館数 155館（児童会館104館、

小学校内に設置の「ミニ児童会館」41館）

※4館を除き放課後児童クラブ開設（全児童対応）

公立小学校 209校、同中学校 100校

他の青少年施設 こどもの劇場「やまびこ座」、

こども人形劇場「こぐま座」、青少年センター、

勤労青少年ホーム5館、定山渓自然の村等

### 児童館のプロフィール

#### ◇札幌市苗穂はるにれ児童会館

- 昭和63年4月に開館。「札幌市中央区苗穂まちづくりセンター」（市の出先機関）及び「中央区苗穂会館」（町内会館）との複合施設。年間来館者数1万5千人程度。職員数は常勤3名、非常勤1名。シフト制で運営。休館日は日曜及び祝日、年末年始（12/29～1/3）同一小学校校区に「札幌市中央小ミニ児童会館」があることから、児童クラブは未開設。一日の利用者数

は平均して35名前後であり、ほとんどが小学生の利用者である。小学生の頃に利用していた中高生の多くは、部活動のため利用は少ないが、合間に来館し仲間や職員と談笑する姿が見受けられる。毎週木曜日（学校長期休業中は除く）に「子育てサロン」（子育て支援事業）を実施。

- 地域と連携した事業を多く展開。16年度～当別町農家グループ「郷愛ファームふとみ」・北海道庁と共に、農業体験や食育事業を継続実施。

#### 平成20年度

##### 札幌市苗穂はるにれ児童会館の主な年間事業一覧

###### ● 地域共催行事

実施月日	事業名	対象
8/3	サマーフェスティバル・イン・なえぼ	幼児～大人
10/7	苗穂・東・東北地区合同子育て支援事業	乳幼児とその保護者
12/7	中央区インドア雪合戦大会	小学生
12/20	子ども会共催 クリスマス会	小学生
2/6	北海道電力共催 「マドレーナ放課後」	小学生
2/15	苗穂雪中運動会	幼児～大人

###### ● 農業体験・食育事業

5/25、6/20 8/24	ふれあいファームde ジャガジャガ隊	小学生と その家族
6/9～11/10 (計5回)	ジャガジャガ観察隊	小学生と その家族
7/26、9/1 11/10	はるにれ やさい研究所	小学生

###### ● その他の事業

7/31、 8/6	小中高生と幼児の世代間交流事業	小中高生と 乳幼児親子
8/6	こども運営委員会企画 遠足	小学生～ 高校生
9/7	中央区児童会館合同行事 大通公園ウォークラリー	幼児～大人
11/30	開館20周年記念 ありがとうまつり	幼児～大人
3/27	こども運営委員会企画 卒業を祝う会	小学生～ 高校生

# 野沢児童館モデル事業

～やりたい！発散したい！の気持ちを活かす～

## 中高生世代の仲間づくりと 地域交流

### 事業名

NLP（のざわじどうかんリーダープロジェクト）

### 事業のねらい

- ◆本事業を実施する中で、従来から児童館の活動に積極的に参加していた中高生世代のメンバーを核に、メンバーの定期的な活動を行う。
- ◆メンバーのお楽しみ活動を組み込みながら、児童館活動への参加・協力、来館児童や親子を対象にした自主企画への挑戦、地域と協力しながら活動を展開し様々な人と交流する。



### 実施概要

今回の事業は、従来から児童館活動に積極的に参加している中高生世代を核にして、児童館に来館する他の中高生世代を巻き込みながら、学校や学年・世代の枠を越えて様々な活動を行う。毎月の活動内容は、年度当初の総会での意見を基に、大まかな予定を立て企画委員（中心となるメンバー）を決める。実施日や具体的な内容は、企画委員を中心となり企画・準備を行う。企画や準備ではできる限りメンバーのペースで行えるようにするが、大学生ボランティアや職員などが一緒に入り内容を調整

することもある。

#### [NLPの発足の経緯]

数年前、児童館に頻繁に来館していた高校生から「中高生（世代）でキャンプがしたい」との声があがり、2年前の春休みに児童館内一泊の「中高生おとまり会」が実現した。この時に中心となった高校生が少しづつ児童館行事の中核になり、中高生世代が活躍する機会が徐々に増えていった。昨年の「中高生おとまり会」実施後の春休み、おとまり会に参加した中高生世代のメンバーが10名近く、毎日集まってきた。おとまり会でつながった関係の余韻に浸り「また、自分たちで何かやってみたい」という雰囲気が漂っていた。この勢いを春休みで終わらせ



るのはもったいない、何か中高生世代がもっと躍動できる場をつくりたいという思いから、中高生世代の活動の基盤としての組織づくりにとりかかった。また、モデル事業を引き受けるにあたって、大学生ボランティアや青少年委員、学校関係者の協力のもと、NLPの活動を支える地域の体制も整備した。事業目的に「地域」というキーワードを入れたことにより、児童館の中高生世代への活動に留まらず、企画の幅が地域にまでひろがり、より充実した活動となつた。

### <年間の流れ>

月1回程度の活動を中心に、月ごとの企画委員は事前に数回打ち合わせや準備を行う。年度当初に総会を開き、大まかな年間活動計画を立てるが、細かい活動対象や内容は企画委員に一任する。企画委員に任せるだけにならないように、打ち合わせや準備日程などを告知し、メンバーが積極的に関われる

5月	メンバー交流	ウォーカラリー
6月	メンバー研修	野外炊事に挑戦
7月～現在	メンバー交流	映画作りをしてみよう
8月	自主企画イベント	水合戦
10月	地域との連携イベント	児童館まつりに出店
11月	メンバー交流	運動会
12月	自主企画イベント	サンタプロジェクト
1月	地域との連携イベント	ウォーカラリー
3月（予定）	メンバー交流	中高生おとまり会

## 活動の記録

### <はじめに…>

活動をスタートするにあたり、メンバー間の共通認識を得るために、まず「総会」を開催した。「それはできない」などの否定や批判をしないというルールで、実現可能かどうかを問わず、とにかくやってみたいことをすべて、全員があげた。30近くの案から「本当にやってみたいこと」や「季節（実施時期）」を全員で考えながら年間計画をまとめた。各活動の詳細は、企画委員が3～1ヶ月前から話し合いを行い、ねらいや対象を決定した。各活動を分類すると「交流・研修」「自主企画イベント」「地域交流」の3つとなる。

### ① メンバー交流・研修 ～メンバー相互の親睦を図る～

「自分たちで楽しみたい！」が基本のこの活動は、メンバー同士が知り合う大切な活動である。メンバーを必ず数チームの小グループに分け、普段はなかなか話さないメンバーと交流がもてるようになると企画委員がグループ構成を調整している。また交流・研修の活動は新しいメンバーを紹介し、歓迎する場にもなっている。

### <びっくりウォーカラリー>

第1回目ということで、大学生ボランティアが中心となって企画準備をした。数回の現地調査や打ち合わせを重ねて準備をした。当日は2グループにわかれ、地図とコマ図を頼りに野沢の町探検に出発。前半はお互いを意識しすぎて緊張気味だったが、課題をクリアしていく中で徐々に会話が増え、交流ができた。

### <フィールドクッキング>

「料理をつくってみんなで食べたい」「キャンプの炊事実習をしたい」と決まった企画。企画委員が事前実習をして、タイムスケジュール、ルール（課題）や役割分担などを確認し準備をすすめた。当日は、





薪割りや火のつけ方など野外炊事の経験が少ないため戸惑う姿も見られたが、大学生ボランティアから丁寧に教えてもらい、夏のキャンプ前の研修機会となった。終了後は、お互いの料理を交換しながら、ゆっくりと親睦をはかることもできた。

#### ＜映画づくり＞

映画をつくるってみたいで決まった企画。何から始めていいのかわからないままスタートした。プロからノウハウを学び脚本作りに取り掛かったものの、イメージが企画委員の中でも固まらず現在に至る。夏休みを越し、学校生活も忙しくなったり、受験シーズンに入ったりと日程調整の面でも苦労している。

#### ＜おもしろ運動会（ノリンピック）＞

新しいメンバーが増えてきたこともあり、全員揃って思い切り身体を動かそうということで決まった企画。「オリンピック」を模した聖火リレーから始まり、体力差だけで勝敗がつかないユニークな種目に挑戦した。地域の方も誘って、中1から大人まで幅広い年齢層の交流会となった。楽しい時間を全員で共有し、終了後は、もっと多くの人に参加を呼びかけたいとの意見がでた。

上記活動終了後は、メンバー個々が「ふりかえりシート」にチームの協力度やどれだけ会話ができていたかを記入している。「名前もしなかった人と話して仲良くなった」「顔は知っていても話したことのない人と協力できた」などの仲間との関係を評価する感想が多く出される。しかし、職員からの見方との相違があるメンバーや課題をもつメンバーに対しては、職員間や大学生ボランティアとの反省会で対応を考え、個別の対応を検討し普段からのアプローチの方法を模索している。

### NLPの自主企画イベント ②～NLPが主体的に企画・運営し 来館者との交流を深める場をつくる～

NLPから発信するこの活動は、NLPのチーム力が發揮される活動となっている。「参加者にどう楽しんでもらえるか」を第一に考えながら内容を検討し、準備から実施までのプロセスを企画委員以外のメンバーも協力して取り組んでいる。メンバーが幅広い参加者との交流を楽しむとともに、次の中高生世代への発信の場にもなっている。

#### ＜水合戦＞

来館者に向けての初企画。企画委員の時間が合わず、なかなか話し合いが進まないため、広報が十分できなかった。館内ポスターで来館者への声かけにより計18名の参加があった。水鉄砲での的射抜くゲームで、全身びしょぬれになりながら水遊びを楽しんだ。当日、企画委員とメンバーとの打ち合わせが不十分なため、全体の動きが偏っていたことが課題として見えた。進行役のメンバーだけでなく、参加者の中に入って一緒に盛り上げる役割も必要だったという反省がでていた。

#### ＜サンタプロジェクト＞

乳幼児がいる家庭にサンタ一回（NLP）が訪問し、楽しいひと時をプレゼントする企画。事前に、参加者宅で打ち合わせを行なった。夢をこわさないような演出や楽しんでもらえるプログラムづくりなど、期待と不安をかかえ緊張しながらの準備だった。当日は、参加者と一緒にうたや手遊び、人形劇、ダンスなどで遊んだ。乳幼児のほかに、お父さんお母さんや祖父母、友だち家族などいろいろな人とふれあう体験の場ともなった。泣き出す子におろおろしたり、きらきらとした目に出逢ったり、かわいい笑顔にふれた



りできた。参加者、NLP双方から「来年も是非実施したい」との感想があった。

自主的な活動であり、司会進行などがスムーズにいかない部分や全体に向けて配慮を欠く場面も多くあるが、その場では職員はなるべく手を出さない方針で活動している。活動の反省会でメンバーからの気づきで課題が見えた事や全体で解決しなければいけない問題点については職員から提起し、NLPの課題として考えてもらうようにしている。NLPだけで実現できない内容については、地域の方やボランティアの応援を受けられるような体制を整えている。

### ③ 地域連携イベント ～地域の団体や個人との交流を図る～

NLPが地域活動に参加するこの活動は、②の自主企画イベントのねらいの他に、地域の人へ広く中高生世代を知ってもらうための活動となっている。NLP活動は、児童館にとどまるのではなく、地域の中に根を下ろした活動になることを将来的な目標としている。以下の活動内容の他にも、児童館のキャンプや行事にボランティアとして参加している。

#### <野沢児童館子どもまつり「えんにち」>

地域の個人や団体、児童館管轄の小中学校の子どもグループが協力し合って実施している地域事業に参加した。事前の大人実行委員会から企画委員も出席した。前日準備から後片付けまで18人のメンバーがフル稼働し、当日は4つのお店(革細工・ジャンケンゲーム、綿あめ・お好み焼き)やステージでのレンジャーショーと、シフト表を作成し全員が動きまわっておまつりを盛り上げた。おまつりの反省会では、地域の方から口々に感謝とねぎらいの言葉があった。全員が大きな達成感を得るとともに、地域の中でNLPの存在と行動力を認められた場となった。

#### <ウォークラリー～旭のまちをとびだそう!

#### 野沢下馬再発見～

小学校を拠点とした地域活動団体から協力依頼があり、共催という形で実施した初めての活動。参加者とNLPとの交流をはかるという目的もあって、グループのまとめ役として子どもたちと一緒に町を探検した。参加者たちとゴール後もあそんでいる光景は、NLPならではの展開となった。NLPが地域の担い

手として認められ、活躍する場が広がった。

職員は、メンバーが地域行事に参加できるよう、児童館での地域懇談会や地域の子ども関係の会議の際にNLPの説明をしたり、活動の場があるかどうかを確認したりしている。児童館が関わる地域行事には、できるかぎりメンバーを募り、メンバーと地域の人が一緒に活動できる場面を意識的につくった。今では認められて、地域団体から協力依頼が来るまでになつた。

## プログラムの成長・子どもの成長

NLPを組織する前の今までは、大学生ボランティアが中心となって様々な活動を展開していた。グループを立ち上げた当初はやりたいとの連絡があつて企画委員会を組織しても、自分たちで全員が集まる時間を調整することができないほど自主性が薄い状況があり、最終的には大学生ボランティアがフォローするような場面が多くみられた。メンバーも大学生ボランティアに頼りっぱなしになり、受け身の姿勢が見られた。しかし、徐々に自分たちが置かれている状況の中で「できること」「できないこと」の現状把握ができるようになってきた。できないのであれば、できるメンバーに協力依頼する、大学生ボランティアに相談するというような連携も取れてきた。企画委員以外のメンバーも、当日参加すればいいということではなく、NLPの一員としてグループへ関わる・支えるというように意識が変わってきている。何かあれば協力しあう体制ができ、特に準備や片付けの際は全員で迅速に対応するようになった。大学生ボランティアも



メンバーの成長を先輩として自然に見守ができるようになりつつある。また地域団体との共催事業の実施は児童館の枠を超えた地域に根ざした活動の一歩となった。

## 今後の見通し

### <評価・課題>

この活動は前年度まで児童館活動に積極的に協力してくれた中高生世代のメンバーが「もっと自分たちで何かやりたい」と始まった活動である。それまで、いくつかの仲良しグループであったメンバーが、顔見知りの関係から少しずつ助け合いの関係になりつつある。はじめての活動に、「どこまでできるのか?」「どうやって実現していくのか?」など、とまどう様子はまだあるが、経験を積みながら他者との関係づくりを学んでいる。

また、児童館事業の一環で始まったNLP活動であるが、NLPSC（野沢児童館リーダープロジェクトを支える地域の会）の協力を得ながら地域へ広がりいろいろな活動に取り組んでいる。特に、10月の児童館子どもまつりでは、NLPの想像を越えたパワーと結束力に対し高い評価があり、地域の子ども支援関係者へその存在が認知された。この活動をきっかけにして、地域から依頼のあった1月の活動は、NLP活動の実績を評価され、地域の団体から「一緒に活動しよう」と急遽活動に組み入れられたものである。地域団体の企画力とNLPの実行力とが結びつき、参加した子どもたちを含め全員が楽しめた活動であった。このように、児童館という枠を越えて活動の幅を広げつつある。

NLP活動をはじめてから児童館の活動の話題に「中高生」というワードが多く出るようになった。中高生世代のことについて関係機関との連絡調整する機会も増えた。メンバーが成長するように、NLP活動を通して児童館の活動の幅が広がった。

### <NLPメンバーの感想>

#### 地域広報誌に寄稿した文から抜粋

私は以前から、児童館主催の行事に参加していました。NLPの活動の話を聞いた時は、“自分たちで行事の企画・構成ができる”ということで、とても期待に胸を膨らませました。NLPが発足して半年以上が経ち、多くの行事をしました。参加してくれた小学生の笑顔や終わったあとの「楽しかった!!」という一言を聞いて、NL

Pに参加してよかったなあ、と思いました。実際、自分たちで行事の企画・構成をすることは、決して容易なことではありません。しかし、その苦悩の先に私が得たモノはかけがえのないものでした。NLPに参加したことでの成長を実感しています。これからもNLP活動を続け、多くの中高生にも関心をもってもらえるようにがんばっていきたいと思います。

(高校3年生 女子)

### <今後の見通し>

登録数12名ではじまった活動は、メンバーも徐々に増え現在は22名となった。活動の楽しさを広げたいとメンバーで誘い合って増えていった。NLPが様々な活動で楽しそうに活躍している姿や打ち合わせをしている姿を見て、小学生が「中学校になったらNLPできる?」との声も出てきている。初年度だけの盛り上がりに終わらず、5年後10年後の長期的展望も必要である。職員は異動が伴うため、必ずしも継続的な関わりが難しい一面もある。しかしながら、地域の人々は、これからもずっと関わりを持つことができる。NLP活動が、地域に理解され地域に根差した活動になることを目指していきたい。



## 世田谷区立 野沢児童館 の紹介

### 地域のプロフィール

世田谷区の南東部に位置し、三軒茶屋駅を中心とする商業地域と、野沢龍雲寺や世田谷観音、駒繫神社など古くからの神社仏閣を中心とした文化が残る地域、マンションや新興高級住宅など現代的な地域と様々な要素が混在する。緑の多い静けさにも恵まれた地域である。管轄の小中学校も地域に協力的である。



#### ◇東京都世田谷区

人口 約84万人（約43万世帯）

面積 58万平方キロメートル

区内公立児童館数 25館

新BOP64か所（区立小学校を活用し小学生の放課後健全育成を目的とした事業。全児童対象及び学童クラブ）

区立小学校 64校、同中学校 31校

他の青少年施設 プレイパーク4、青年の家1、青少年会館1

### 児童館のプロフィール

#### ◇世田谷区立野沢児童館

区内25館中14番目の昭和57年6月にオープンした児童館。広さは383m<sup>2</sup>（遊戯室・図書室・集会室・音楽室を含む。園庭を除く）、年間来館者数2万7千人程度、職員は5名。休館日は毎週月曜日と第2・4日曜日、祝日（祝日と休館日が重なった場合は翌日が休館）。利用時間は午前9時30分～午後6時まで。来館者は1日平均70～100名程

度。来館者の約半数は乳幼児とその親である。平日の午前中は乳幼児のプログラムを実施し、毎週20組前後の親子が参加している。小学生の来館者の約7割が4年生以上の高学年が利用している。特に友達と約束していくなくても児童館に行けば誰かに会えると、塾や習い事の前の短時間でも来館をしている。

中高生世代の利用は全体の約1割である。小学生からよく来館していたメンバーとその友達が多い。

日常の活動のほか、地域と協力した定期的な活動や季節を活かした行事なども行っている。児童館での活動以外にも小学校の保護者や地域の団体とも連携して活動している。

#### 平成20年度 野沢児童館の主要行事一覧

実施月日	イベント名	対象
4月	中高生進級進学おめでとう会	中学生以上
4月	新1年生おめでとう会	小学校1年
5月	こどもの日映画会	制限なし
6月	ヤングミュージックフェスティバル	中高生世代
8月	サマーキャンプ（2泊）	小学校4年～中学校3年
8月	館内キャンプ（1泊）	小学校1年～3年
10月	児童館まつり	制限なし
12月	児童館対抗ドッジボール大会	小学校1年～6年
1月	正月映画会	制限なし
1月	雪とあそぼう（1泊）	小学校2年～中学校3年
2月	世田谷地域文化交流会	小学校1年以上

# 名古屋市緑児童館モデル事業

## ～中高生とゼロからのスタート～

## 中高生と地域をつなぐきっかけづくり

緑児童館では今まで中高生のボランティア活動には取り組んでおらず、中高生活動の基盤となるものが存在しないため、「一緒にやってみよう」と思ってくれる中高生を探すところから開始した。中高生からヒアリングをする中で、関心をもちやすい身近なテーマ、取り組みやすい内容として、情報誌を作成することになった。情報誌作りを柱に中高生の力を地域で発揮する機会を広げていくことをねらいに、児童館が地域と中高生をつなぐ拠点となり、コーディネーターとなり「中高生と地域をつなぐプロジェクト」に取り組んだ。

### 事業名

### 緑区の中高生のための情報誌

～中高生と地域をつなぐプロジェクト～

### 事業のねらい

- ◆よく利用するお店、集まる場所などを調べ、中高生にとって地域が身近なものであることを認識してもらう。
- ◆地域で活躍する中高生の姿を紹介し、「自分たちも地域で何かをやってみよう」という中高生を増やすきっかけをつくる。
- ◆中高生のもっている力を地域で発揮する機会をつくる。
- ◆情報誌づくりを通じ出会った中高生が一同に集まる機会をつくりお互いの触発の場とする。

### 実施概要

今回の事業では、従来から来館している中高生に加え、チラシを近隣の高校や中学校に配布し、児童館行事ボランティアを積極的に募集したところ、30人もの中高生が集まった。その経験から、「活躍してみたい」「何か役に立ちたい」と思う中高生がいることがわかった。また、区内の中学校や高校、社会福祉協議会へ出向き、地域の中で活動している中高生の情報を探し、ヒアリングを実施したところ、様々な活動をする中高生が存在することが分かった。



中高生の活動をつないでいくには、情報誌づくりなどが良いだろうと考えていたところ、高校生からも情報誌制作が提案されたため、実現していくことになった。

情報誌には、それぞれの活動を中高生自身に紹介してもらうことにした。それぞれが個々に情報誌の原稿を作る前に、顔合わせの機会として「交流会」を開き、お互いを知る機会をつくり、中高生同士が触発しあえる場を設けた。原稿づくりでは、職員と大学生ボランティアが、中高生の意見やアイデアを聴き、助言などをしていく中で、新たなアイデアが生まれるなどしたので、関係づくりも大切にした。

## <年間の流れ>

地域へのアプローチとして、地域活性化に取り組む地域団体の代表者や、地元の中学校や高校、区社会福祉協議会などに職員が出向き、中高生の活動状況をヒアリングした。

中高生の活動がスタートしてからはチラシを配り、情報誌のアピールや投げかけをした。情報誌での中高生の活動紹介は、中高生自身が表現してみたいことを実現できるようアドバイスをし、さらなる展開が広がるよう職員が助言。メンバーが増えてくるにつれ、交流の場を提供することで、顔見知りのメンバーが触発し合い、意見交換ができるよう環境づくりをした。それぞれの活動は表のとおり。

地域へのアプローチ		中高生の主な活動
4月		館内で中高生ボランティア交流会を実施し、児童館行事ボランティアを呼びかけた
5月	高校へ出向きボランティア呼びかけ	
6月		児童館こどもまつりで中高生約30名が活躍
7月	地域活性化に取り組む団体の代表に中高生の地域参加についてヒアリング実施	情報誌メンバー募集チラシ作成
8月	区社協主催「福祉・ボランティアふれあいらいぶ2008」で情報誌づくりPR	情報誌の内容を検討する。 調査カードを配布
9月	地域のまつりへ取材	情報誌メンバー募集チラシ作成
10月	中学校のボランティア部ヒアリング 緑区社会福祉行議会でヒアリング	高校生が作成したアンケート実施
11月		第1回交流会実施。活動を互いに紹介し、進行状況について報告
12月		第2回交流会実施。みんなでやきいもを食べて意見交換会 中日新聞社ショッパーの取材を受ける
1月		情報誌 編集会議
2月		中高生フォーラム開催 情報誌 印刷 中日新聞の取材を受ける

## 活動の記録

### ① 地域へのアプローチ

#### <児童館から地域へ>

中高生の地域での活動状況を知るために、地域団体、中学校や高校、区社会福祉協議会に2ヶ月かけて事前ヒアリングした。また、緑児童館を利用する中高生、今までに児童館でボランティアの経験がある中高生、地域で活動する実績をもつ中高生などに声をかけ、どのように働きかけたら中高生が主体的に情報誌づくりに関わってくれるかを事前ヒアリングした。

#### <様々な中高生への呼びかけ>

メンバーを集めるため、高校生が描いたイラスト入りのチラシを印刷し、地元の中学校や高校に各クラスへの掲示をお願いしに職員が出向いた。また、児童館を利用している中学生や高校生へ声かけしたり、地域の祭りに出向き中高生からヒアリングを行ったりした。これらの事前活動を通して核となる中高生を発掘し、児童館に中高生を引き付け、活動に自分



の意志で参加できるよう、色々な角度から様々な中高生にアプローチした。

#### ①児童館のリピーターグループ

10人程の中高生グループ。6月のこどもまつりでは、積極的にゲームコーナーや売店運営に取り組んだ。児童館内のドッジボール大会などにもボランティアとして活躍。

②こどもまつりのボランティアに来た高校生グループ  
近隣の女子高校生。ちょっとボラならやりたいが継続的に関わることは二の足を踏んでいる。

#### ③時々遊びに来るバスケ少年達

近所に住む4人の男子高校生グループ。6月の児童館こどもまつりの当日、手伝いにきてくれた。情報誌づくりの協力をと声かけしたところ協力してくれること

になった。

#### ④地元のやんちゃな男子中学生グループ

鳴海の山車まつりに感心をもっており、話をすると熱く鳴海の祭りを語りだす少年達。

#### ⑤福祉・ボランティアふれあいらいぶ2008

8月に区社会福祉協議会が若者向けに主催した「福祉・ボランティアふれあいらいぶ2008」の中で情報誌づくりをPRするため、調査カードを持って高校生が参加。中高生の一般参加はほとんどなく、小学生や大人ばかりで、中高生の地域参加はなかなか難しい現状であることを認識した。ただ、企画・運営で関わっていた滝ノ水中学校のボランティア部の存在を知り、また、区社会福祉協議会が発行する若者向けボランティア情報誌「BY★CHANCE」に関わる高校生と出会った。

#### ⑥鳴海の山車まつり

児童館のある鳴海町は、祭りに熱心に取り組む古い町である。町内ごとに山車があり、活躍する中学生もいると噂には聞くが、その実体を知るために地域の役員の方にヒアリングを実施。若い人が減って、近年は祭りの運営が困難であることが分かった。

#### ⑦ど真ん中祭りの参加者

毎年8月末に鳴海で「ど真ん中祭り」が開催されており、当日、中高生の活躍状況を知るために出向いたところ、踊り子やボランティアで参加していた中学生数名と出会うことができた。(ど真ん中祭りとは・・・名古屋で年1回行われているお祭り「にっぽんど真ん中祭り」の略)

## 2 中高生の活動

### その1 「こどもまつり」

#### ＜活動期間＞

4月に行った「中高生ボランティア交流会」で意見交換をし、6月の「こどもまつり」に向けて、ブースの出店やボランティアをしてみないかと提案。4月末より企画書を中高生自身が考え作成。自分達だけではメンバーが足りず、5月初旬、各高校にチラシを配布し、新規のメンバーを募った。

#### ＜活動内容＞

日頃、児童館を利用している中高生がやりたいことを実現できる場としての第一歩として「中高生ボランティア交流会」を実施し、ここで、こどもまつりでのブース出店を提案。こどもまつりでどんなことをやってみたいかアイデアを引き出して、実現できる場・活躍できる場を作っていました。まつりの一週間前より、

買出しや準備を始め、当日を含め中高生ボランティアが活躍。普段から児童館を利用しているメンバーの他、各高校に掲示した募集チラシを見て応募したメンバーも参加。遊びコーナーや、会場入り口の整理など、各自工夫をしながらコーナーを担当。中高生自身の企画として「陣取り合戦」、「フランクフルト・ジュース屋」の運営がなされた。まつりを終えて、「大変だったけど、楽しかった」、「ありがとうと言われた時はとても嬉しかった」、「小さい子とたくさん関わって楽しかった」など体験してみて楽しかったという意見が非常に多く、中高生にとって良い経験になった。普段見せない笑った顔や人と話して喜ぶ姿があった。中高生の「力」というものは、大人ではない、子ども特有のパワーがあり、潜在的にもっている「力」を発揮する機会となった。

### その2 「中高生の情報誌」

#### ＜活動内容＞

##### ●中高生の力を信じて

ある高校生が「児童館が休みの時、みんな（中高生）はどこで遊んでいるのか知りたい」と言い出し、そこで「一緒に調べてみようか」と職員が投げ掛けたことがきっかけとなり、中高生が関心をもちやすい身近なテーマ、取り組む中で地域の中高生の実情が浮き彫りにできるもの、かつ、取り組みやすい内容のものとして、中高生の情報誌を作成することになった。調査カードを使い、緑区で中高生が放課後どこで集まっているか、利用しているお店の情報などを集めた。例えば、カラオケやボーリング場はどこを利用しているか、よく利用するコンビニはどこなど、場所を詳しく記入してもらった。

同時進行で、情報誌に関わる人員を集めること、学校以外で協力してくれるところをさがすこと、の二つを行った。学校にチラシを配っても、効果が見られず、口コミで人が集まった。情報誌作りがスタートしてからは、それぞれ得意分野や興味のある分野でグループを作り分かれて作業した。ボランティア活動、地域の行事への参加など、実際に活動している姿を自分たちで紹介し、地域で活動することの楽しさを伝えるページ構成となった。

「手間隙がかかるけど、情報誌できるんじゃない」という中高生の言葉を信じ、中高生と共に作業を進めた。ゴールが見えてくると、出来上がったら「どこに置くのか」、「児童館だけのものにするのではなく、みんなに見てもらうにはどうしたらいいか」、などの意見が出た。

##### ●個性的な紙面づくり

ファッション部門を担当する予定だった女子中学

生は、部活が忙しく、参加できなくなってしまった。たまたま児童館に遊びにきていた女子高生3人は、「高校生はたまることが好き」と話しながら、約1時間で下書きと原稿が完成した。また、児童館担当の高校生が児童館のアンケートを職員と打ち合わせしながら作成し、1ヶ月間のアンケートを行った。「ど真ん中まつり」チームの中学生2名がチームの紹介を担当。地域で活動する楽しさをページにこめてくれた。11月と12月に「中高生の情報誌・交流会」を開催し、11月は中高大学生18名が参加した。自己紹介ゲームを行った後にメンバーの紹介と各グループの苦労話、記事の進み状況などを報告し合った。12月は15名が参加。情報誌のタイトルが「Green Teen's (グリーンティーンズ)」に決まり、今後の予定、ページ数の記載場所を決定し、各自で自己紹介文を考えることになった。

### その3 「中高生フォーラム」

#### ＜概要＞

今回の中高生フォーラムは『緑区の中高生情報誌Green Teen's』の発表を中心に、緑区内で活動している中高生のネットワークと中高生と地域のつながりをつくるきっかけづくりになればと実施された。情報誌づくりに関わった中高生が一同に集まる機会をつくった。フォーラムでは、高校生バンドの演奏、自己紹介、それぞれの活動紹介、情報誌の記事の発表、グループディスカッション、最後は「ど真ん中祭り」のチームと一緒に踊り、全体を通して、中高生同士が地域で活動しているそれぞれの中高生の活動を知る機会となった。

#### ＜活動内容＞

児童館では会場が狭いため、地元のホール（JAみどり本店）を借りることにした。当日までに司会担当と、会場作りや写真撮影を手伝ってくれる中高生を募った。準備段階では、フォーラムの内容を中高生と一緒に考えながら、情報誌の発表に向け、仮の冊子本を作り、当日の機材搬入、設置も高校生が行い、本番を迎えた。中高生が28名、大学生が7名、スタッフを合わせ全員で40名が参加。受付で名札と自己紹介カードを作り、4つのグループに分かれた。オープニングは高校1年生の4人組バンド『branch (ブランチ)』の演奏で始まった。演奏後、それぞれのグループで、情報誌に関わってみて良かった点、もう少しこうした方が良かった点、仮の情報誌を見てみての感想を一人ずつポスト잇に書き出し、話し合い、グループごとに発表を行った。良かった点で、「いろんな人と出会えた」、「活動を



色々な人にみてもらえる」、「色々な情報を楽しく知る機会ができるのはいいこと」、「緑区内の中高生がたくさん書いていて読んでいて楽しい」があり、もう少しこうした方が良かった点、仮の情報誌を見てみての感想として、「もっと読み手に対して読みやすくしたかった」、「見開きのページをつくったら見やすい」、「全体的にレイアウトをもう少し工夫して面白みのある誌面にすればよかった」などの意見が寄せられた。グループ発表後に、『BY★CHANCE』のメンバーによるボランティア活動の発表を行い、最後に地域で活動をしている、ど真ん中祭りのチームによる踊りで幕を閉じた。今回のフォーラムで寄せられた意見や感想を元に、2月中に情報誌の内容を編集し印刷、3月に発行。



### プログラムの成長・子どもの成長

交流会を開き、中高生が一同に集まり、一つのものを作りあげていくプロセスの中で、自然に連帯感が生まれ、アイディアができた。また児童館に対しての意見・要望などが中高生から出るようになった。振り返りでは、「気持ちがあってボランティアをした」「手伝いをすることで職員との関係を良くし、児童館を良くしていくらいいと思った」、「手伝ったことで自分にもプラスになるようにしたい」などの感想が聞かれた。これは児童館が中高生にとってより身近なものになり、自分たちでもっと良いものにしていくことを示すものだった。

いう自発的で主体的な気持ちが育ったといえるのではないだろうか。実際、このようなやりとりの中で、ボランティアをしてくれた高校生と職員との距離が近くになり、館全体が今まで以上に良い雰囲気となった。また、情報誌作りを通して、中高生が今まで話したことのない子や、異年齢の子、顔見知りの大人と話す機会が増え、地域の人と中高生が関わる機会ができた。それぞれの活動を知ることで触発される部分もあり、自分たちの活動に励みができたことと、自分たちの活動の良さ、素晴らしさを再確認することが出来たのではないかと思う。「また何か行事やイベントでボランティアが必要になったらメールしてください」と気軽に声をかけてくれる高校生が増え、児童館が地域の中高生活動の拠点となりつつあるのを感じる。

## 活動の記録

＜評価・課題＞

児童館でボランティアをしてくれる中高生を募っても来ないのであれば、中学・高校、地域や区社会福祉協議会などへアプローチをすることで情報を得、地域に直接呼びかけ参加者を募る仕組みを作っていくことができた。また、子ども自身へのアプローチとして、声かけを積極的に行い、一緒にやってみないかと誘うことにより、距離が縮まった。作業をするにあたり、職員自身がどんな性格なのかを再度確認し、足りない部分は他の職員に補ってもらいながら中高生と関わっていくことが大切と認識した。

交流会などを開き他の活動を知ることにより、子ども同士の触発が期待でき、そこから新たな発想が生まれることがあるので、このような機会を作ることが大切であると感じた。

何かやりたいことはないか意見を聞き、意見がまとまつたら、具体的に何が必要かを、中高生と共に考え、歩み寄り、話をすることから始め、職員が全部やるのでなく、中高生主体で考えることが重要である。職員間で中高生の情報を共有することにより、中高生との関わりをより強めていくことができる。

## ◇中高生から寄せられた感想

情報誌の製作という普段あまり関わることのない作業をして貴重な体験が出来て良い思い出になりました。(M・Hさん)

初めての経験で最初は戸惑いもあったけど、作業を進めていくうちにどんどん楽しくなっていきました。また自分の大好きなことを情報誌を通じて、

たくさんの人伝えが出来るっても素敵  
な機会になってよかったです。(A・Sさん)  
今までにこんな沢山の人の目に触れるようなイラ  
ストを描いたことがなかったのでとても緊張した  
が、どんな風に描けばいいのかを考え新鮮なこ  
とばかりですごく楽しかった。(R・Yさん)

### ＜実施しての悩み＞

ボランティア組織が存在しない現状からスタートをし、メンバーを集めることにとても苦労した。チラシを配っても人が集まらないので、児童館を利用する中高生に意見を聞き、チラシもどんどんリニューアルし、広報の仕方を変更し続けた。また中高生からのヒアリングで情報誌の中身をどうするかと一緒に考え、悩んで、書いての繰り返しが続いた。

作業は一緒に行わないとい、宿題のように思われてしまい、中高生の負担になってしまうことがわかった。また、違う視点をもった他の職員の手もかりる必要がある。中高生と作業する際には待つことが必要で、遊びが半分以上あることを職員が認識し、焦らず信じて待つことが大切だと気付いた。

## ＜今後の展開＞

今回の事業をきっかけに各中学校や高校、他の多種機関とのつながりが出来た。現在見直しが行われている緑区の地域福祉活動計画の中にも中高生の地域参加を位置付けることができたため、今後は「中高生」の活動を地域住民とともに考え、中高生が住みやすい、そして活躍できる地域に少しずつ変えていけるのではないだろうか。

情報誌を作り終え、第2弾の発行も中高生がやりたいのであれば、作ることも可能である。

中高生のもつている力を地域で發揮できるような機会を中高生と共に考え、共に悩み、共に歩んでいくこと、児童館が地域と中高生をつなぐ拠点となり、またコーディネーターとなることを引き続き行っていく予定である。「中高生の情報」を児童館から地域へ発信し続けていきたい。

「トピ2  
街中  
中・高生が中・高生のために作る  
楽しい内容満載の情報誌

「ゲーマー」「ボランチ  
遊び場」「メンバートーク」  
など、中・高生の「今」を捉え  
た情報誌が、2月に発行されます。  
名前は、「グリーンチャイーン」。企  
画・制作は現役の中・高生です。  
去年の秋から準備  
今年の夏に向けてラス  
トスイートを行います  
みんなが見たくなる  
よう見せたいです。

木見英さんは  
自身が所属し  
ている鳴子踊  
りグループの  
紹介記事を書くほか、  
友人の橋本瑞  
香さんと一緒に表紙も担当します。  
取材日、「美術部の友達の家の泊  
まつて、徹夜で作るつもり。ほつと  
日を引くような作品にしたいです」  
と2人。若さあふれる楽しげな雰面  
になりそうです。「元気な情報誌は  
いいですね」と、元気な見聞館編集長の  
緑児児童館(緑児児童館2-701)  
などで覗できます。問/同館(電  
話052-6223-9636)

## 名古屋市 緑児童館 の紹介

### 地域のプロフィール

緑区にただ一つしかない児童館で、区のほぼ中心、住宅街の中に位置する。市内で最も人口の多い区。他区では少子化で学校統合が進む中で、この3年間で新設小学校が2校増設。児童館の南側には旧東海道、北側には新興住宅地がある。南側は昔から住む住民が多く、近くの公園には地元の幼児～小学生とその親が集い、集団で遊ぶ姿がよくみられ、異世代が混在。



### ◇名古屋市緑区

人口 約22万人

面積 37.8平方キロメートル

公立小学校 28校・同中学校 12校

県立高校 1校・市立高校 1校

### 児童館のプロフィール

#### ◇名古屋市緑児童館 (NPO法人 こどもNPO)

市内18館のうちの1館。昭和50年に開設された児童館。平成20年4月より、指定管理者としてNPO法人こどもNPOが管理運営している。広さ563.94m<sup>2</sup>（ホール・遊戯室・児童室・図書室・事務室・クラブ室・屋上テラス・留守家庭児童クラブ室を含む）、月間来館者数約3300名程度、職員は4名（留守家庭児童クラブ員を含まず）で常時2～4名がシフトで勤務する。休館日は月曜日、祝日（5月5日は除く）、年末・年始。利用時間は8時45分から17時まで。1階が福祉会館、2階が児童館の併設館である。

一般の来館者の平均は子どもたちが平日40～80名程度。土日の利用は100名を超える。そのうち約半数は小学生であり、自由利用の他、卓球クラブ、将棋クラブ、体操クラブ、おりがみクラブを行っている。また0歳児・1歳児・2歳児はそれぞれ年齢に合ったクラブを実施。児童館内だけではなく、乳幼児と保護者対象の「親子のつどい・屋外型」、学校帰りの子どもを対象とした「冒険遊び場」と題した移動児童館を館外で展開。また中学生・高校生の利用も多く、卓球やバスケ、漫画を読んだり、時には小学生と一緒に遊んだりと異年齢が利用している。

平成20年度 名古屋市緑児童館の主な年間イベント一覧表

実施月日	イベント名	対象
5月5日	子ども条例クイズ大会	制限なし
5月31日	オセロ大会	小学生
6月8日	こどもまつり	制限なし
7月26日	こども企画 おばけやしき	幼児～小学生
8月8日	ドッジボール大会	小学生
9月7日	バスハイク	小学生
10月19日	卓球大会	小学生
11月16日	赤ちゃんと中学生の交流	中学生
11月29日	こども企画 折紙教室	幼児～小学生
12月14日	クリスマス会	幼児～小学生
1月18日	もちつき子ども大会	小学生～高校生
2月8日	チョコを通して世界を考えよう	小中学生
2月15日	将棋大会	小学生
3月31日	楽しい昆虫のお話と工作	小学生

# 松山市中央児童センターモデル事業

## ～子どもとともに自己実現～

### 自分たちのやりたいことを カタチに!!

『他では経験できない、児童館だからできる、“自分たちがやりたい活動”を!』これが、中高生ボランティアグループ「Sunらいおん'sクラブ」のモットーである。彼、彼女達にとって自分のやりたい事を実現できる児童センターは、学校や家庭とは異なる1つの居場所となっているようだ。とは言うものの、ボランティア（館内イベントの手伝い）といった向きも強く、中高生が主体か？というと疑問であった。そこでこのモデル事業を機に、これまでの活動方針や内容を見直し、普段の活動に様々なプログラムをプラスして、彼らの“やりたい事・想い”を1番に考え、カタチにするべく取り組んだ。

#### 事業名

#### “やりたい活動の実現に向けて”

#### 事業のねらい

様々な経験を通して…

- ◆館内外の活動で出会う幅広い人（乳幼児、高齢者、障害のある人…）と接し、人への関心、相手を想いやる気持ち、人に対する柔軟な心を育む。
- ◆館外に出て活動を行うことで、地域や自分の住んでいる町・人（特に同世代）に中高生が行う活動について少しでも知ってもらい、児童館、Sunらいおん'sクラブに興味を持つもらう。
- ◆自分たちでカフェやあそびコーナー等を企画、運営する活動を通して、縮図ではあるが中高生の社会・職場体験となる場を提供する。



たい」など様々な意見が出た。できる限り、色々な形で中高生の“やりたい事”を実現できるよう、クラブ員・スタッフ同士で話し合いを行い、以下のような事業を実施した。

- ①市内商店街「土曜夜市」へのあそび屋台の出店（全3回）。
- ②松山市児童館合同事業「第12回あそぼうフェスタ」へのあそびコーナーの出店（10月）。
- ③来館者を対象とした館内カフェ（豆カフェ）の企画・運営（年間・月1回程度）。

#### 実施概要

今回の事業を行うにあたり、今年度1回目の活動で“今年やりたい事”を聞く。

直接話せる子もいれば、人前で話す事が苦手な子もいるため、自己紹介カードを作成し、自由に記入してもらった。その結果、「自分たちのお店、コーナーをしたい」「乳幼児と触れ合いたい」「キャンプをしたい」「お菓子などを作り、老人ホームを訪問し

いずれの事業も日常の活動で、企画や製作物の



作成など準備を行う。その際、来ているメンバーや場の雰囲気に応じてスタッフが同席し、作業を促したり、情報を提供したりする。反対に、中心となって活動を進められる子が出席している場合は、決定事項などの大きな枠を設け、スタッフは席をはずし、離れた場所で待つ事もある。

#### <年間の流れ>

今年度は、月4、5回、1回あたり3時間程度実施している日常のクラブ活動を利用し、主に本事業の準備を行った。この他にも、児童センターで行うイベントやキャンプレーダーとしてのお手伝い、施設訪問活動、乳幼児とのふれあい事業など様々な活動を体験しながら、その中で中高生が“やりたい事”を見つけ、カタチにできるように、スタッフ側も様々なプログラムを用意した。

日常的活動	毎週土曜or日曜の3時間	主にイベント準備
自主的な活動	7月実施 10月実施 通年（月1回）実施	「土曜夜市」出店 あそぼうフェスタへの参加 館内カフェ
交流（乳幼児・高齢者）活動	11月実施 12月実施 1・3月実施	乳幼児ふれあい事業「KIDSカフェ」 クリスマス会（乳幼児対象） 高齢者施設訪問活動

## 活動の記録

### ① 土曜夜市出店 ～まずは想いを実現しよう～

#### <活動期間>

1回目…7月12日（土）14時～15時30分  
2回目…7月19日（土）14時～16時  
3回目…7月26日（土）14時～17時

#### <活動内容>

松山市内中心部の商店街で行われている土曜夜市（7月上旬～8月上旬の13時～21時）は、毎回約4万人の人出があり、松山の夏の風物詩でもある。近年になり一般出店も可能になったことと、中高生達から参加をしてみたいという希望があったため、館外での活動を通して様々な年齢や人との関わり（交流）を目的とし、期間中3回遊びの屋台（射的、ダーツなど1ゲーム100円）を出店した。

#### <活動の変遷>

出店1回目は、3種類の遊びの屋台を出店する。初めてということもあり、日程・役割・運搬等の説明をスタッフが行う。恥ずかしさからかお客様への呼び込みも戸惑っており、スタッフが率先して行った。その日の反省では、お客様を増やすには、設定金額の値下げや出店時間の延長、おそろいのウェアをそろ



えたいなど活発な意見が出た。

2回目は前回よりも多い、4種類の遊びの屋台を出店する。役割・運搬等もスムーズに、お客様への呼びかけも自発的でできていた。前回の意見を取り入れ、出店時間を30分延長した。お客様の数は前回とあまり変わらなかったが、あるメンバーの「参加してくれた子どもの笑顔と自分達の成長のために」という発言に全員が共感していた。また、さらなる出店時間の延長と、目立つ看板や飾りがあればいいのではないかという意見がでた。

最後となる3回目は、前回と同様、4種類の出店を行った。中高生たちの「もっと出店時間を延ばしてほしい」との声から活動を2回目よりも1時間延長する。夕方になるにつれ客足が増え、お店の装飾に足を止めて参加してくれる子どもも大勢いた。“夜市”という意味では、これからが本番という時間帯に撤収をしなければいけなかつたが、中高生達は充実感を得ていた。

**松山市児童館合同事業  
「第12回あそぼうフェスタ」へ  
あそびコーナー出店  
～みんなの想いをつなぐ活動～**

**<活動期間>**

Tシャツ作成…9月6日(土)、13日(土)

※共に13時～16時

コーナー企画&準備…9月20日(土)、27日(土)、  
10月4日(土)、5日(日)、11日(土)、12日(日)

※全て13時～16時

あそぼうフェスタ…10月19日(日)10時～15時

ふりかえり…10月25日(土)13時～16時

**<活動内容>**

松山市児童館合同事業「第12回あそぼうフェスタ」は子どもとその保護者を対象にした市内児童館最大のイベントで、毎年6千人近くの参加がある。遊びや体験活動のブースは、各児童館のコーナーに加え、各ボランティア団体の出店数をあわせると30近くに及ぶ。

毎年ボランティアとして中高生が参加してきたイベントであったが、今回は、スタッフのサポートのもと、中高生のみで、担当コーナーの企画の立案、準備物作成、当日の運営を行った。自分達の想いや気持ちを整理・確認し、カタチにして、参加者に伝えすることを目的とした。

**<活動の変遷>**

コーナー企画当初、このイベント自体の趣旨や規模、実績を前年度までの資料と参加経験のある中高生が感想を伝え、中高生の意識の統一を図る。その結果、コーナー企画前におそろいのTシャツを作りたいという声が上がった。デザインから発注まで中高生を中心に行い、スタッフがサポートする形をとることで、自分達でカタチにしたという達成感や団結につながったと感じる。



コーナー企画では、初めはスタッフと一緒に話し合いに入っていたのだが、中高生だけの方が話を進めやすそうだったので、大まかな枠（コーナーのスペース、場所、対象者等）を伝え、ボランティアとして参加経験のあるメンバーに進行を任せて、できあがった案をスタッフと相談する形をとる。その結果、巨大ハンマーで巨大だるまをくずす「巨大だるまくずし」と場内をオリエンテーリング形式でまわる「アニマル探検隊」という『自分達がやってみたい!』という気持ちの詰まった2つの企画ができあがった。スタッフの視点から、運営上、難しそうな点を抽出し、改善策を中高生と共に考えていく。準備に関しても毎回スタッフが、「今日はどこまで何をやるのか」ということを明確に伝え、中高生が自主的に作業を進めていった。各回終了後には、目標をクリアしたという小さいけれども達成感を得ることができ、積み重ねが次の意欲につながっていった。中高生が積極的に、かつ自主的に活動することで、予定を上回るスピードで準備をおえることができた。

あそぼうフェスタ当日は、自分達が企画・準備をしてきたという自信と、みんなに参加して欲しいという気持ちから表情や対応がとても親しみやすく、参加者のアンケートからも“楽しかった、またやってみたい”との声が多くあった。中高生の中でもリーダーとして活動を行ったメンバーは、緊張感と疲労感はあったものの、中高生が1つになり、自分達だけで運営したという満足感は大きかったようで、後の振り返りでは「人生こんな楽しいことは二度と無いかもしれない」「受験生なのに…それはそれとして良かった」という感想があった。





### ③ 「豆カフェ」オープンにむけて ～日常をつなぐ活動～

#### 〈活動期間〉

●普段は月に1度、長期休暇の時は、2、3度実施している。「豆カフェ」を来館者に知ってもらい、たくさん利用してもらう為、年間を通した活動としている。

実施時間帯は、14:00～15:30で子どもたちのおやつタイムに合わせて行っている。

#### 〈活動内容〉

●定期的な活動中、女子が中心となってメニューやちらし、食券のデザインなど準備を行う。中高生たちは、「小学生に50円は高いから、もっと安い方が良い」「小さい子のコップには、フタをつけた方が良い」「セットにするとお得感がある」など相手“お客様”的立場に立って話し合いをしている。また、メニューが決まったら、欲しい物がいくらで売っているか、その商品をいくらで売ったら儲けがあるかなどを考える為、スタッフと共に、買い出しに出かける。

カフェ実施の日は、お客様がスムーズに流れ、くつろげるような雰囲気を作る為、配置や役割分担を行う。

オープン中、呼び込みや館内放送、商品の注文、片付けを行う。

#### 〈活動の変遷〉

##### “豆カフェ”

中高生が、児童センターのこじんまりとしたスペースでオープンしているからと名づけた名前である。事業をはじめた当初は、カフェがどういうものか、何をどうすればいいのか分からず不安そうだった。他館

の子ども喫茶へ見学に行くとイメージがわいたようであれなら私たちにもできる!と積極的に活動を行うようになる。“豆”的マスコットキャラクターを考え、絵の得意な子が形にしていく。そのキャラクターをチラシや食券に書くなど、手作りにこだわっていた。

はじめての実施のオープンでは、お客様にどう接していくのか分からず戸惑っていた。

恥ずかしさからか…呼び込みや館内放送は、ゆずり合いとなり、職員が促す場面も多かったが、アイスやジュースなど何かを作ったり、盛ったりする作業は、率先して行っていた。また、時には、お客様の人数より中高生の人数が多いこともあり、手持ちぶさたなメンバーや誰かがしてくれるという雰囲気になることもあった。回数を重ねていくと、中高生の動きに変化が出始める。初めは、自分が前に出る事が多かったが、それが中高生の小学生と一緒に行う時には、小学生の活動を見守り、困っていたら手を貸すようになる。その様子は、高校3年生や中学3年生と年齢が上になるほど顕著で、見ていて微笑ましい光景だった。また、定期的に行うことで、遊びにきている子どもにも“豆カフェ”が楽しみになっているようで、児童センターでカキ氷を食べる為に、一度家にお金を取りに帰る子もいた。この話を、高校生のクラブ員が「その子を待っています!」と笑顔で嬉しそうに話していた。“豆カフェ”的今後の目標は、自分たちで作ったお菓子を一緒に販売することである。

#### プログラムの成長・子どもの成長

中高生にとって、土曜夜市への第1回目のあそび屋台出店が、それ以後の事業に大きな影響をもたらしたように思う。これまでのように館内であそびコー

ナーを運営すれば、それを目的に来る人が多く、こちらがアクションを起こさなくても自然と人は集まった。しかし、館外に出るとそうはいかない。予想していたよりお客様が少なく、不完全燃焼のまま帰り、振り返りを行う。それぞれ気づく視点は違うが、「たくさんの人々に楽しんで来てもらう」という目的はみな同じ。良い事も悪い事も積極的に話をし、より良くする為に、しっかりとそれぞれの意見も聞き入れる。この繰り返しが、中高生の団結を強め、自然と言いたい事が言い合える関係を作りあげた。また、みんなで出し合った意見を第一に、それ以後の事業を実施したことが、あそび屋台の売り上げに反映され、中高生の自信にもつながった。中高生同士の素直な会話が、あそぼうフェスタの企画にも生かされ、参加者に人気のあるコーナーとしてでき上がったのだと感じる。

またSunらいおん'sクラブの中高生は、多くの活動を小学生と一緒にしている。この児童館ならではの異年齢活動も、自然と年下の面倒を見て、時には年上を見習うといった、温かく思いやりのある人間として成長できる場であるように思う。

## 今後の見通し

### 〈評価・課題〉

本事業を終え、中高生に感想を聞いた。すると、「自分たちのやりたい事をできる限りさせてもらえると、私たちもやる氣ができる。」「自分がやりたい活動をすると、自分も楽しいし、なにより、周りを楽しませることができる。」「同じことではなく、色々変わった事が経験できて良かった。」など様々な感想があった。これらの感想や本事業から、感じた事は、現在の中高生の中には“音楽をやりたい”・“劇をしたい”など、自分の“やりたいこと”が明確な子もいれば“何か夢中になりたいけれど…何をしていいのか。やりたい事はあっても…どうしていいのか分からぬ。”とその方法を探している子も多いということだ。そこで、中高生と関わる児童館スタッフには、まず、中高生が何をしたいのかを見つけるため、様々なプログラムを企画する力、彼らの視野を少しでも広げ、実現に向け影からサポートをする力が必要であると考える。また、クラブ員に児童館でもっと多くの中高生が、積極的に活動するためにはどうすればいいか聞いてみたところ、「自分たちがやっている活動を、もっと外へアピールし、同世代の人に知ってもらう」「中高生のボランティアが何をしているか世間一般の若者が知ることが大切。そのためにも自分たちは、

もっと色々な場所で、色々な事をやってみると良い」という意見があり、私は、この的を射た考えに少し驚き、納得させられた。確かに、世間の中高生は、児童館がどんなところで、何をしているのか、ましてやその児童館でボランティアや自分のやりたい活動に挑戦できる事を知っている子は少ないだろう。

「児童館がもっと外へ向かって発信していく」これは、中高生活活性化事業にとっての大きな課題といえる。

### 〈実施しての悩み〉

中高生と事業を実施するにあたり悩んだ点は、中高生とスタッフの距離感と互いの気持ちのバランスであった。中高生は、「思春期」という難しい時期で、干渉し過ぎると“うざい”と言い、ほおっておくと“なんだか寂しい”と微妙な年代である。しかし気持ちのどこかで、自分と同じ目線で向き合ってくれ、話を聞き、共に考えてくれる大人を探しているように感じる。また、いくら中高生がやりたい事業であっても、気持ちの面でスタッフの想いや考えが強すぎ、スタッフの色が強くなることは、子どもにとって、プレッシャーとなる。この状態では、満足感や達成感は生まれず“やりたい事業”から“やらされている事業”になってしまう。スタッフの関わり方1つが良くも悪くもなる微妙な年齢の中高生。その子、ひとりひとりに合った方法で、互いに程よい距離を見つけ、関わるという難しさがあると感じた。

### 〈今後の見通し〉

今後、中高生には、Sunらいおん'sクラブで行う様々な事業を、『社会に出る準備期間』として過ごしてもらいたいと思う。また、今回特にこうした事業の機会を得て、中高生の中にある“やりたい事・想い”にスポットをあてることができた。“やりたい事をどうしたら実現できるのか”実現するまでのプロセスについて自ら考え、カタチにしていくことの面白さ、他では体験できない活動や人との関わりなど、少なからず体験できたと思う。そして、将来こうした体験のひとつひとつが経験として積み重なり、いつか大きな夢の実現に立ちむかえる「自信」と「力」を身につけて欲しいと考えている。

また、今回のモデル事業を実施して感じたが、中学生になって突然、積極的に児童館を利用する子どもは少ない。異年齢交流が可能な児童館の特性を生かし、ジュニア世代からの継続的な活動を行うことが、将来的な中高生を育て、活性化につながると思う。

## 松山市 中央児童センター の紹介

### 地域のプロフィール

愛媛県の中央部にあり、瀬戸内海に面した温暖な気候に属している。平成12年4月に中核市に移行し、平成17年1月に北条市、中島町と合併した。松山城の西側に位置する児童センター周辺には、マンションや社宅、商店街が立ち並ぶ。また、市内でも有数のマンモス校があり、子育て世代の家族と昔からの住民が住んでいる地域である。



### ◇愛媛県松山市

人口 約52万人、

面積 約430万平方メートル

市内公立児童館数6館、

公立小学校57校・同中学校29校

他の青少年施設=松山市野外活動センター、

放課後児童クラブ（44か所）

### 児童館のプロフィール

#### ◇松山市中央児童センター

市内の中心部に位置する児童センター。市内6館中2番目の平成7年に開館し、中核的役割を持ち、市内全域を視野に入れた様々な活動を実施している。

広さは約1,000m<sup>2</sup>、年間利用者数6万人程度、職員は常勤9名で常時5~6名がシフトで勤務する。休館日は月曜日（祝祭日にあたる場合はその翌日）と年末年始（12月29日～1月3日）。利用時間は9時から17時30分まで。松山市ハーモニープラザ・松山市シルバー人材センターとの複合施設である。一般来館者の平均は平日80名程度。そのうち、約半数は就園前の乳幼児とその保護者である。午前中は「親子のびのび体操広場」として、30分程度のプログラムを中心に、乳幼児親子の交流や子

育て支援活動を促進する活動を実施している。午後からは主に近隣の小学生が来館し、自由利用のほか、水曜日には障害児とその保護者を対象にしたクラブ、木曜日には幼児・小学生を対象に体力増進活動クラブを行っている。週末の来館者は150名程度。近隣の利用者に加え、中高生や市内全域から家族連れの来館がある。

館内には体育室・工作室・遊戯室・幼稚室・集会室・図書室に加え、中高生専用のスペースとして年長児童向けの図書や音楽視聴コーナーを設置しており、平日の夕方や週末には中高生の利用がある。

また、日常の活動のほか、季節行事のイベントや移動児童館などを実施している。

平成20年度 松山市中央児童センターの主な年間イベント一覧表

実施月日	イベント名	対象
5月3～5日	しまなみ海道サイクリングツアー	小学5年生以上
5月17日	春のちよこっと遠足	小学生
6月8日	青空の下みんなであそぼう	未就学児とその保護者
7月4日	キラ☆七夕会	未就学児とその保護者
7月30・31日	WAIWAIキャンプ	小学4～6年生
8月11日	松山市児童館合同イベント「野球サンバ」	制限なし
8月20～26日	WAKUWAKU子どもキャンプ	小学生
10月19日	松山市児童館合同イベント「あそぼうフェスタ」	制限なし
11月6日	秋のちびっこ運動会	未就園児とその保護者
11月16日	ハーモニーフェスティバル	制限なし
12月23日	クリスマス会	制限なし
12月28日	年末大掃除大会	制限なし
1月12日	もちつき大会	制限なし
1月31日・2月1日	ふゆの雪山体験ツアー	5歳以上とその保護者
3月15日	Sunらいおんフェスティバル	制限なし

# 小城市児童センターモデル事業

～中高生がつどく空間と仲間づくりをめざして～

## 中高生の中高生による 中高生のための居場所づくり

最近の中高生は大人が思っているより忙しい。しかし、家庭や学校にはない自分の居場所を求めている子も多いのではないだろうか。児童センターでの日常的な活動とは別に「個々が持っているやる気や能力、エネルギー」を引き出すような活動を展開することによって「自分たちの居場所・仲間づくり」へつなげ、自己実現・自己表現を目指した。

### 事業名

気軽にTe'ボラでつながろう!

### 事業のねらい

◆児童センターにおける中高生活動の活性化を目指し、中高生の「やってみたい」「やってみよう」を実現させる場・機会を提供し、異年齢での交流や仲間作り、新しい自分の発見、エネルギーの発散、地域のリーダー育成につなげる。  
また、これをきっかけに「手作りの中高生の居場所・空間」として、施設内環境の整備や職員の関わり方を見直しながら、よりよい環境づくりを推進する。



### 実施概要

①今回の事業に取り組むにあたり、「Te'ボラ」(=Teen'sボランティア) メンバーを募集し、既存する児童運営委員会とは別組織として活動。小学生帰宅後の17時～19時を中高生の時間として開館しているが、年々利用者が減っており、その時間と場所を有効活用するために、まずはメンバーで自分たち専用の空間づくりとして部屋の環境設定をした。職員が関わりながら同年代での情報交換や交流の場としてメンバーを中心に「Te'ボ

- ラカフェ」を週1回実施する。
- ②異年齢の交流やセンター事業へ参加し、あそびのリーダー・中高生リーダーとしてのスキルを学び、赤ちゃんとの交流を通して小さな命の大切さに触れる機会を持つ。
- ③センター事業に合わせて中高生企画イベントを実施し、中高生の「やってみたい」「やってみよう」をカタチにして、メンバーや参加者相互の自己実現の機会を設ける。



## <年間の流れ>

定期的にメンバー会議を通じ交流を行い、来館者を巻き込んだ「自分たちの居場所・仲間づくり」を行う。これをベースに異年齢での交流や体験の場を設け、センターでの日常的な活動につなげる。また、自主企画イベントを実施することでメンバー・参加者相互の自己実現の場とし、今後も様々な活動へ積極的に参加できるようにしていく。主な活動計画は表のとおりである。

## 活動の記録

### 1 環境づくり

#### <活動期間>

夏休みが終わった9月以降の毎日17時から、夕方利用のない幼稚室を中高生専用のスペースとして開放し、さらに11月から毎週土曜日の夕方、談話室のキッチンスペースにセルフカフェ（「Te'ボラカフェ」）を設置。

#### <活動内容>

幼稚室の利用は、17時までとなっているが、くつろぐスペースという観点から中高生への開放を以前より検討していた。環境づくりは、職員を中心に乳幼児の利用時間後に清掃を行い、おもちゃ類を片付けて幼稚すぎない空間づくりの工夫を行った。また、ティーンズ雑誌やCDコンポを設置するなど、中高生が寄り付きやすく、くつろげる環境を整えた。開始した当初は、幼稚室というイメージから、なかなか寄り付いてくれなかったが、職員の声かけにより勉強をしたり本を読んだりする姿が徐々に見られるようになった。スポーツが好きな中高生向けにも新しい遊具を設置した。

「Te'ボラカフェ」は、メンバーが準備や後片付け

#### Te's ボラ活動計画

活動期間	活動名
日常的な活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メンバー会議、準備8回（不定期）</li> <li>・Te'ボラカフェ（毎週土曜日） 17:00～18:30</li> </ul>
交流活動 11月～1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メンバー交流（Te'ボラカフェ同時活動）</li> <li>・赤ちゃんとのふれあい体験 (事前事後学習含む3回)</li> </ul>
イベント 12/21実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・TEEN'S フェスタ（自主企画運営）</li> </ul>



を行い、自分たちで運営するように職員が促した。飲み物を飲みながら、勉強をしたり友だちと談笑したりする場面が多く、また、利用者からメニューの要望を聞いたり、時々メンバーが作った手作りのお菓子も一緒にふるまうなど、メンバーと利用者相互のふれあいもできていて、自分たちで自分たちの居心地のいい場づくりができていた。

今後も環境づくりについては継続し、中高生のニーズに合った場の提供とともに、児童センターがもっと気軽に立ち寄れる場所として定着し、利用者が増えることを期待したい。

### 2 交流活動

#### (1) Te'ボラメンバー同士の交流

#### <活動期間>

メンバーの交流を目的として、11月1日と2月7日に「Te'ボラカフェ」で出すお菓子作りを実施。

#### <活動内容>

はじめはメンバー同士が打ち解けておらず、ただ黙々とお菓子作りに集中していたが、栄養士の先生や職員の働きかけによって少しづつ雰囲気が和んでいった。途中、先生に質問したり、メンバー同士で協力し合う場面も見られるようになった。作ったお菓



子は、試食後に来館した中高生へ「手作りのお菓子はどうですか」と声かけをしながら、飲み物と一緒にふるまい交流する時間を過ごした。

## (2) 異年齢での交流

### <活動期間>

- ・赤ちゃんと中高生のミニクリスマス会を12月20日に実施（事前・事後学習会含む）。
- ・中高生と乳幼児や小学生の交流を週末等に実施。

### <活動内容>

ミニクリスマス会は、児童センターの特徴を活かし、普段交わることの少ない赤ちゃんと中高生が一緒に時間を過ごし、赤ちゃんとのふれあいを楽しんだ。参加する中高生には事前学習として助産師さんの話を聞いて赤ちゃんについての勉強会を行った。そこでは赤ちゃんの人形に「かわいい」と興奮した様子で、実際にクリスマス会の中では特に戸惑うこともなく、目の前の小さな命に瞳をきらきらさせて愛おしそうに抱っこや面倒を見るなど、相互に楽しい時間を過ごしていた。赤ちゃんへのクリスマスプレゼントの中には、メンバーが手作りしたクリスマスカードを添えた。受け取った保護者は手づくりの温かさに感動されていたのが印象的だった。

日常的に、中高生が来館した際には、保護者の方の了承の上で一緒に遊んだり面倒を見るなどして、中高生と乳幼児のふれあう機会を積極的に設けていくたい。

## ③ 自主企画イベント

### <活動期間>

- ・中高生のイベント「TEEN'Sフェスタ」を12月21日に実施。



- ・イベントの企画会議や事前準備を11月中旬から行った。

### <活動内容>

児童センターが中高生の居場所であり、自主的な活動スペースとして利用できることを少しでも多くの人に知ってもらうために、日頃の活動や特技などの発表の場、中高生の「やってみたい」という気持ちを実現するための場として、Te'ボラのメンバーを中心にイベントの企画と運営をした。

主な内容は、パフォーマンス、体験コーナー（楽器・ヘアアレンジ・ネイル）、カフェ、クリスマス抽選会を実施した。パフォーマンスではゲストによるダンスとライブに加え、中高生参加の発表を行った。誰もがゲストの迫力あるパフォーマンスに圧倒され、また同世代の友だちが頑張っている姿みて、それぞれに感じるものがあったと思う。体験コーナーは、どれも中高生が興味のあることで、学校ではなかなか体験できない内容を盛り込んだ。活動が華美にならないか心配もしたが、講師に地元の高校の先生や専門学校の先生を招き、メンバーの意見も取り入れながら打ち合わせを行うなどして、中高生らしい工夫の中で活動ができた。「Te'ボラカフェ」では、50人分のお菓子とスープを作り大変だったが、利用者には大好評だった。また、カフェを楽しむ横で、ギターの弾き語りを実施し、両者が一体となつたとてもいい雰囲気のライブができた。さらに、児童センターの職員紹介をはじめ、Te'ボラ活動の呼びかけや、「Te'ボラカフェ」の人気メニューを紹介した情報掲示板を作り、児童センターが普段から中高生の活動の場や居場所であることをアピールした。

今回のイベントは、内容の提案から当日までの準備、司会進行までほとんどがメンバーによる企画・運営で実施した。メンバーが少ないにも関わらず、お互いに助け合いながら当日まで頑張った。イベント





後には、「自分が変わった」「いいきっかけになった」「新しい友だちの輪が広がった」とメンバーそれぞれが達成感と充実感を味わい、新たな自信と意欲を

持てたようだ。イベントに参加した中高生も、この特別な一日を十分に満喫していた。

#### Te'ボラ活動の主な経過表（H21年2月現在）

日時	内容	参加人数	
11月1日（土） 16:00～19:00	◆交流活動1回目 メンバー交流「お菓子作り」 ◆カフェ1回目 ◆会議2回目 Te'ボラ活動の詳細について ・お菓子作り・カフェの設置方法など ・赤ちゃんふれあい交流会 ・自主企画イベントの内容	メンバー：2名 カフェ利用：15名  職員：2名 講師：1名	
11月22日（土） 17:00～19:15	◆カフェ4回目 ◆会議3回目 ・カフェ12月当番決め ・自主企画イベントの内容検討、 担当決め、タイムスケジュール作成 ・交流活動「赤ちゃんふれあい交流会」 の内容決定	メンバー：5名 カフェ利用：8名  職員：2名	
12月13日（土） 15:00～19:00	◆会議⑤ 自主企画イベントについて ・進捗状況説明、確認・各コーナー 制作物等準備 ◆「赤ちゃんふれあい交流会」の準備 ・ダンス練習、カード作り ◆カフェ7回目	メンバー：5名 カフェ利用：15名  職員：1名	
12月20日（土） 9:30～12:00 16:00～18:00	◆交流活動2回目「赤ちゃんふれあい交流会」 ・事前学習会・ミニクリスマス会 ◆自主企画イベント「TEEN'Sフェスタ」の準備 ・カフェ用お菓子作り下準備、 イベント最終確認など	メンバー：4名 交流会参加：高校生6名 交流会参加：親子8組 職員：2名 講師：2名	
12月21日（日） 17:00～19:15	◆自主企画イベント「TEEN'Sフェスタ」実施 ・パフォーマンス ・体験コーナー：楽器・ヘアアレンジ・ネイル ・抽選会 ◆カフェ8回目	メンバー：5名 パフォーマンス出演：5組  職員：2名 講師：8名 ゲスト：3組	体験コーナー参加 楽器：8名 ヘアアレンジ：7名 ネイル：11名 カフェ利用：30名 抽選会参加：35名
1月17日（土） 16:00～18:00	◆交流活動3回目「赤ちゃんふれあい交流」 ・事後学習会 活動を振り返って	メンバー：1名 交流会参加：高校生2名 講師：1名 職員：2名	
2月7日（土） 13:30～18:30	◆交流活動4回目 メンバー交流「お菓子作り」 ◆会議6回目 「Te'ボラ活動のふりかえり」 ◆カフェ9回目	メンバー：4名 カフェ利用：15名 職員：3名	

## 活動の発展と子どもの成長

Te'ボラメンバーは学校や学年、住んでいる場所もそれぞれ違うため、まずは仲間意識を高めることから始めた。当初は緊張やとまどいがみられ、遠慮がちだった。そのため、職員も一緒にになって児童センターを中高生で盛り上げたいという気持ちを伝えるようにした。すると徐々にメンバーだけで会議ができるようになり、積極的な言動もみられ、その内容も充実していった。メンバーが少ないため、一人ひとりへの負担が心配されたが、職員やメンバー同士でこまめに連絡を取り合ったり、作業のときは職員も一緒にになって手伝うなどして、一体感をもって取り組んだ。

さまざまな過程で、子どもたち自身が一人ひとりの責任の重さや、自分の意見を言うこと、他人の意見を聞くこと、それがメンバーに与える影響というものを、身を持って感じていたようだ。自主企画であるTEEN'Sフェスタ後の、「大変だったけどやりがいがあって、楽しかった。」「仲間に支えられた。」というメンバーの感想から、みんなで取り組んだ活動の成果と、自分自身が成長した喜びを感じてくれたことが、職員にとっても何より嬉しく思った。



れた。」「引っ込み思案な自分自身を前進させるチャンスだと思って参加し、途中苦しんだけど、これを乗り越えれば自分は変われるという一筋の思いでやった。今では心から言える“一生の宝物”となった。」「思うように時間がとれず、もっと計画性を持つべきだった。自分で考え状況判断し、積極的に行動することの大切さが分かった。」

### <実施しての悩み>

一番はメンバーを集めること。近隣の学校へ協力を依頼しても反応は薄く、個人的に呼びかけをしても、活動に参加したいという気持ちはあるが、実際来館する時間がないなどの声があった。少人数で活動を始めたが、メンバーの都合上全員が集まることは難しく、話し合いができない状況の時もあった。メンバーからも、「もっとみんなで時間がとれれば、打ち合わせやリハーサルがきちんとできたのではないか」などの意見が出た。職員もできるだけメンバーの自主性に任せたいという気持ちの反面、具体的な指示を与える場面があった。また、活動全体を通して、児童センターが中高生にまだまだ認知されていない現状を実感した。

### <今後の展開>

「日常的に過ごす居場所」そして、「自分を認めてくれる人との人間関係の中に見出される心の居場所」をつくっていくために、まずはスタッフがその人となり、中高生同士をつないでいくキーマンになること。また、中高生の居場所であることを地域や学校にも積極的にPRし、連携をとりながら、広く情報の交換や共有を図ること。そして、普段から中高生の個または集団のニーズに合った環境づくりや活動への取り組みを展開していきたい。さらに中高生が気軽に来館し、自主的に又は積極的に利用できる児童センターとして、中高生の中高生による中高生のための居場所づくりを目指していきたい。

## 今後の見通し

### <評価・課題>

活動を通して、グループとしての成長とともに、個人の成長を感じる場面が多く見られた。初めて出会った中高生同士が小さなグループを作り、そこから少しづつではあるが、情報を発信したり、それぞれの想いをカタチにし「自己実現・自己表現」できたことが彼らの自信になった。短期間に少人数でこれだけの活動へ取り組むことは容易ではなかったが、今後も「自分たちの居場所・仲間づくり」としてのカフェの定着を目指したい。「広報や募集の仕方・開催時期の検討・ニーズの把握と内容の選択」などに検討課題を感じるもの、活動のプロセスの中で彼らがどう思い・何を感じ・どう変わっていくかを大切にしながら、今後、中高生の活動を継続するにあたっては今以上に職員のファシリテーションスキルを身につける必要があると感じている。

### ◇子ども達の感想

どれも初めて経験することばかりで、新しい仲間と活動してたくさんの出会いや楽しさを見つけら

## 小城市 児童センター「ゆうゆう三日月」 の紹介

### 地域のプロフィール

佐賀県のほぼ中央にあり、佐賀平野の西端、県庁所在地・佐賀市に隣接していて、佐賀市の西方約10km、車で20分の位置にあり、福岡市へ70km、長崎市へ100kmの距離にある。ここ10年ほどでベットタウンとして急速な宅地化による人口増加の一方で、年少人口は減少していて、核家族世帯は全体の60%を占める状況である。(2005年に旧4町が合併し現在の小城市となる。) 県内の児童館26館内、小城市は1館のみ。



### ◇佐賀県小城市

人口 約4万7千人

面積 95.85平方キロメートル

公立小学校8校・同中学校4校・県立高校2校

近隣の公共施設 ドウイング三日月

(図書館・生涯学習センター)

小城市三日月野外研修センター

保健センター「ゆめりあ」

### 児童館のプロフィール

#### ◇小城市児童センター

建設に向けて足掛け3年の検討に基づき平成15年5月に大型児童センターとして開館。建物740m<sup>2</sup>(乳幼児室・図書談話コーナー・集会室・遊戯室・創作活動室・音楽スタジオ・地域活動室・相談室等) 職員8名がシフトで勤務。開館は10時から19時まで(日曜日は18時/小学生以下は17時まで→夏期18時)となっており、毎週火曜日・祝日の翌日は休館日。昨年度の利用者数は35,615人。平

日の午前中を中心に乳幼児の親子で参加するプログラムを実施。小学生の利用は土日や平日の午後に多く、遊びの支援や体験活動を行っている。中高生の利用は19時までとなっていて、スポーツや音楽スタジオの利用など自由な時間を過ごしている。児童館活動には、地域の人がサポートとして活躍している他、子どもたちの自主的な参画と運営のもと児童運営委員活動も行っている。主な活動は表のとおりである。

#### 平成20年度 小城市児童センターの主な活動

活動	講座名	対象
子育て支援活動	・ゆうゆうベビーズ	乳幼児と保護者
	・ゆうゆうきっず	
	・子育て講座	
	・リズムであそぼう	
	・育児相談	
	・おはなし会	
創作・体験活動	・今月のやってみよう	幼児以上
	・一輪車教室	
	・絵手紙のじかん	
	・スポーツの日	
	・木工教室・手芸教室・料理教室 (登録制のクラブ活動)	
	・あみもの・華道・茶道・手話	
イベント	・スタジオ利用講習会	小学生
	・こどもまつり(5/3)	
	・ゆうゆうフェスタ(12/20)	
ボランティア	・ティーンズフェスタ(12/21)	中高生
	・児童運営委員会 イベントの企画・運営や日常的なサポート 及び地域行事への参加	
		小学校 高学年以上



◆日 時	平成20年11月5日(水)・6日(木) 13時～17時
◆場 所	札幌エルプラザ4階 札幌市北区北八条西3丁目
◆参加者	43名(行政7名 児童館34名 団体2名)
◆協 力	財団法人 札幌市青少年女性活動協会
◆後 援	財団法人 児童健全育成推進財団

講師：水野篤夫氏（京都市ユースサービス協会）

## 1 地域における中高生活動の意義と展望

### ●なぜ今中高生と関わることが必要なのか！

- \* 中高生は子どもから大人への一番大きい変化の時期、だからとまどいも大きい。特に職業社会や大人社会への移行(境界横断)が多様でストレートではなくなっている。
- \* また、民間、行政の中高生世代へアプローチする活動が減少しており、社会的な資源が乏しい状態にある。

### ●中高生とのかかわり方

- \* ワーカーにとって、メチャクチャな行動をするメンバーに関わるのは恐い事。しかしその行動は「関わってほしい」という中高生のサイン。ワーカーにはメンバーの気持ちを知るセンスが必要
- \* 普段の生活で「疲れやすい」「イライラする」「さびしい」と感じている青少年が多い。このような時期だから、中高生は関わり方が難しく、エネルギーが必要となる対象であることを理解することが大切
- \* 中高生が、大人の目の届く所(施設等)で「悪さ」をするのは、地域にとって良いことなのでは？

### ●中高生の来館

施設にとって中高生を集めるのは、施設が行う「催し」だけではないはず。

- ①自由に来る、自由意志で過ごす
- \* 関わるにはエネルギーがいる
- ②情報提供
- ③ロビー活動
- ④「スタッフ」「ボランティア」として

\* 中高生は自分の意思でやってくる。嫌なら来なくなる。だから施設の姿勢がいつも問われていると考えてほしい。



## 2 中高生活動の展開～その実践と考え方～

進行：寺田陽子氏（財団法人札幌市青少年女性活動協会）

### ●札幌市栄西児童会館 報告者：安田行宏氏

#### 「メビウスサポートチームの活動について」

～小学生時代からの主体的な関わりから、社会参加へ～

小学1年生から6年生の児童館のこども運営委員(メビウス議員)をサポートする、中高生のメビウスサポートチームの活動を、中高生自身が撮影した記録ビデオを上映して報告した。

分科会では、「ロビーワークで来館者の声を聞く姿勢を、日頃から職員が大切にしている。子どもとの関わりの中で



の第一歩は、関わりを持つこと、すなわちコミュニケーションとして、話を聞く・話をすることが館職員として大切」という意見が交わされた。





報告

◆日 時	平成20年12月18日(木)・19日(金) 10時～15時
◆場 所	こどもの城11階会議室 東京都渋谷区神宮前5-53-1
◆参加者	55名(行政3名 児童館41名 その他団体等11名)
◆後 援	財団法人 児童健全育成推進財団

講師：久田邦明氏（神奈川大学教職課程指導室）

## 1 地域における中高生活動の意義と展望

### ●中高生に伝えたい事は

- \*人間の生活には「稼ぐ=お金を得る」と、「仕事=日々の暮らしを支える(公共性)」の2つの側面がある  
「仕事」は地域の人たちによって支えられ、その人達によって子どもが育つ
- \*人間関係には「契約関係=物の売り買い」と「贈与関係=損得抜き、親切にする」の2つの側面がある。  
中学生には、「仕事」と「贈与関係」の大切さを伝えたい

\*児童館は地域にある数多くの施設や団体を視野に收めることが大切。そして連携をとっていくことが大切

#### 【中・長期的な課題】

- \*就労支援の必要性→そのためには「ジュニアリーダー養成事業(地域の担い手づくり)の見直しが必要」  
すなわち、将来の生業の支援。
- \*世間は厳しい。希望が持てない→今地域社会は家業を継いだり、学校の先生や公務員になるのが難しい。  
すなわち、担い手になることにアリティがない。

\*だから、地域社会の再生が必要→「生活共同体としての地域社会の記憶」を生かさなければならない。

### ●中高生活動これからの課題

#### 【スタッフの課題】

- \*自分の力量を知ろう→「大人の定義は自分のできない事を承知している人(自己認知)」だからこそ、地域住民の手助けが不可欠
  - \*「やんちゃな中高生がいるのが、普通の地域社会」必ずトラブルは起きるもの。だからこそ、1人1人に合わせた柔軟な対応が必要。そうした対応は地域住民だからこそできる
- 【児童館の課題】
- \*現代社会は「地域の青少年活動の衰弱化」「学校教育の無力化」により、児童館は無理なことを要求されているのか？また期待が大きくなっているのか？



## 2 中高生活動の展開～その実践と考え方～

### ●東京都世田谷区野沢児童館 報告者：虫生充子氏・市川雄一氏

#### 「NLP(野沢児童館リーダープロジェクト)活動について」

- ～やりたい！発散したい！の気持ちをいかす～
- \*NLPに所属することで、児童館への帰属意識が生まれた。ふらりと来館する中高生が増えた
- \*様々なプログラムを行うことで中高生の達成感や満足感が醸成されている

- \*地域の人たちに中高生を認識してもらう機会が増えた
- \*スタッフが中高生と触れ合う機会が増え、それにより中高生1人1人の姿が良く見えるようになった。



●名古屋市緑児童館（指定管理者：NPO法人 こどもNPO） 報告者：村瀬教子氏  
「中高生の情報誌作りを通して」

～中高生と0(ゼロ)からのスタート～

- \*児童館は中高生と地域をつなぐコーディネーター
- \*中学校や高校、地域へのアプローチ→児童館で待っていても人は集まらない
- \*子どもと作業するときは忍耐が必要→遊び

が半分以上であることを認識（エンジンがかかるのを待つ）

- \*中高生をその気にさせる方法→一緒に作業すること
- \*子ども同士の触発→交流会などを開き、顔合わせする機会をつくる



●世田谷での活動を中心 報告者：澤畠 勉氏

「問題児達との出会いを通して」

～自分の価値観からはみ出す子どもとどう向き合うかが勝負～

- \*中高生達と児童館のスタッフだけで向き合うのは無理な話。地域の様々な人とつなげていくことが大切
- \*児童館スタッフは、地域社会に雇われたお寺の住職みたいなもの、地域住民をどう中心に据えるかが課題
- \*夏のキャンプリーダー募集は葉書きでお説明をしていた。「今でも君とつながっているよ」というサイン
- \*児童館スタッフは「子どもをどう理解したか」ではなく「子どもにどう理解されたか」が大切。そのためには、上っ面のつきあいではなく「自分自身の一番大切にしているものは何か」自分で理解し、示していく必要がある。



### 3

講師：加留部貴行氏（NPO法人ファシリテーション協会会長）（九州大学ユーザー・サイエンス機構特任准教授）

## 中高生活動を促進させるスタッフのかかわり方

### ●ファシリテーションは引き出す力

～ファシリテーターは心理戦。「場の空気」を読む～

#### 《ボランティア再考》

- \*自由意志という意味のラテン語。さらなる語源「volo（ウォロ）」→「喜んで～する」という意味  
中高生を「volo」にいくように「いざなっていく」のが私たちの役割
- \*引き出す力は2つ。「聴きだす力」と「書き出す力」それを意図的にやるか、どうかが大切

\*チームの成果が最大となるよう促す

ファシリテーターはチームのプロセスを「交通整理」する。線路でもなく、放牧でもなく、ガードレールになろう！



### ●ファシリテーションとファシリテーター

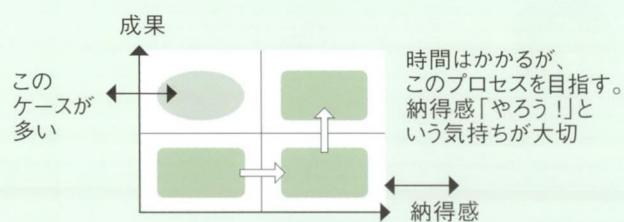
#### 《ファシリテーションの語源「ファシル」…「easy」という意味》

- \*「促進する」「助長する」「円滑にする」→「芽吹かせる」「その気にさせる」
- \*その機能を担うのが、ファシリテーター（支援者・促進者）  
《ファシリテーターの役割》
- \*中立的な立場で（テーマに対して中立・メンバーに対して中立）→一番難しい
- \*チームのプロセスを管理（雰囲気・ルール等、話し合いを進めるためのいざない、中身は誘導しない）
- \*チームワークを引き出す（相互作用を促進して）

### ●ファシリテーターがなぜ「プロセス」に着目するのか

\*チームの力を引き出すのは「コンテンツ×プロセス」の相乗効果

\*「コンテンツ（成果）」もさることながら、「プロセスにおける納得感」を引き出すことが大切





◆日 時	平成21年1月15日(木)・16日(金)13時30分～17時45分
◆場 所	京都府立総合社会福祉会館 ハートピア京都 京都市中京区竹屋町通 烏丸東入る清水町375
◆参加者	47名(行政6名 児童館37名 団体4名)
◆協 力	社団法人 京都市児童館学童連盟 財団法人 京都市ユースサービス協会
◆後 援	財団法人 児童健全育成推進財団

進行：京都市中京青少年活動センター 大場孝弘氏

## 1 中高生活動の展開 ~その実践と考え方~

### ●京都市新道児童館 報告者：川畠依子氏

プログラム「新道ドリームデイ」を通して深まった中高生活動の報告を行う。「来館者を増やす試み」「継続的な来館の促進」について、小型児童館ならではの「地域とのつながり」や「コミュニケーション」を足がかりにしながら、中高生の来館を促している。「居場所を求めて来館している」

中高生に対し、居心地の良い居場所づくりを目指し、スタッフの関わり方については、「スタッフと信頼関係・親しい関係を築く」「認められている実感がもてるようする」「本人の得意分野を活かす」「中高生のニーズを捉える」ことの重要性を語る。

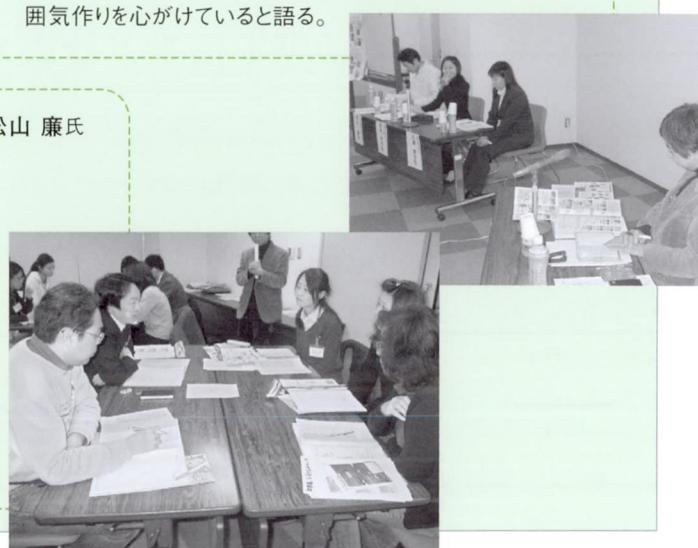
### ●宝塚市大型児童センターフレミラ宝塚 報告者：田所令子氏

スタッフと中高生が一体となって実施した「フレミラ茶房」から、更に参画を進め、外部交渉や助成金獲得も含め中高生が主体的に行った「SOUNDS OF TEEN」へと発展していくまでの流れを報告。中高生が「やらされている」印象が無いことで活動が広がった。活動の継続のため

に、参加者の好きなことを大切にしながら、当日以外の役割も決め、「誰かに必要とされている実感を味わう」ことに重点を置いている。施設は1つの「小さな社会」であり、中高生にとって「安心できる居場所」であるよう、スタッフも雰囲気作りを心がけていると語る。

### ●京都市山科青少年活動センター 報告者：松山 廉氏

中高生が孤立せず、との出会いの中で様々な価値観と出会うために、中高生の来館促進の方法を「広報」と「ロビーワーク」にポイントを絞って発表。広報は学校と連携をとり、地域の中学生全員に広報誌を配布するなどを入れている。ロビーワークについては、窓口対応や来館者への関わりの重要性を説いた。目的無く来館する中高生に対し、スタッフが地道に関係を作り、時に悩みを聞きながら関係を深め、そこから様々な事業への参加を呼びかけた事例を交えて報告。スタッフ以外の人と出会い、様々な価値観と触れ合うことの大切さを語る。



## 2 中高生活動を促進させるスタッフの関わり方

### ファシリテートの意味

促す・容易にする(合意しやすくなる)→参加を促す・関わりを促す・力の発揮を促す  
大切なことは、「行動を変えよう!」と思う『気持ちの変化』を促すことであり、  
ファシリテーターは情動に対してアプローチするということである。

シチズンシップ共育企画 川中大輔氏、松村幸裕子氏

**ファシリテーション・4つの基本スキルとその順序**

- ①傾聴 何を言おうとしているのか・何を考えているのか捉える
- ②観察 「していること(コンテンツ)」ではなく、「起こっていること(プロセス)」を観る
- ③質問 表情・態度などのデータを参考に、相手の考え方や感情を引き出す投げかけをする
- ④介入 膠着したり、揉めているところで場を整理し、まとまるように促す

傾聴の障害となるものを取り除く

中高生活動の何をファシリテート(促進)するのか  
中高生の「グループ活動」におけるファシリテーション

中高生自身の学び → 生きていく上の「学び」  
・実体験を教材とした「学び」=体験学習



「体験学習」の循環過程(EIAHE'プログラム)

①体験 → ②指摘 (気付き) → ③分析 (学び) → ④仮説化 → ①体験…  
「やってみよう」「あんなことしたな」「なんでだろう?」「今度はこうしよう」

中高生グループの相互作用 → メンバー間の主体性の『温度差』を調整する  
・メンバー個人の中の『変化』を共有する

中高生グループの主体性 → 「やりたい!」「やらねば!」という気持ちを引き出す。



●「主体性」を育むための8つのヒント

- ①いがなる時かを見極める
- ②何を得ているのかを考える
- ③本当は何をしたいのかを確かめる
- ④当事者以上に「本気」に関わる
- ⑤多くを期待する
- ⑥「オフ」もつながる
- ⑦付かず離れず
- ⑧存在は無条件で認める

待つべきか促すべきか、状況や個人の中の変化を見極めて関わる。  
「体験学習の循環」をどのように進めているのか見極める。  
活動する事自体が目的となっている場合に、問い合わせる。  
大人が本気で取り組まないと、中高生は手を抜いてしまう。  
大人が「どうせ中高生」と思うから、中高生自身も「ここまで」と思う。  
仕事上の付き合いだけでなく、人ととの付き合いを大切にする。  
依存され過ぎず、逆に無関心でもない人間関係を築く。  
「○○だから良い」と条件付で認めるのではなく、存在自体を認める。

### 3

## 地域における中高生活動の意義と展望

NPO法人こどもNPO事務局長 原 京子氏

### 現代の中高生

### 中高生の力を引き出す (ファシリテーターとして)

### 地域の相談役として (コミュニティワーカーとして)

# 児童館における 中高生のボランティア活動 活性化事業のまとめ

1

## モデル事業

**〈事業概要〉** モデル事業は昨年度の調査を受けて、児童館の中高生世代の子どもたちへ実際にアプローチする手法を実践する場とすることを目的にして、こちらからの協力依頼に対して、全国の児童館の中より呼応していただいた各地の児童館で実施した。選出の基準としては、地域の中で活動する標準的な児童館をメインに考え、すぐに実践へ活かせることを考えて調整をした。地域的にも都市部での実践ばかりではなく、都市部を少し離れた郊外など、さまざまな候補地を考え、また幅広く全国を網羅するように設定をした。

**〈内容の設定〉** 活動内容として具体的な活動については特に縛りを設げず、その館の現状を活かして、そこから中高生世代の活動を更に活性化することを考えた。例えばモデル事業の実施館については、既に中高生を含む活動について実践がされているところもあったが、現在は居場所的な機能のみに留まり、新たな展開を探っている館やグループが存在していても児童館の活動補助がメインで満足し、ほとんど自主的な活動は行われていない現状の館などもあった。また、中高生世代の利用があるが、これを機会に積極的な活動へ踏み出す児童館もみられた。このように、中高生世代への活動のアプローチについては、さまざまなスタートから取り組むことが、他の児童館の実情に合わせた実践例をつくることができると思ってモデル事業へ取り組んだ。

**〈事業の展開について〉** 実施に際しては、さまざまな手法、それぞれの事業展開があり、とてもバラ

エティに富む実践例を残すことができた。事業展開の具体的な事例紹介だけでも価値があるが、本事業では事業実施当日だけに留まらず、スタッフと中高生世代のメンバーがその事業を進め、達成するまでのプロセスに着目し、その活動を記録し、併せて発表できるようにすることを事業のひとつとして考えた。これは中高生世代の活動は、彼らが活動という行為のプロセスを通して育っていくことが大切であり、メンバーや大人を含めて関わる人々との人間関係の中でどう成長し、どう自主性や能動的な力を高めていったかを振り返る必要があると考えたからだ。つまり「事業をする」というより「どう事業をつくるか」に焦点をあてて実施した。今回の事業では、メンバーの育ちや気付きなど、プロセスをできるだけ記録に残せるようにし、専門職としての育ちをサポートできるよう実践をした。

**〈事業の継続性〉** 各モデル事業については実際に20年度事業とはいえ、事業の委託契約等の都合があり、時期が年度当初からのスタートが困難だったため、最長でおおよそ半年に渡る期間の実施となつた。それぞれが上記のように継続した活動へ取り組んだが、実際の効果については短期間のため十分な検証や成果を上げきれなかったところもあるのも事実であろう。これは中高生世代の活動について、上記のとおり継続が大切であり、即効性を望むことが難しい活動であることが要素として挙げられる。これを機会に中高生世代に対する事業を継続し、定着することがこの事業の本当のねらいであり、また願いでもある。

2

## ファシリテーター講習会

**〈事業概要〉** モデル事業では、児童館の現場を利用し先駆的な事業展開を通して一般的な児童館における事業のあり方を模索し、活動の導入を啓蒙することが目的であるが、更に児童館の専門性を活か

し、より現場へ中高生の活動について広げる方法として、直接中高生に関わる指導者への講習を全国で行い、中高生世代への活動のアプローチの機会を増やすことを目的に講習会を実施した。

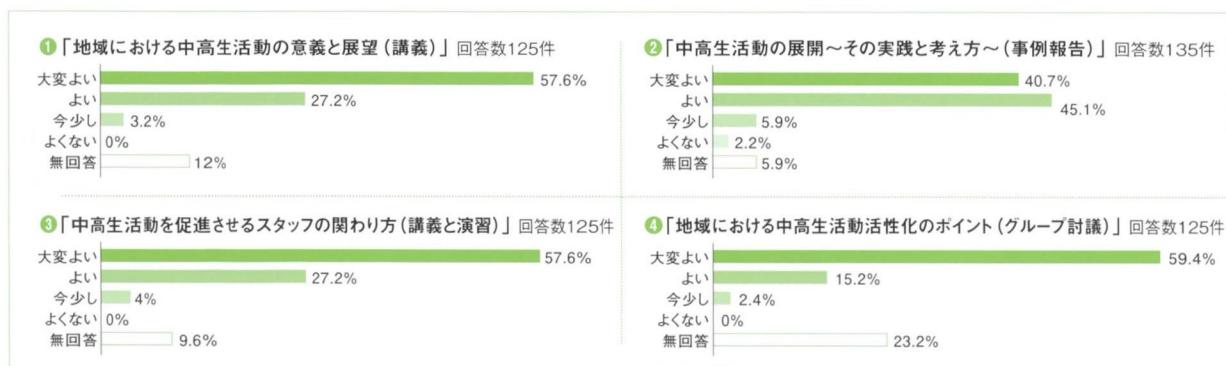
**〈内容の設定〉** 具体的な内容としては共通の項目として、講習会実施地周辺での先駆的な事例研究を通して、活動の活性化し自館の活動へ参考とすることや基本的な考え方について運営委員の先生方にご講義いただいたり、活動展開のための基本的な考え方や活動のヒントをつかむための参加者同士の討議などを実施した。

また、講習全体を進める考え方としては、中高生世代という少年～青年期にかかる自律性・社会性の育つ難しい時期の子どもたちを対象としているため、指導者への講習について、中高生世代へ関わるためのスタンスについては運営委員会でも話題になつた。講習を展開する考え方としては「指導×援助」「メンバーの自主性×職員の指導性」などがキーワードとなり、「コーディネーター」「スーパーバイザー」など、意味としてどの語句が適当なのかを検討した。最終的には中高生世代に関わる指導者として関わる者として「ファシリテーター」（促進者）としてのス

タンスを中心に講習を考えることとした。

**〈講習会への期待〉** 各講習会を実施する際に、申込者に「本講習会に期待への期待、中高生活動の悩み等」についてアンケート調査を行い、講習会に対するニーズの把握に努めた。札幌・東京・京都、3つの講習会を集計した結果、一番件数が多かったのが『支援方法・関わり方』に対する期待だった。また「『事業の企画運営やプログラム展開の方法』についての期待、『この世代のニーズをどう捉えるか』への期待が次に多い件数だった。

**〈講習会のアンケート結果〉** 各講習会終了後にアンケート調査を実施し、内容の評価を行つた。各講習会で実施した4つの講義やワークショップのテーマは共通にして、講師等だけを変えて実施した。各講習会を集計した調査結果は次のようになつた。



どの講習も、80%近い受講者が「大変よい・よい」と答えている。このことから、今回の内容が概ね受講生のニーズを満たした内容だったことがわかる。特に今回は、児童館スタッフには比較的馴染みの薄い「ファシリテーション」という援助技術を取り上げ、「中高生活動を促進させるスタッフの関わり方」とい

うテーマで実施したが、85.6%の受講生が「大変よい・よい」と答えている。事前調査で高かった『支援方法・関わり方について学びたい』というニーズに適合した結果だと考えられる。また、「意見、感想」の欄では受講生同士の情報交換、意見交換をもう少し多く取り入れて欲しいという要望も多かった。

### 3

## 運営委員会について

**〈運営委員会概要〉** 運営委員会は、実施主体である「こどもの城（財団法人児童育成協会）」だけで本事業を企画・運営することなく、中高生世代への活動の展開の視点を確認し、更なる可能性について広げるため、外部から青少年の活動に対して造詣の深い専門家と中高生世代の事業を実施している実践者（モデル事業代表者を含む）をスタッフとして迎えて運営委員会を組織した。委員は計11

名で構成され、本事業を発展させ円滑に進めるため、事業の方針や基本的な考え方から具体的な内容に対して、実際に事業を具現化する事務局の求めにより、指針や内容について検討・討議・助言などをするための機関である。事業計画に応じて活動の節目に運営委員会を計画し、年度内に4回の会議を実施した。

## 【運営委員会の内容】

- ◆第1回運営委員会（平成20年7月1日 17:30-19:30）
  - ◇本事業概要説明と質疑応答
  - ◇モデル事業報告と活動記録について意見交換 他
- ◆第2回運営委員会（平成20年9月26日 14:00-16:00）
  - ◇モデル事業経過報告 ◇活動の記録について
  - ◇ファシリテーター講習会について 他
- ◆第3回運営委員会（平成20年12月2日 14:00-17:00）
  - ◇ファシリテーター講習会中間報告 ◇モデル事業経過報告 ◇活動の記録について
  - ◇報告書の構成・内容について ◇報告書掲載記事「一問三答」回答の検討 他
- ◆第4回運営委員会（平成21年1月30日 17:00-20:00）
  - ◇ファシリテーター講習会報告 ◇モデル事業報告 ◇報告書について 他
  - ◇マニュアル作成に向けてのワークショップ = 「場所」「プログラム」「活性化の要素」の3つの視点での概念図の作成のための意見交換

## 【運営委員一覧（敬称略）】

## 〈有識者〉

- 吉澤 英子（大正大学名誉教授）  
 久田 邦明（神奈川大学講師）  
 水野 篤夫（財団法人京都市ユースサービス協会）  
 勝部 久美子（特定非営利活動法人市川子ども文化ステーション事務局長）  
 原 京子（特定非営利活動法人こどもNPO事務局長）  
 藤井 玄（独立行政法人青少年教育振興機構  
 国立オリンピック記念青少年総合センター事業推進課企画指導専門職）

## 〈モデル事業代表者〉

- 三浦 雅司（北海道・札幌市苗穂はるにれ児童会館）  
 市川 雄一（東京都・世田谷区野沢児童館）  
 村瀬 教子（愛知県・名古屋市緑児童館）  
 山岡 史絵（愛媛県・松山市中央児童センター）  
 下村 由貴子（佐賀県・小城市児童センター）

4

## 終わりに

今年度事業の総括として、次の点を述べておきたい。

第1に、現代社会において、特に中高生世代の育ちがますます不安定になってきていることを、それに関わるスタッフは十分に認識する必要があるということだろう。昨年度の実態調査でも明らかになったように、中高生世代への行政、民間を含めた支援体制が非常に希薄になっていることや、地域社会の弱体化、不安定な社会構造が、彼らの育ちをさまたげていることは確かな事実である。更に、大人にとって扱いにくい年頃である中高生世代は、専門職も含めた地域の大人に敬遠されがちで地域に居場所がなくなっていることも事実だ。児童館を含めた中高生世代に関わるスタッフは、こうした事実を正確に捉え、今こそ計画的で先駆的な事業を開発、運営していく必要があると考えられる。

第2に、「居場所」づくりから事業を始めていく視点が重要だという点である。この視点は、特に先駆的な考え方ではなく、児童館等の地域組織は、従来から取り組んでいた事業である。しかし、本事業で明らかになったことは、そうした事業の目的、方法論等を体系的に整理し、中高生世代のニーズ、置かれている状況を考慮しながら、段階別に事業運営を行う必要があるという点だろう。施設の過去の実績やスタッフの経験だけに頼った事業運営では、現代の彼らを援助しきれないのは事実である。児童館等、この世代を援助する施設、団体のますますの専門的支援が必要になってくる。

また、「居場所」づくりを強化すると、そこに関わ

るスタッフの専門職としての力量が、比例して重要な点も見逃せない。居場所とは1人1人にとって居心地の良い場所であることがまず大前提である。そしてそれは良好な人間関係に支えられていると言えよう。この関係作りの第1歩にアプローチしていくのが、スタッフである。様々なニーズ、不満、課題、希望を抱えた彼らと向き合い、信頼関係を結んでいくための援助技術と技能の向上が今後問われていくと考えられる。

第3に地域社会の再生という点を挙げたい。地域から青少年の居場所が消え、それがますます地域の弱体化を生むという負の連鎖が起こっているのが現代社会である。地域社会で中高生世代が生き生きと育つためには、基盤である地域社会の土壌が豊かになる必要がある。その土壌は、地域に住む様々な人たちの豊かな人間関係が肥やしになって初めて生まれてくるのだと考えられる。その人間関係の中には、中高生世代が含まれていることは当然のことだろう。特に子どもから大人へと移行していく一番重要な世代が、地域社会で育まれることは、健全な社会づくりに欠かせない事実だと考えられる。児童館等の施設・団体が、地域の様々な人、様々な機関とネットワークをつくりながら、中高生世代の育ちを援助し、同時に地域社会の再生を目指していく必要があるだろう。

最後に、本事業運営にあたりご協力、ご後援をいただきました、運営委員、各団体の皆様、そして、ファシリテーター講習会での講師、参加者の皆様に心より感謝申し上げます。



地域に発進!!  
中高生世代  
居場所からの  
1・2・3

発行日  
平成21年3月1日

発行者  
こどもの城(財団法人児童育成協会)

助成  
独立行政法人福祉医療機構

編集  
こどもの城 企画研修部

住所  
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1  
TEL 03-3797-5675 / FAX 03-3797-5676

デザイン  
Kuwa Design

印刷  
株式会社第一印刷所